

---

# シュミレーション・リンク

黒枝 庵

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シュミレーション・リンク

### 【Nコード】

N2724X

### 【作者名】

黒枝 庵

### 【あらすじ】

周りの人間とは比較にならない怪力の両腕を持つことにコンプレックスを抱える織笠悠。彼は自分の身に余るその力が嫌で、何かと理由を付けては目を反らしながら生きてきた。

しかし、いつまでもそんな化物のような力を隠してはいられない。学園内では一際浮いている問題児として誰もが彼を恐れ、避けていた。

そんな高校二年生の始業式。悠だけがその存在を知らない少女、乃瀬ヒカリと出会う。一風変わった感じのヒカリ。その帰り道、悠は

何の前触れもなく命を狙われ、そして謎多きヒカリに助けられる。  
この出会いが「織笠悠」としての新しい人生のスタートであった。

## 0 - 1 (前書き)

作者のご都合設定もあります。なるべく日にちを空けずに投稿したいと思います。

憧れたのは果てしなく遠い父と母の背中。到底追いつけない存在。

異国の地でテロリストに囚われ、泥だらけになった彼ら兄妹の前に颯爽と現れたのはその二つの大きな壁だった。何者も崩すことなど出来ない頑強な双壁が囁く。

「おおおお、我が息子ながら情けねえ顔してんなあおい。だが、男として女だけは死ぬ気でも護るって最低ラインはクリアしてるみたいじゃねえか」

幼い彼が押ししても引いてもビクともしなかった鋼鉄の扉を蹴破った父の持つ直剣が赤く熱を放っている。

「ふう、無事みたいで何よりだわ」

「当たり前だろ、なんたって俺の息子だぜ？」

父に続いて薄汚い小部屋に入ってきた母の優しい顔が二人に向けられた。

まったくもって緊張感の欠片も感じない。ここがテログループの隠れ家だということを忘れてしまいそうだ。

「いいな、男ならば誓いと愛する女だけは死ぬ気で護れ」

大きな手が彼の頭に置かれる。必死に妹をかばい顔に痣を作った彼の目が潤み始めた。

なんて、なんて大きいんだ。

「あら〜そんなこと言ってその女に護られてばかりなのはあなたの方じゃないの?...いい、女なら護られるばかりじゃなくて、いつそ全てを包みこむくらいの優しい強さを持ちなさいね」

母の笑顔が彼の後ろで震えていた妹に向けられた。

「ようするに、取りこぼしのないよう己の信じたモノを護れるだけどんな犠牲も厭わず時にはあらゆるモノをぶっ壊してでも片っ端から護り抜けてこつた」

「もう、まだ小さいんだからそんな物騒なことを吹きこまないでよ。いい、お父さんのようになつたら人生損するから真似しちゃダメ」

そして二つの背中是目前に迫つた脅威に真つ向から立ち向かう。

それが始めて見た父と母の本当の姿だった。大切な妹を、自分の身を呈して庇うという最初の一步を踏み出した彼の憧れた理想。

月が明るい午前0時過ぎ、ちょうど日付が変わつたばかりだった。誰も出歩かないようなこんな時間にも関わらず、大型トラックだけは地面を揺らしている。

大通りからちよつと脇に入った公道の真ん中で彼は一人、カカシの様に立ちつくしていた。

「なんだよ、これ」

右手に持ったコンビニ二袋を強く握りしめる。ビニールをクシャッと握った音が無音だった夜へと響いた。

自分で出したその音に彼は驚いて身体を強張らせる。

「俺の頭はどうかしちまったのか？」

いつものように家を出て、夜の街を歩くこと15分。一番近いコンビニでは良く見る深夜勤務の店員が無気力でレジに立っていた。手早く目当ての物を手に取り清算を済ませ、寄り道もせずに戻り歩いて帰るその道すがらだったはず。

もう四月だと言うのにまだ夜は肌寒い。

いつものように100円の緑茶と軽く食べられる夜食を買いに出ただけのはず。それがどうしたらこんなことになるのか、彼は魔境にでも脚を踏み入れてしまったのだろうかと思いはじめていた。目の前の現実を受け入れられない。

さっきまではいつもとなんら変わらない夜の町並みだったはずだった。だが、月明かりも街灯も無い少し薄暗い細道に入った途端、闇に溶け込むようにしてその光景は広がっていた。

瞬く閃光、肉体同士がぶつかり合う鈍い音、そして地面を踏みならず軽やかなステップ。

二人の人間が、取っ組みあっていたのだ。

最初は酔っ払いの喧嘩かと思った。しかし、僅かな月明かりに照らされた一方の右手にナイフが握られているのが見えた。刃は分厚く、明らかに銃刀法違反で捕まるレベルのダガーナイフだ。人の命を奪うのには十分すぎる代物を振りまわしている。

もう一人はその手に何も持っていないが、ナイフを持った相手と真正面から臆せず殴り合っていた。それどころか、軽い身のこなしで冷静にナイフを捌いている。

数秒の立ち回りを見ただけで解るほど、一挙手一投足にまるで無駄がまるでない。一つ一つの動きがバランス最適に動いていた。

彼の立ち位置からでは暗くて人相までは良く見えない。だが近づきべきじゃない、と頭の中で警鐘が鳴る。しかし、引き返そうとした足は好奇心からか、いつの間にか闇の中へと踏み入れてしまっていた。

その瞬間、殺し合いを演じていた二人の動きは静止し、四つの目が一斉にこつちへ向けられた。

嫌な沈黙が流れる。彼も、闇の中にいる二人も硬直している。

「あーそうだ。確か亜紀がアイス喰いたいって言ってたな、うん。アイツに土産を買っていくのは癪だが、この際だし買ってきてやるかなあー」

何も見なかった風を装い回れ右。

冷や汗が止まらない。背中には依然としてじつとりとした視線が張り付いてくるようだった。

彼の脚は、何かを考えるよりも速く動いた。

学園の体育祭で駆けたクラス対抗リレー時の馬力なんてまるで目では無い。今ならば自己最高記録のタイムを叩きだせる気さえする。正に風を切って走るとはこの事だ。

「やばい やばいやばいやばいぞ！あいつ等狂ってる！」

この平和ボケした国の少しだけ田舎な町で雑技団もビックリな立ち振る舞い。まるで舞台上で役者が劇を演じているような殺し合いだった。だが、ここはただの夜の街の一角。その絵は異常でしかない。脚は動くがどこに向うかなど見当をつけていない。けれど逃げなければ、という恐怖が背後から迫っている気がした。

このまま家へ全力疾走をかますのは危険だ。わざわざ家までナイフを持った輩をご招待しようとは流石に思わない。

悩んだすえに、取り敢えずの目的地を決めた。その道順を頭の中



で思い浮かべる。

「  
」

すると、耳元で息遣いの様なものが聞こえた。

「  
え」

突然の気配、月に照らされて輝くそれは銀色の

後ろを振り返る余裕なんて微塵も無い。

依然続く全力疾走でもう彼はへろへろだった。基礎体力を見直す必要があるが、命と天秤にかければまだまだイケそうだ。

見なくても感覚でわかった。軽い足音は確実に後を追って来ている。最初の一撃を避けてから随分と走った気がするが、まだ諦めてはくれないらしい。

「クソが！なんなんだよ、たかが夜遊び程度で殺されてたまるか！」

頭上では、鈍く輝く月の光が彼の走るアスファルトを照らしてくれる。厚い雲が大空を支配しており、時折現れる月が臃げに顔をのぞかせていた。

だが、彼はそんな幻想的な大空を眺めている余裕さえない。気を抜いたら死ぬ。

気がつけば、最寄駅へと続く繁華街へと突入していた。昼間から夕方にかけて多くの人で賑わうこの繁華街だが、今は出歩いている者など一人もいない。

まるでゴーストタウンだ。鬱陶しいネオンの明かりもない町は完全に静まりかえり、まるで別世界に見える。

(やばい、そろそろ息が)

繁華街の根幹を成すショッピングモール、その中央を貫通する大通りから建物と建物の間にある細くて複雑な小道へと転がりこんだ。少しでも細い道なら、複雑な町並みを利用して撒けるかもしれない。体力が限界へ近くなり、視界の拓けた場所では不利だと判断し

てのルート選択だった。何度も角を曲がり、枝別れした道をぐちゃぐちゃに通る。

「はあ…はあ…いいかげん諦めて」

夜風の中で耳を敬てる。だが、背後から聞こえてくる足音は依然途絶える様子はなかった。

「くれないよな。だあしつこい！」

これ以上出鱈目に走っては目的の場所から離れてしまう。それでは撤退した意味がない。彼自身が何処を走っているのか解らなくなる前に、なんとか軌道を修正しないといけなかった。頭の中にある記憶を頼りに、目的の場所へ足を向ける。

しばらくの間そうして追いかけてくを続けていき、なんとか目指していた場所まで着くことが出来た。

ショッピングモールの中央をぶち抜く大通りからは少し離れた小道。道の周りは高い塀に囲まれている。そそり立つ壁に見下ろされるながら、彼は道を更に奥へと進んだ。

「うち、ここまで執拗に追いかけてきやがって」

膝に手を付きながら呼吸を整えると、彼から数メートル離れた所で足音は止まった。30分近くを全速力で走ったので、心臓が爆発しそうなほど高鳴っている。

煮え切った頭の熱を一度冷ます為、乱れた息のまま空気を大きく吸い込んで酸素を欲している身体に十分送りこんでいく。過剰に分泌されていたアドレナリンが次第に鎮静化していき、乱れた息は整っていった。

意を決して振り返る。

「  
」  
そこにはしつかりと、ナイフを持った不審者が立っていた。  
いままでは逃げるのに必死なのと暗闇でその姿は見えなかったが、  
偶然にも掛かっていた雲は消え、月明かりを妨げるものなどない。  
だからその容姿は良く窺えた。

「……どこのモンだ、あんた。まだ学生の相手をするにはちょっと本  
気過ぎるんじゃないのか？」

全身が黒を基調とした格好で統一されている。上から下まで全身  
黒づくめだ。ジャケットの様な物を着てフードを被っているから素  
顔は見えないが、背は低くて小柄。

ナイフを持った不審者は、ゆっくりと顔をあげる。するとそこに  
あったのは紅い一つ目。禍々しいまでの目が彼を睨んでくる。

どうもマスクの様な物を被っているらしかった。紅くて小さなレ  
ンズの右目が、不気味に収縮を繰り返してこちらを観察でもしてい  
るかのよう。あまりにも異常なその姿に、不気味さしか感じられな  
い。気味が悪く、完全に紅い目は彼を殺す気であるようだった。

揺らぐ淡い月明かりに浮かぶ黒いシルエットは闇そのもの。時折、  
空にある雲を通して降り注いでくる月の光は水面の様に揺れ、地上  
の影を歪ませている。

「なあ、そろそろ鬼ごっこは終わりにしようぜ？」

嫌な汗を流しながら、彼は覚悟を決めてゆっくりと両腕を上げて  
みせた。両手の人差し指が指し示すのは、両脇の高い壁。そこにあ  
るモノを教えるように。彼は自分の頭の丁度斜め上辺りを指す。

紅い目は重たそうな頭を上げてそれを見ていた。

一つの挙動を見逃すまいと、彼は神経を張詰める。これ以上の追いかけっこはもう限界だった。見て解る程身体は悲鳴を上げ、もう逃げる体力なんて残っていない。彼とは違い、紅い目に疲れという二文字は影さえ見えなかった。まるで呼吸すらしていないようだ。ここまで体力差があるのだから逃げ切れない。

だから彼はココへ来た。成功するか失敗するかは解らないが、この現状を打開することくらいはできるだろうと踏んでのことだ。

「見えるか？この両壁に付けられている二つの装置。小さくてわかりにくいが警備用の赤外線センサー。今俺が立っているここから先、堂々と不法侵入者が入り込んだ場合に備えての警報ってわけ。もうこんな時間に入入りする者なんていないからな、敷地内へ不法侵入した俺を機械はどう判断すると思う？」

一瞬だったが、紅い目が僅かに息を呑む音が聞こえた気がした。

(いける か)

「よし、ならばはそのまま諦めてくれ。解つてるとは思うけどな、俺は何が何でも生き延びてやる。俺をこのまま追つても徳をしないのはアンタの方だぞ。俺も不法侵入で留置所くらいにはブチ込まれるだろうが、奴らもそこまで横暴じゃないし馬鹿でもない」

「  
」

だがしかし、紅い目はナイフを収めるどころかその握る手に力を

込めていく。冷たい夜風が更に冷たくなっていくかのような殺気ま  
でおまけに付いてきた。まるで、早急に彼を始末しようとしている  
かのような気合いの入れようだ。

「お、おい…本気か？」

紅い目の持つ刃物に対し、彼は対抗出来そうなものなど持ち合わ  
せてはいない。そもそも、彼は門限破りで出歩いていただけだ。補  
導される覚悟はあっても、まさか命を狙われるだなんて誰が思うだ  
ろうか。対峙するにはあまりにも危険、だが夜勤の者が来るまでは  
この身一つで乗り切るしかない。

「最悪な夜だぜ。まったく」

彼は拳を静かに握った。

まだ殴り合いに持ち込めばこちらに分があるかもしれない、しか  
し状況はどうみても圧倒的に不利である。紅い目の手にあるのは鋭  
利な凶器、簡単に人を絶命へと追い込むための物だ。

(…最初の一撃だ。それで決める)

彼に抵抗の意志があると悟ったのか、紅い目は待ちに待ったとば  
かりに身体を少し沈めて重心を前へ移して行く。そのまま初動無し  
での、気持ちいいくらい真っ直ぐなスタートを切った。そのあまり  
にも爆発的な加速に、彼の反応が遅れる。

「はやッ　いつ！」

鬼ごっこをしていた時には見せなかったスピード。最短最速で先  
ほどまでとは違った危機感が何倍もの速さで迫ってくる。

反応が追いつかないほどの突進力で紅い目の残光が線となっていた。しかし、直線的な攻撃だったのが幸いした。

一点集中。正面にだけ意識を向けていたことが功をそうし、上手くカウンターを叩きこめるポジションへ彼は身体を潜りこませることが出来たのだ。

「直線的に速すぎるのもツ問題だな！」

右膝を立てる。

狙っていたわけではない、ただのラッキーだった。この速さで突っ込んでこられては彼の足も無事では済まないが、それ以上に紅い目に降りかかる衝撃も大きいはずだ。

しかし、彼のラッキーカウンターは予想外にも空を切る結果となった。

気が付いた時には抜群なタイミングで突き出した膝の横をすり抜けられ、背後に回り込まれていた。振り返ると、紅い目の持つナイフがチラつく。背後から急所へ向かう迫力に体が竦んだ。

「なッ！」

紅い目のナイフを、自分でさえ惚れ惚れする身のこなしで横へと身体をずらすことで回避に成功。これこそ正に紙一重と言えよう。

その拍子にナイフの刃先が軽く背中を裂いたが、支障は無い。流石に避けられるとは考えていなかったのか、紅い目の体勢は不安定なものになっていた。その隙、一瞬訪れた好機を逃しはしない。

「死んだらどうしてくれるんだよッ！」

左脇の辺りにあった顔面目掛けて、力を込めた肘打ちを放つ。

回避からの一転した彼の反撃に、紅い目は初撃の時と同様にしっ

かりと対応してみせた。踏み込んでいた軸足を、前への力に反して後へ向けて地面を蹴る。慣性の法則をまったく無視した後退に、前のめりになった状態から胸を仰け反ってブリッジのような姿勢で彼の肘を避けて見せた。

「出鱈目な奴…やっぱりそこいらに屯ってるただのチンピラとは出来が違うみたいだな…」

現時点で、彼と紅い目との間に圧倒的な実力差があるのがこれで証明がされた。体力差、人間離れた身のこなし、得物。全てで彼は劣っている。紅い目の実力ならば、こちらの小さなミスなどあつという間に突かれてしまっただろう。

（それなら、今度は俺の方から攻めに転じて突破口を押し広げられない。受け身に回っていてもジリ貧になっていずれ殺されるだけだ）

スピードと攻撃力を持つ相手に、少しでも追い付くにはラッシュをかけて攻め込む他ない。相手に反撃の隙を与えてはならない。

高く右足を上げた。

「もらった！」

後退して一歩退いた紅い目の顔面を狙った蹴りだったが、首を傾けて簡単に避けられてしまう。

「って！ここでまさかのスカかよ！今日は本当にどうなってる！殺されそうになるった極めつけにしては不運にも程があるっ！」

堪らず絶叫してしまうほど絶妙なタイミングだった。蹴りを華麗



に躲した紅い目は、独楽の様に身体を回転させながら距離を取った。すぐに追撃しようかと思っただが、躊躇われた。彼の身体が攻めることを拒否しているのだ。

紅い目は引き際を心得ているようで、日和る彼めがけて直ぐ攻めへ反転しようとはしなかった。そのまま両者動かず、お見合い状態が数秒続く。

(今度は明らかに警戒されてるか。油断してくれてた間が勝機だったのにな。やっぱ、そう簡単に道は明け渡してくれ…ん?)

ふと、足元に転がっている物が彼の視界に入った。楕円形の、人の顔を模した黒い物体だ。

「マスク？」

拾い上げて見ると、それはついさっきまで見ていた紅い目のマスクだった。近くでじっくりと見てみるとやはり不気味な造りをしている。

視線を、さっきまで同じものを被っていたであろう持ち主へ向ける。

闇の中、見えなかった全容が雲の切れ間から差す月明かりで顕わになった。

案の定、持ち主はナイフを持たない空いた方の手で露わになった顔を隠していた。だが、片手で全てを隠しきれずに半分ほど素顔が露出していた。

可愛らしい、女の子の顔が。

「お、女あ？」

見間違いじゃない。半分ほど見えているのは綺麗に整った顔だった。マスクと一緒にフードも捲れ、長い黒髪が静かに肩や顔へと掛かっている。

それを機に、紅い目への印象がガラリと変わったのは言うまでもない。

改めて良く見れば、ダボダボのジャケットからは解り辛いが身体的に特徴的な部分が多々あった。体付きは細く女性特有のしなやか

な輪郭をしており、着ている黒い服の胸部は申し訳ない程度に主張していた。窮屈な抑えから開放された黒髪は、まるで絹のような木目細かさで背中に垂れている。

そして、印象的なのはその長い前髪の下にある瞳。

綺麗な瞳だ。

その時だった。

まるでダンボールでも引き裂く様なバリバリという不快な音が周囲に響いた。人の神経を逆なでするような音と共に、目の前の少女が、消えた。

一瞬ノイズに意識を持って行かれたただけだ。それなのに目の前にいた少女の姿を探して周囲を見回してみても何処にもいない。

「どこに行つ　ッ？」

次の瞬間、途切れた映像がまるで貼りつけられるような感覚と、小さな衝撃が彼の身体を襲った。何かを貫くような音が遅れて耳につく。

まるで、別の映像が突然割りこんできたような貼り付け感だ。今見ている光景に編集して手が加えられたかのような違和感。

少し遅れてからポタポタという音。

それは、自分の身体から聞こえている。何か熱いものが、神経を突き抜けて脳を爆発させようとしているのがわかる。でも、それがなんであるかわからない。

胸に感じる冷たい触覚は、体の中心を突き抜けていくようだった。その時になって初めて胸に痛みを感じた。視線をゆっくりと下へ。

月明かりに照らされて光る紅黒い液体があった。噴出口からは、紅い衣を纏う銀色の輝きが左胸から肉を破って生えている。裂けた胸は最早ホラーでしかない。

喉の奥から上がって来る熱い物を吐きだした。すぐにそれが死に至る傷だと、彼は理解できた。

「が、はッ」

何かを口に出そうとしても逆流する血によって言葉は塞ぎ止められてしまう。上手く出てきやしない声の代わりに血の塊が噴き出した。徐々に消えゆく感覚。力が抜け、立っていることも上手く出来ない。

(…マズイ、な)

力の入らない足はいとも簡単に折れてしまった。体は重力に従って地面へ倒れて行く。

地面へ倒れ伏す寸前、彼の身体が止まった。今では視界がぼやけ、はつきりとその容姿は窺えないが、どうやらさっきの少女が支えてくれているらしい。

綺麗な少女の顔は血の化粧をしていた。それが何故か美しいと思えてしまうくらい魅力的だ。

「この程度か。この一年で随分腕が落ちたみたいじゃない。怠惰は人間にとってもっとも愚かな行為だっていうのにな」

少女の声は、掠れて上手く耳に届いてこない。停止しかけた思考回路では、どうも少女の言葉を判別することすら出来ないらしい。

(だれ、だ)

血の気を失っていくのがわかる。どうやらいよいよお迎えが来るらしい。そんな彼の冷たくなった頬に両手が宛がわれた。氷の様に冷たい手、そっと頬を包んでいく。

( だれ、だ？ )

もう見えない。

上手く声になってくれない言葉は掠れて虚空に消えていく。

( まあ、いいか…眠りたい )

目蓋が重たくなり始める。

「だが、今だけはその怠惰を許してあげるわ…貯まっていた借りはこれで返せそうだし」

凍える様な寒さ。

少女の声は、いよいよ聞こえなくなっていく。これが死ぬということだと悟ると、初めての感覚なのに何故か冷静でいられた。目を開けることも止めたい。目蓋が重たい。

視界が閉じる前、最後に少女の顔がゆっくりと近づいてくるのが見えた。そのまま、辛うじて顔の輪郭が見えるくらいまで迫ってくる。

どこかで見たことがある気がするが、いかんせん前髪が邪魔で顔の判別が難しい。

「これは、おまけだぞ…」

少女は自分の口で、熱い血に濡れた彼の口を優しく、深く、塞いだ。

永遠の眠りを妨害されたような電流が体に走る。柔らかくて温かい、仄かに感じるオレンジの味に、意識が一瞬だけ覚醒した。

少女の柔らかい、薄紅色の唇が彼に侵入してくる。零距离には少女の顔。目を瞑ったその整った顔立ちは紅く、震えていた。さつき

まで彼のことを殺そうとしていた女の子には到底見えない。

もう少し、この余韻に浸りたかったがそれは許されならしい。  
唐突に、意識は真っ暗に染まってしまった。

人肌や唇の感触、胸の痛み。それら全ての感覚が消えていく。

死を実感することは無かった。その代わりに、最後は仄かな温かさ  
に包まれているような気がした。

目覚ましの爆音が早朝の部屋に響き渡った。

息が出来ずに織笠おりかきゆづ悠は飛び起きた。いつもは居座り続ける眠気が一気に吹っ飛ぶ。

「ッはあ！ゲホッげほ！」

酷い寝覚めに、しばらく咳き込みながらすぐに胸を弄る。

「生きて……る」

まだ喚いている目覚まし時計を壊れるのではないかというくらい  
の力で叩いて止めてみせる。ようやく沈黙したけたたましいベルの  
音が頭の中で反響していた。

喧しかったノイズは消え失せ、その代わりというには面倒な頭痛  
が爽やかな朝の到来を邪魔してくれる。

意識は無理矢理リアルへと引き戻され、長かった悪夢は終わって  
いた。彼の体調不良など知った事じゃない静かな朝である。今日も  
また一日が始まると思うと自然と気分は乗らない。

「…夢か。にしてもなんて夢だよ、朝っばらから低いテンションを  
更に下げやがって……………ねる」

生々しいまでにはつきりと覚えている悪夢のせいでまるで寝た気  
がしなかった。一晩中駆けまわっていた疲れが抜けていないようだ。  
朝の悶々としたテンションはさらにダダ下がり、身体も疲れていて  
休息を欲している。

寝ている間に剥がれたらしい布団を手繰り寄せて被り直す。季節

は四月だというのにまだ朝は冷える。凍えるほどでは無いものの、ここ最近では一番の寒さではなかるうか。体温の残っている布団が最高に気持ちいい。

至福の二度寝タイムに突入しかかったのだが、やはりいつものように戸をノックする音で再び現実へ引き戻される。

「兄さん？ 喧しいですけど、帰って来たんですか？」

まだ寝ぼけている頭に木霊する聞きなれた声。部屋のすぐ外から聞こえてくるハキハキした声は毎日聞いているものだ。二度寝からの夢を見る間も無く、無情にもドアノブは捻られた。

「入りますよ。嫌だと言ってももちろん入りますが」

ノックなど無い。無断でズカズカと悠の部屋へと侵入してきたポニーテールの少女というには精悍だけど柔らかさの残る顔つきの女の子。

「やっぱりですか。どうせ二度寝しているとは思っていましたが」

「… 亜紀、頼むからもすこし寝かせてくれ」

「答えはノー、です。二度寝を決め込んでいるところ申し訳ないのですが、五日間もどこに行っていたかを妹にお話するべきじゃないですか？」

ベッドの傍までやって来ると、彼の妹である亜紀はだらしなく情眼を貪る兄を制するように仁王立ちした。鋭く吊り上がった目で見下ろしてくる。

薄目で見た亜紀の顔は怒っているようにも呆れているようにも見える。



「…… あーああ…夏木達と…な」

「夏木さんですか。別に妹である私が兄さんのプライベートに一口を挟む権利はありませんけど、連絡くらいはしてください。こんな体たらくでだらしない自宅警備員予備軍一歩手前の兄さんでも一応は心配ですから。さあ、いい加減に起きないと新学期早々遅刻しますよ」

無理矢理羽毛布団を引きはがそうとする亜紀に抵抗する悠。両手で羽毛布団を鷲掴みにし、絶対に放してなるものと踏ん張っている。

「む、こんなものを被っているから眠くなるんです。さっさと取っ払ったほうが優柔不断な兄さんでも踏ん切りがきます」

「…い・や・だ」

すると、諦めたのか引つ張る力が緩んだ。どうやら布団から手を放したらしい。

「このダメ人間が…さっさと起きてくれませんか？今朝は忙しいんです」

悠のことを兄とも思わぬ発言である。彼にしてみればもう日常茶飯事で慣れっこなのか反応が鈍い。それよりも眠たいのだ。

「おい神様、実の兄をここまでボロクソに言う無神経で思春期真っ盛りな妹に雷槍でも降らしてくれ……………おやすみ」

布団の中ではそつと呟いた。

「そうですね。あくまでも兄さんが起きないのでしたら、私にもそ

れなりの手段があります」

頭から被った布団の隙間から、能面のような笑顔を張りつけた亜紀がベッドから二歩幅ほど離れるのが見えた。その距離を見測る。

「…あ…ちょ！ま、まった！やめ！」

眠気が一気に吹っ飛び、毛布を撥ね退ける。悠はベッドからフロアリングに向かって全力で飛び出していた。

何故か。それは生命に関わるからだ。こんなくだらないやり取りで夢の様に死にたくはない。悠の絶叫に重なるのは、鉄をハンマーで打つ様な鈍い音と共鳴してなる金属音。それは、亜紀の踵落としが悠のフカフカベッドをV字に変形させた音だった。

クッションになっている綿やスプリングが衝撃に飛び出す。ちなみにこのベッドは骨組が全て頑強な鉄パイプで出来ている金属製で、強度が売りだという謳い文句があったから購入していた物だ。

だがその強度を持ってしてもやはり役不足だったらしい。

目が覚めるには十分な特効薬だった。特効薬だけにその分のリスクは当然ある、命の危機というリスクが。

「あ、あつぶねえええだろが！殺す気だったろ、朝から全力出し過ぎなんだよこの馬鹿力！これで俺のベッドを破壊したの何個目だ！」

「五月蠅いです。朝っぱらから近所迷惑ですからね。私だっていつまでも兄さんなんか朝の貴重な時間を裂かれるわけにはいかないんです。面倒です、殺す気でいきました」

言葉使いが日頃上品な亜紀は、口調を変えずに辛辣な言葉をバシバシと浴びせてくる。笑えないくらい涼やかな笑顔だった。まるで、

亜紀に何か邪悪なものでも憑依しているかのようだ。

「わ、わかった、わかったから。まずはその凶器を納める、これ以上部屋を破壊されて無駄な出費をするのは御免だ…」

ここで妹の機嫌を損なうべきではない。いつもは御淑やかな亜紀がさっきの笑顔を浮かべる時は危険のサイン。夢で殺され、現実でも肉親に殺されそうになるだなんて冗談にもならない。

「そうやってまた逃げる…ホント、腰ぬけですね。いつまでそうやって現実から目を背け続ける気ですか？」

「…喧しいわ。ったく、何で俺の周りはこちらも力に物を言わず奴らが集まってるんだらうか」

「兄さんみたく、自分自信とも向き合えない腑抜けな患者も大概ですけどね。とにかく、時間もそんなにありませんから早くしてください。朝食はもう出来ていますから、着替えてすぐ降りてきてくださいね」

小言を言い始めた亜紀はようやく部屋から出て行った。悠は床に一度腰を落ち着けてから亜紀の力によって昇天した相棒をみる。

「…ベッド、また買い直さないとイケなのかよ」

粉碎された三代目ベッドを尻目に、換気の為に窓を開けて外を見る。雲一つない眩しいまでの快晴。眩しい青空がいくらか気分を良くしてくれるのに一役買っていた。

清明。まさに春の始まりである。短かった春休みは終わり、今日からまた面倒な新学期が始まる。大きなあくびを今一度堪えてから頭痛が退いているのに気が付いた。なんだかんだと亜紀と戯れている内に頭痛は治まっていたらしい。

六畳程の何とも生活感が欠落している部屋を今一度見回してみる。壁に掛けられたカレンダーの今日、四月五日には黒いペンで『始業式。目覚まし時計。起こしませんから自分で起きてください。亜紀』と言う文字が。

なんだかんだと言いながらも悠を起こしに来てくれる辺り、見捨てられてはいなかったのだろう。

「…いつの間に書いてたんだ、あいつ」

生あくびをもう一度零す。眠くて目が閉じそうになるが、ポロポロになったベッドを一瞥する。

「…うん。でも…ああはなりたくない」

寝てしまえば彼に降りかかる結末は明白だ。兄と言えど一切の容赦が無い妹の蹴り。あの削岩機ばりの足を人体に向けること自体が間違いである。全力のものを食らった日には粉々だ。

「でも有り難い半面、もっとスマートに起こしてくれる方法が幾らでもあるよな」

ぶるっ、と竦んだ身体は正直だった。反抗して眠ようという考えは、僅か一秒で取り消しておく。

少し丸まった可愛らしいカレンダーの文字に目を向けながら、部屋の隅に掛けられていた制服を手を取った。アイロンの糊が程良い硬さを作り出しているブレザーとズボン。

悠の通う奏風学園の制服だ。

素早く着替えを済ませ、洗面所の冷たい水で顔を洗う。所用を済ませて、トイレで一度すつきり。全ての身支度を終えてからようやくリビングへと続くドアを開けた。

「あ、やっと起きましたか。おはようございます、兄さん」

大きな窓が特徴な織笠家のリビングに入ると、そこには台所で家事をこなす亜紀の姿があった。付けっぱなしのテレビの音量は、水仕事に合わせて少々大きい。

「おはよ。ほれ、後はやってやるからお前は支度して来いよ」

「いいえ、大丈夫です。今朝の当番は私ですし、残りの片付けもそんなにありませんから。そうそう…兄さんが居なかった間の家事当番、もしもの時の為の貸しにしておきますね」

洗い物を中断し、どうやら悠の分の朝食の準備に取り掛かってくれたようだ。踵落としを見舞ったときの様なドス黒いナニカをチラつかせながらの笑顔に、悠は苦笑いを返すしかない。

織笠家は母子家庭なこともあり、基本的に家事は悠達兄妹で回している。母親は滅多に家に帰ってこないなので、家の事全てと言ってもいい。

悠も何かやるうとはしたのだが、大かたの家事は妹の亜紀が率先

してやってしまうので、悠は当番で振り分けられた分しかやっていなかった。それを亜紀はどうこう言わないし、自分で出来ることは自分で片付けている。

「わかった。えっと、何回分貯まってるんだ？」

「三回です。それくらい覚えておいてください」

そうか、と生返事を返す悠はイマイチ記憶が曖昧だった。

昨日もどうやって家に帰って来たのかが記憶からスッポリと抜け落ちている。また夏木達と飲み明かしてしまったのだろうか。

「あーそれと、ベッドだな。これで何回目だと思ってる？」

やんわりと、自然体を装って話を切りだす悠。

「さあ、もう数えるのをやめました」

そしてあっさりと詫びる様子も無く返事を返す亜紀。

亜紀の脚の犠牲になったものなど数えきれないほどあるが、ベッドは生活の必需品だ。早急に買っておきたい代物。

フローリングに敷いた布団ではイマイチ寝付きが悪いのだ。

「それでなんだが、お前の破壊したベッドを買いかえる為にだな」

「私は1円だって出してあげませんから」

悠の提案は提案する前から瞬殺されてしまった。

「だからなんでお前はいつもいつも自分からぶっ壊しておいて弁償しない！」

「それは兄さんがだらしないせいです。私は無闇矢鱈と壊しはしま

せんよ？私の記憶している限りでは、兄さんのせい、だからです。もっとしっかりしていれば私だって可愛らしい妹で居てあげますけど」

なんとも兄貴思いな妹である。

「なので、兄さんが生まれてから今日までの生きてきた時間〓今回のベッド代だと思って悔いてください」

「俺の人生は3万程度かよ！」

「むしろ3万程度でもありがたいくらいです」

とことん厳しい妹だと改めて思い知った悠は、妹のお小遣いからベッド代を頂戴する作戦を諦めた。

肩を落しながらも、悠もキッチンに入る。

「洗い物を手伝ったりしても払いませんからね？」

「いいよ、お前の可哀想な貯金を見下せる位は貯めてあるからな。

急ぐんだろ、洗い物は俺がやってやる」

「……いちいちムカつく兄さんですね。では、お願いします。特別にこの小鮭をおまけしてあげましょう」

蓋のしてあったフライパンから取り出した湯気の上がる鮭。それに続き、一口サイズのおまけをプラスしてもらった。

この妹、本当に良く出来過ぎた妹である。

悠には勿体無いくらいだと周囲から散々言われているように、血が繋がっているとは思えないくらい優秀で炊事洗濯掃除に勉強スポーツ、あと例外として喧嘩。とにかくなんでもこなせる万能型だ。

もちろんなんでもない朝食にも抜かり無い。

洗剤の着いたスポンジで食器を洗いながら今朝の献立を拝見してみる。

白米に、味噌汁の王道だ。それに加えて半熟の目玉焼きは絶妙な半熟感。ほうれん草のお浸しで朝から緑と気が効く。メインは塩鮭のみりん漬け、食欲をそそる香りが胃袋を活性化させてくれる。それにしても相変わらずの手の入れようだ。時間の無い朝、一体何時に起きているのだろうか。

「あ、そういえば昨夜はお母さんからメールが来る日でしたよね」

亜紀が炊飯器からお茶碗に米を装いながら尋ねてきた。

「… ああ、さっき見てきた。今はギリシヤの辺りで過激派の連中と喧嘩ながら政府の暗部ともやりあっているらしいぞ。それと、次はいつ帰ってこられるかまだわからない、ゴメン、だとさ」

トイレに入る前にパソコンで見たメールの内容を口頭で伝える。

「そうですか。まあ無事なのであればそれに越したことはありません。私も後で見えます。それにしても、相変わらず無茶しているみたいですね」

昨夜送られてきた母親からのメール。内容はいつもと一緒だった。亜紀の諦めにも似た呆れ顔に、悠も賛同するしかない。

子供二人をほったらかしにし、自称冒険家なんてよくわからん仕事をしている心はまだお子様な母親。一年の内に数回しか帰って来られないくらい世界中を飛び回ってはどこかで暴れているそうだ。それでも一週間に一回のペースで自宅のパソコンに電子メールが送られてくるだけ少しは親という自覚があるらしい。内容は生存報告が大半なのが異常ではあるが。

「お父さんの命日までに…帰ってきてくれますよね」



水音に消えてしまいそうな声で亜紀は呟いた。

悠の視界に、リビングの隣にある和室の仏壇が目に留まる。

「帰って来るに決まってるだろ。毎年その日だけは骨折してようが戦争してようが、何が何でもちゃんと帰ってきたじゃないか」  
「そうですね。なんせ、私達の母親ですし」

亜紀は明るい笑顔で頷く。

付けっぱなしのテレビでは、一〇年前に起こった世界同時多発テロの慰霊式がニュースとして流れていた。

二人の父親は10年前、テロ撒きこまれて命を落としている。

世界中あちこちではほぼ同時刻に起こったテロの犠牲者は約10万人にのぼり、戦後最悪の重大事件として人々の心に消えることのない傷を残した。

式典にあたる大国の大統領の声明に目を奪われていると、亜紀が朝食の支度を済ませたらしい。食器の洗剤を手早く洗い流し、悠はテーブルに付いた。

「… 亜紀。時間が無いって言いながらお前まだ着替えてないけどいいの。今日は早めに出るんだろ？」

「はい、薫ちゃんかあると待ち合わせをしているのでそろそろ支度をしてきます。もっとも、兄さんがキッチンと起きてくれていればもっと時間的余裕はありましたが」

いつまでもネチネチした嫌味を言う亜紀の視線は冷たい。背中ですれを受け止めながら箸を動かす。

「それより、私は兄さんを1人家に残していく方が心配ですよ。兄さんのことです。新学期早々学校をサボるつもりなんじゃないかと気が気でなくて…」

妹にここまでボロクソに言われ、さらにここまで心配される兄も珍しいのではないだろうか。

これではいったいどちらが年長者かわからない。反論出来る材料は持ち合わせていない悠だが、言われっぱなしなのも癪だった。

「大丈夫だ、今日からはしつかり行くから」

そこで悠は続きを口にするのが億劫になり口を嚙む。

思い返してみれば、去年の悠は出席日数がギリギリだった。原因としては、丁度1年前にあったとある出来事が切っ掛けで、学園内で悍しい存在として避けられてきたからだ。

その件でしばらく謹慎を食らい、そのままダラダラと学校に行き辛くなった挙句に度々学校をサボっていのだから自業自得ではある。この町御自慢の進学校である奏風学園のお坊ちゃまやお嬢様からしてみれば、彼の存在はさぞかし恐ろしく映ったのだらう。

停学明けの教室に、悠の居場所は無かった。むしろ、停学程度で済んだのは運がよかったのかもしてない。下手すれば退学だってありえたであらう。

リビングから出て行った亜紀の言葉に軽く反抗しながら、黙々と美味しい朝食を胃袋に詰め込んでいく。

「だからこの季節は嫌いなんだよ。いろいろと思い出しちまう」

4月。それは大勢の人間が新たな生活をスタートさせる季節。

それは彼ら兄妹も例外では無い。悠は一年通った奏風学園の二年に、亜紀は同じく奏風学園の一年にそれぞれ進級する。

また妹と同じ学校に通うと思うと、悠の気分はあまりいいものはなかった。しかし、折角の朝食が萎えた気分が台無しになるのは勿体無い。残りを掻き込んでさっさと洗い物の片付けに入ることにした。

ニユースを見ながら残りの一口を呑みこむと、丁度制服に着替えた亜紀がリビングに入ってきた。

「ご馳走様さん」

「はい、お粗末さまでした。兄さん、しつこいようですがどちゃん

ッと学校に行ってくださいね」

もう一度強く念を押される。

「行くつての、春休みから何回言えば気が済むんだ、そこまで信用ないか？」

「はい」

力強い返事。

感情的で刺々しい性格ではあるのだが、心配をしてくれているだけ有り難いと思うべきなのだろうか。

小言が五月蠅い亜紀を適当にあしらいながらさっさと送り出す。

真面目な妹は、まだ自身の知らない高校生という新たな世界に心躍らせ、足取り軽く学園へと向かって行った。

「…さて。俺もそろそろ支度するか」

いつまでもものんびりしていたらまたあの蹴りが襲ってこよう。身支度を済ませ、最後に玄関に鍵をかける。

外に出ると、家の前の道には多くの人がそれぞれ向かうべき場所へと向って歩を進めていた。彼と同じ制服を着た者も数人歩いている。

なんて平和的な光景だろうか。

「今朝見た夢がまるで馬鹿みたいだな。っと、急くか。遅刻ギリギリだとアイツまで五月蠅くしゃしゃり出てくるし」

織笠家から学園まではさほど遠くない。

それだけの理由で、悠は少しレベルの高い高校の受験をして入学したほどだ。こんな時間まで家に居られる3年間を考えれば、受験

など大した苦勞ではなかった。

悠と同じように、家から近いのを理由に学校を選んだ者が多くて中学からの顔見知りは何人も学園には通っている。顔見知りと言っても、大概は話したことなど殆んどない優等生ばかりだが。

15分ほどかけて人の波の中を歩くと、曲がりくねった坂道が見えてきた。夏は地獄のS字坂として有名なここを登った小高い丘の上に、奏風学園はある。

町の象徴として建設されたのが奏風学園、都心からは少し外れた田舎にあるここ奏風町では一番大きくて有名な高校だ。

田舎と言っても駅前はそれなりに開発が進められ、施設は整ってきている。今では立派な準都市へと成長していた。最近では再開発も順調に進み、日々町は大きくなっている。

そのお陰で奏風学園もこの近辺では有数の進学校へランクアップした。真面目ちゃんを演じる亜紀が進学を選ぶくらいだ。

頂上付近までくれば、周りを囲む人間全員同じ制服を着た者しかいなかった。

なんとか登校時間ギリギリに坂を登り終え、息を整えながら腕時計に一瞥くれる。現在午前8時40分。どうやら間に合ったらしい。坂道を登りさえすれば校門はもうすぐそこ、ここまでできて遅刻をするような事は無いだろう。

「あ、やっときた。悠！織笠悠！」

周囲を憚らずに大きく手を振っている一人の女生徒、彼女が悠の目に入った。

まだ数百メートルも先にある校門の横、そこから態々逆走してまで小走りにこちらへと近づいてくる。

眼鏡の下にある切れ長の目と長いまつ毛、そして凜とした佇まい。模範的な黒髪にセミロング。歳のわりには高身長な悠のよく知る少女、一原園瑩。はらそのあきら だった。

「… 瑩…、相変わらずお前ってやつは人の目を気にしないよな」

古くからの知り合いであり、母親がしょっちゅう家にいない悠達兄妹がよくお世話になっていた原園家の次女である彼の幼馴染である。

瑩は少し息を弾ませながら目の前までようやくやって来た。

「遅い！もつと時間に余裕持って来なさいよ。こんなギリギリだと危ないってわかってる？ほら、イロイロと」

「なんだよ、今日はちゃんと学園に行くつもりだぞ」

「あのね…当り前。学校に行くのは学生として当然の義務でしょ」

瑩は悠の鼻先に指を突き付けると、さらに目を吊り上げた。

「さつき下で亜紀ちゃんと偶然一緒になって、『兄さん、ちゃんと来てくれるかなあ…』なんて独り言をボソボソと呟いていたから念の為よ…つと、確保お！」

瑩の細い腕が悠の右腕に絡みついた。腕と一緒に身体ごと押しつけてくるので腕が一種のへブン状態。

(そ、それは、イロイロと危険だぞお嬢さん…)

「悠の保護者である亜紀ちゃんに変わって、目の行き届かない学園では私がしっかり目を光らせておかないと。何回も家に押し掛けても学園へ来る気になってくれなかった悠にしては、ここ最近進歩してるとはおもうけど、いつ逃げ出すかわかったもんじゃないからねえ」

「…毎日玄関先でギヤアギヤア騒ぐのが迷惑だから来たんだよ」

生徒でこつた返す校門前で、ピツタリ…まるで恋人のように寄り添う悠達を追い抜いていく生徒達の冷たい視線…いや、殺意の籠っ

た視線が痛い。

まるで警察に連行される途中、マスコミの群れに囲まれる犯罪者のような気分だった。手錠はされてないが、無理に逃げると後が恐いので、悠はおとなしく従うしかない。

他の生徒から向けられる視線を、ここでは敢えて考えないようにして瑩と一緒に歩き始める。

「悠、どうしたの？ソワソワしちゃって」

「い、いや…なんでもない」

何故こんなにも敵意の籠った視線を向けられなければならないのか、それは悠みたいな問題児と美少女が密着して歩いているからだろう。

原園瑩という人間がどんな人間か、と聞かれれば彼女をしる者は十中八九同じ答えをする。

清楚で美人。正に大和撫子。そんな王道の回答が返って来るのだ。落着いていて、誰にでもわけ隔てなく接してくれる年齢よりもお姉さんのな雰囲気を持ち合わせた子。そんな慈愛に満ちた女神のような性格をしてるが為に、愛に飢えた多くの男子ファンが存在しているらしい。

非公式のファンクラブまであるとか…

だが、凜とし過ぎていて少々近寄りがたいオーラを纏っているのと、悠の傍にしょっちゅういることで瑩に言い寄る勇者は全くと言っていいほどいない。

また、男子に限らず一部の女子の視線も険しいのは、やはり性別関係なく人気がある証拠だった。これこそ、本当に人望がある彼女の手柄の表れなのだろう。

だが、瑩は自分がそんな目で見られているという自覚が無いらしい。こうして肩を並べ、周囲の敵意をその身に集める悠にだって瑩が美人だということはわかっていているつもりだ。長い付き合いの癖に、



未だに緊張する始末。十年以上の付き合いの中、特別な感情が無い  
と言えば嘘になるが、その感情は家族のような感覚に近い。

(そうだ、きっと瑩も俺と同じで姉として俺に接してくるんだろう  
…でも、流石にこれはキツイ…)

必要以上にベタベタしてくるのは、どうにかしてもらいたい気分  
だった。

校門近辺まで来ると、いつもは居ない数名の教師達がトトロ口歩  
く遅刻上等な生徒のケツを引っ叩きながら急がせている。

時間はまだ大丈夫だが、急いだほうが良いだろう。天敵が現れる  
前に人ごみに紛れなければならない。

「行くか」

「うん」

お互い饒舌なわけでは無いので自然と言葉数は少ない。

周りの生徒に交じって足早に校門を抜けた。

校門を抜け、体育館の角を曲がればすぐに校舎が姿を現す。

この学園は丘一つを占領しているだけあり、なかなか広大な敷地を持っていて。この町のイベント事には大抵奏風学園が使われる程だ。

まず、職員室や図書館、音楽室に保健室、食堂と多目的室、そして多岐に渡る特別教室などなど、あらゆる施設が詰まっている別棟。この別棟は、向かい合う様にして建っている1年〜3年までのクラスが賑わう本校舎の実に3倍の大きさを誇っている。地元の国立大学が霞むくらい巨大で、それ故にまだまだ行ったことの無い場所が沢山あったりする。

そんなマンモス級の校舎を有しているだけあり、在校生も日本一と言われている。

別棟の前を通り過ぎ、本校舎にある昇降口の横の巨大掲示板前で止まった。

こんな時間だ。悠のように怠けている輩以外は始業式のある体育館に向かっているのだろう、今は混雑も解消された掲示板前で新しいクラス表に目を通していく。

「えつと…どこだ？」

これが最初の難関だった。

生徒が多すぎて、自分の名前を探すのさえ一苦労なのだ。そろそろこの古臭い掲示のしかたを止めてデジタル化すべきという声を受け入れるべきであろう。

だが、自分の名前は思ったよりすぐ見つかった。新しいクラスは2年2組。ざっとクラスメイトの名前を見たが、少ない顔見知りは

見事に別のクラスに散っている。

「知り合いは…誰もいないか」

正確には知っている名前くらいはあった。が、生憎と話した覚えの無いものばかりだ。こんな事なら真面目に通っていればよかったと後悔しても後の祭りである。

「…ねえ悠。もしかしてまだ脳味噌寝てる？二組には私の名前がちゃーんとあるんだけど。ねえ、コ・コ！」

不意に、肩へ慣れ知った重みがかかった。瑩がのしかかるようにして全体重を預けてきたのだ、程良い感触が背中に当たる。

「ば、バカ！は、離れろっ！」

慌てて瑩から離れた悠。なによ…、と不服そうな目で瑩に睨まれた。

(こっちがなんだよ！少しは自分の身体の成長を自覚しろっ！)

瑩は悠を異性の対象と見ていないのか、こういった肉体的スキンシップが昔から今まで全くもって変わらない。

もちろん悠も男である、嫌なわけではない。が、悠としては変に意識してしまっても苦手なのだ。それに、周囲から見れば殺害ものな羨ましさ、こんなことだから彼の名前が原園瑩ファンクラブのブラックリストのトップにあるのだろう。

「今日の悠、なんだか冷たいわよ」

「俺はいつもと同じだ。お前がすぐそうやって俺に絡んでくるから

……いや、なんでもねえ」

言いかけ、彼女には言っても無駄なことを思い出してまった。

「何？言いたいことがあるならハッキリと言いなさいって昔から言ってるでしょ」

言おうとしたのは些細なことだった。瑩に自覚がないのは昔から変わらないってことだとわかつている。

「いい、気にするな。それより問題は今年の担任だ」

無理矢理話をそらして再び掲示板へ目を向けた。納得いかないのか、少し頬を膨らませている瑩も気になったらしい。同じように掲示板を見上げている。

「えっと…2組の担任は…」

「あ」

友人が少ない、その自覚はある。

無理して人付き合いをしようとも思っていないし、同級生は悠を避けている者が大半だ。少ない知人がいれば学校生活はなんとか成立するので今となってはあまり気にしてはいない。

だが、担任というものはどうしようもなかった。

「さて、俺は全力で帰らせてもらうかな」

クラスメイトに知り合いがいなかったこと以上に辛い現実がそこにあった。

1年の途中から産休で休む先生の変わりに来た臨時教師が今年も担任だったのを見て、普通に学園生活を送れる自信が一気になくな

った悠。彼は早速登校拒否を発動した。

「ちょ、逃げてても無駄だって。もうここは学校の敷地内なのよ!」

踵を返した悠の首へと執拗に腕を絡めて来る瑩。彼を止めようとしてのことだが背中に当たるソレを今は必死に無視して校門へ向かってダツシュ。

「せつかくの心機一転。新しい気持ちで来たのにこれはあんまりだ!何かしらの陰謀を感じる!」

「ほ、ほら…これで完璧に更生できると思えばいいんじゃない?」

流石の瑩でも、それは無理あるフォーローというものだ。

「更生?更生するどころか今度こそ廃人にされるわ!」

瑩を引きすりながら走り始めると、

「おい、織笠にそつちは原園か。遅刻だぞ、イチャイチャしてないでさつさと体育館に行け」

暴れていた二人の身体がピタリと止まる。

悠は驚いて心臓が飛び出しそうになってしまった。それは瑩もだつたらしく、彼女の身体が背中越しに震えたのが分かった。

ゆっくりと振り返る。いつの間にかやってきたのか、キツチリとしたスーツ姿の女性が立っている。

「あーお、おはよう キョウウせんせ」

「お、おはようございます、月村先生」

身長170センチと女性にしては高い身長と、教師にしては堅気には見えない鋭い剣幕。加えて教育者の癖に口が悪いおまけ付き。そんな悠達の1年の頃の担任でもあり、今年も担任になる月村鏡つきむらかがみが威風堂々と、王者の如く君臨していた。

「おはよう。まさか織笠、新学期早々サボろうだなんて…考えてたんじゃないでしょうね」

心臓が潰れるかと思った。透き通る綺麗な声なのに、なんともいえない迫力を有している。

「ま、まさか。冗談キツイですよキョウ先生。そんな恐れ多い…じやなくって…帰るくらいなら自分からこんな猛獣の縄張り…じやなかつた…校内まで入って来ないつすよ」

「せ、先生！御心配には及びません。この馬鹿だつて脳味噌くらい入っていますし、もういい加減体が覚えてるはずです。まさかこの状況で逃げれる…じやなかつた…帰れるような奴じゃないですし、なんなら私が責任もって連行していきます！」

悠の暴言を掻き消す様に、瑩が言葉を被せてフオローする。

「ほう、それでは帰ろうとしたのを原園にトツ捕まった、というわけか織笠。っは、嫁が相手ではもう逃げられないな」

（いや、こうして人間リーダーに捕捉された時点でそんな考えは吹き飛ぶつての…流石に命は惜しいからな）

この女性、名前を鏡と書いてそのまま力ガミと読むのだが、一部の生徒の中には親しみと敬意、また一部の生徒は畏怖を込めて“キョウ先生”と呼ばれている。

決して…決ツして!“凶”悪の凶と鏡を掛けてキョウキョウいるわけではない。

「ふん、まあいい。クラスは確認したな？整列はクラスごとで適当に行え。私は警備の関係で出席出来ないから早く行け」

キリツとした目で睨まれ、反射的に数歩後ずさつてしまふのだがこれも仕方が無い。

教師でありながら、この広大な学園の警備を一手に担っているのだ。それだけでこの人が普通じゃないことくらい窺える。

相変わらず生徒に向ける目ではない。まるで殺しの対象でも見ているような目付きである。幼なじみの諫める横目と、担任の鈍い視線がダブルで悠に突き刺さった。

「だいたい今日はサボる気なんて毛頭ないつての。せつかくの午前授業で、出席日数稼ぎにはもってこいだし。それに、今日からは亜紀がいる、バシたら後々アイツに殺されかねないからな…」

「っち、そうだった。お前の妹も入学したんだつたな。まったく、面倒な奴が入学してきたものだ」

やはり教育者のセリフとは到底思えない。

もつじき始まる始業式の会場へ、瑩に連れられて体育館へ入って行く。

体育館の入口には鏡を始め、数人の教師達が緊張した表情で佇んでいた。体育館にいる多くの教師達は誰もが同じように張りつめた空気を持っている。

「おい、なんでこんなにも教師達はピリピリしてんだ？」

「なんでって…去年の事があるからじゃないの？」

ああ…、と悠は言葉を濁し、それ以上この話題を口にはしなかつ

た。

何人かの顔見知りと挨拶を交わし、そのまま二人で適当に整列しているらしいクラスの列の最後尾へと並ぶ。

辺りを見回すと、少し離れたところに亜紀の姿があった。

これから始まる生活に挑む穏やかな顔付きである。



学園長の無駄に長い挨拶やらその他諸々が終わり、別棟から本校舎3階へ瑩と向かっていく。

体育館に続く別棟を通らなければ直接本校舎へとは行けないので、それはそれで距離が離れすぎているからと生徒の間では不評だった。悠と瑩は丁度道中の中ごろまで来ただろうか、新2年生の教室である3階へ続く階段が見えてきた。同じ様に教室に向っていく生徒の中に混ざって階段を上っていく。

すると、突然数人の生徒が逆走して行くではないか。

「なんだ？」

「おい！1年が3年の伊庭達いはに喧嘩売ったぞ！」「伊庭って、あの変態か！」「なんでも伊庭に絡んだその1年生、女の子らしいぜ！」

やってきたのは3年生だった。まるで一興のショーでも見に行く子供のような嬉々とした顔をして階段を駆け下りて行く。

それに続き、騒ぎを聞き付けたりしき数人が次々と階段を下りていった。

「何か、あつたのかな」

瑩が不安そうな顔で悠に尋ねる。

「…さあな。しらん。いや、知りたくない」

3年生の口から聞きたくないフレーズが聞こえた気がした悠は耳を塞ぐ。

最上級生に、それも登校初日から喧嘩を売るような1年生。それも女子。そんな度胸のある愚か者は彼の良く知る彼女しかいなかった。

「アー、オレハナニモキイテナイ。キコエナイ。アアアア」

「よお織笠に原園！」

徐々に逆走を始めた者が多くなる中、元クラスメイトでもあり悠の数少ない友人と呼べる夏木が興奮気味に階段を駆け下りてきた。

「…夏木、か。お前はキョウセンせに注意を受けたにも関わらず、まだその茶髪のままかよ」

「んな些細なことどうでもいいじゃねえか！それよりもだ！1年が1階の踊り場で3年とケンカだよ！ははッ！お前みたいな大馬鹿が今年も現れやがったな！ほら、お前ら夫婦も急いで来いよ！」

「おい誰と誰が夫婦だ、って！」

夏木は仲間達を引き連れ、さつさと1階にある多目的ホールへと飛び跳ねながらさつさと行ってしまった。

頭痛がした。

隣では瑩が困惑した表情をしている。夏木の一言で、瑩も何事かを悟ったのだろう。

「ねえ悠。なんだか私、その1年生が誰だか解ったような気がするんだけど。これは行って止めたほうが良い気がする」

いくら鈍い瑩でも思い当たる人物があったようだ。瑩の考えると悠の想像は恐らく一致しているだろう。

「…あああつたく！あの馬鹿、入学して早々に面倒事を持ちこんでくれやがって！」

悠は人の流れに合わせて1階のホールへ急いで降りていく。本当は関わりたくなんでない。でも無視はできない。

1階に着いた時にはバスケットコート程はあるホールが野次馬でいっぱいだった。結構な人が集まっており、その中心にいるであろう晒し者達を悠のいる場所からでは窺うことが出来ない。

「うーん、みえないわね。悠は見える？」

「瑩…ついて来たのかよ」

「だって…」

何か言いたげな瑩は言葉を濁した。

「…いいからお前はここにいろ、もしくは先に教室行ってる」

もしものことがあってはいけない。だから瑩には厳しく言い付けておく。

瑩は何も口にはしなかったが、彼女の表情は悠のことを気に掛けているように見えた。

「悪いな、通してくれ」

野次馬を蹴散らしながら前へ。押しのけて進んで来るのがあの織笠悠だと気が付いた者は逃げるように道を譲って行く。

数メートルほど進むと、ようやく騒ぎの元凶が見えてきた。結構なギャラリーが囲んでいたのは5人の男子生徒と背中を見せる1人の女子生徒だ。

「やっぱりか…」

悠と瑩の予想は見事に的中した。こうなってるだろうとは思っていただけに、この状況に衝撃などまったくくない。

鬱陶しい最後の人波を抜けると、大きく息を吸いこみ、

「おら、亜紀！お前はいきなり何やってんだ！」

ガヤガヤと五月蠅かった野次馬達全員が一斉に押し黙った。そして、ゆつくりと悠に背中を向けていた女子生徒が振り返っていく。

「…ああ、兄さん」

ガラの悪い3年生に真正面からメンチを切っていた1年生、それはやはり悠の妹である織笠亜紀だ。

亜紀はそこにいるのが兄であることを横目で確認すると、すぐに顔を3年生の方に向け直してしまった。亜紀から少し離れ、見覚えのある女の子が一人顔を青くして震えていた。

亜紀が家へ何度か連れてきたことがある亜紀の親友だ。

「君は確か亜紀の…薫ちゃんだったか？」

亜紀の友人である薫が、顔見知りである悠の登場に戸惑いながらも首を一度縦に振る。

その子と3年生達との丁度中心に亜紀は立っていた。

「兄さん。何か御用でしたらこのゴミ掃除が終わった後にしてください」

感情のまったく籠っていない声に、気持ちで押し負けそうになる

悠。だがそこは経験でなんとか耐える。

「なんだ、何があったか知らないが一旦落ち着け」

「はあ…用がないのでしたら邪魔しないでください。この産業廃棄物共を全員冥府に叩き落とし、地獄巡りの無限ループに処さなければなりませんので」

怒りの感情ラインを振り切ったのか、逆に静かな憤怒がその顔に浮かんでいる。

だが目は本気でキラキラと光を放っている。トレードマークのポニーテールを開放し、臨戦態勢だ。普段は絶対解かない髪をわざわざ解き放っているのは、亜紀の本気の証拠である。

これは、マズイ。

「おい、こんなところで無暗に力を解放するなな…」

周りに聞こえないように小声で諭すが、

「…こんなところ？あぁ、いつのまにかギャラリーが増えていたんですね。そうですね、これで存分に公開処刑が出来ます」

悠の一言で、亜紀の変なスイッチが入ってしまった。

普段は温厚な亜紀が、今一度このバーサークモードに突入すると感情の昂りが収まるまで誰も手がつけられない。今朝の様な暴力など生ぬるい、生粋の破壊ツ娘へと変貌してしまう。

普段ならここまで本気になることなんてないはずだ。

悠が一度亜紀のお気に入りの文庫に飲み物をぶちまけて台無しにしたことがあったが、その時でさえ半殺しで済んだのだ。それが今は吊り上がった目を一層吊り上げ、本気で殺さんばかりの勢いで上級生達を睨んでいる。

亜紀から3年生の方に目をやると、全員が顔を青くしているのが  
わかった。

「あ、ああ？な、なんだデメエは！」

3年生の内の一番気弱そうな一人が震える声で精一杯に強がってはいるが、腰は完全に引けている。

一応進学校だから、金髪にダボダボの制服を着た柄の悪いヤンキー、などという不良のデンプレな男達では無い。だがどこにでも一人は必ずいる不良ぶった連中だろう。

彼らが少しきよどりながら亜紀ではなく悠に突っかかってくる。

亜紀の気迫に気押されているのか、もうどうにも後に引ける余裕が無いのは一目瞭然。

「悪いな。俺、こいつの兄貴なんだ。新学期早々、あんたらもこれ以上騒ぎを大きくしたくないだろ？この馬鹿は俺が引き取るからさ。その変にしとこうぜ、先輩達」

野次馬を見渡しながら場を納めようとする悠。これで亜紀という恐怖から解放される、と3年生達の表情が一瞬緩んだ。

しかし、ある一人の男だけは違った。

安堵の表情を浮かべることができない。唯一、震えながらも亜紀と向き合っているガタイのいい奴である。

彼のことはあまり学校に来なかった悠でも名前と顔が唯一一致している。

この伊庭と言う男、あまり良い噂は聞かないグループのリーダー的存在だ。悠とはまた違って形で有名人である。

「お、お前、2年だな…それが先輩に向かったの口のきき方態か？

ああ！人にモノ頼む時は頭を下げるのが筋だろが！」

適度に敵意をむき出しにしてくる。

ちなみに、ギャラリー達は悠の存在に気が付くとこの騒動を囲んでいた輪を徐々に広げ始めていた。

「お、おい。アイツ織笠じゃねえか……」  
「ああ、去年の事件で」  
「待て、あの悠の妹があんな美少女だと！」

ガヤの発言に少し悠の心が傷付くが、これが普通の反応だった。もう慣れっこな悠はされりと聞き流す。それで伊庭の取巻き達も悠に気が付いたのか、さらに顔を青くしていた。

だが、伊庭だけは何もしないのか、それとも度胸があるのか、特に反応を見せようとはしない。

「……それは悪かったな。生まれつきこういう性格なもんでね、敬う目上の人間は選ぶようにしてるんだよ」

不本意ながら、一応悠も自分が有名人だという自覚はある。大抵の在校生は彼と話すことすら避ける、だが伊庭にはそんな素振りがちっとも見えない。

伊庭の後にいる取巻き達は既に逃げの姿勢に入っているというのに、それに気が付いてすらいなかった。

「あー、こういった場面で逆に知られていないってのは少し面倒だな」

「所詮、兄さんはヘナチヨコですか。その腕で殺るつもりが無いならどいてください。邪魔です」

「な、なにゴチャゴチャ言ってるやがる！だ、だいたいな、このチビの方から突然絡んできやがったんだぞ！俺はただそいつに声を掛け



ただけだっつうのによ!」

突然指を指され、蚊帳の外だった薫は身体を震わせる。

さっきの伊庭の勢いはどこへやら。空回りしておかしなテンションになっていた。

「そ、そうしたらこのチビが!」

あろうことか、その指先は亜紀をも指した。

「…薫ちゃんに汚らわしい指を向けた罪と、私をチビ呼ばわりした原罪を追加します。薫ちゃんに無理矢理迫ったあげくに肩を強引に掴んだ罪も上乘せし、その他諸々個人的に気に入らないので…ふふ…貴方達のミンチの刑は最早決定事項です。フッフ」

あまりの小声で誰にも聞こえてないだろうが、すぐ傍にいる悠は亜紀はブツブツと独り言で物騒なことを口走っているの聞いた。

「取り敢えずお前はもう黙ってる。これ以上状況を悪化させるな」

そうしている間にも、伊庭は精神が不安定になっていっていた。

これほどの騒ぎになってしまっただけで後にも先にも勧めないジレンマが彼を追い詰める。

「て、テメエの妹だろうがそんなもんもう関係ねえ!馬鹿にされっぱなしなこっちの腹の虫はおさまらねえんだよ!」

伊庭の強気な態度に、亜紀に怯えていた取巻きも調子を取り戻して必死な形相になっていた。完璧に追い詰められた人間は何をしでかすかわからない。

そう、あの時の様に。

「お熱いところ悪いが、別に俺はこの馬鹿の心配なんか微塵もしてないんだよ。どちらかといえばおたくらの身の心配をいっているのであってだな」

悠の聞こえによつては馬鹿にしたような発言にも反応せずに、今にも飛びかかりそんな剣幕の亜紀が一步を踏み出す。それを前に出て背中では制止し続ける悠。

「余裕ぶっこきながら、い、意味わかんねえことぬかしやがって！いいからお前ら一緒に死ねやああ！」

伊庭には拳を収めて貰おうと思つての慣れない交渉だったのだが、余計に伊庭の怒りを逆なでしてしまったようだ。

悠達兄妹の態度にとうとう枷が外れたらしい。ブチ切れた伊庭の雄叫びに合わせて取巻きの一人が拳を握って殴りかかってきた。周りに短い悲鳴があがる。

一瞬の思考。

立ち向かってくるのは誰の目から見ても明確な悪役で、先に手を出したのは向こう側だった。

これで亜紀が豪快に立ちまわつても、重傷までいかなければ人として問題はあるが悪ではない。過剰防衛にならなければ正当防衛で通せるかもしれない。

だが、それでは意味がない。そうさせない為に悠はわざわざ来たのだから。

「親切心で言つてやったのに…馬鹿が」

取巻きAの鈍らな拳を避ける。

「悪いことは言わないから暴力は…」

「どいてください」

「って！ッおい！」

悠がバックステップで後退した時だった。男の溝に容赦無い膝蹴りをお見舞いしたのは、亜紀だった。

悠の背後から、彼の身体を押しつけ、前に乗り出しているカウンターの気味な重たい一撃だ。肉を叩く痛々しい音がホールに残響し、取り巻きAは声も無く昏倒してしまった。

「…あーやつちまった」

「威勢がいいだけで所詮はこの程度ですか。ゴミ虫が」

何故か虚しさを覚える悠。せっかく妹の学校生活を壊さないよう穏便に済ませようとしていたのに、それを本人自ら台無しにしてくれた。

「さて、残りも今すぐ殺して上げますから。安心してください」

「や、やりやがったなアあ！」

もはや強大すぎる力を持つ亜紀に、理性を失った伊庭一味が一斉に突っ込んできた。

「っげ、これは流石に…おい亜紀、お前は下がってる」

これ以上は亜紀に手出しをさせられない。

正当防衛と言えど、これだけの暴力を前にした今の亜紀ならば本気でやってしまいかねない。

だが、亜紀は肩を引っ張る悠に応える気はなかった。亜紀に退く

気なんて毛頭ないらしい。

だから悠は、それ以上なにも言わずに亜紀を庇うようにして彼女を庇うようにして立ったのだ。流石に不良もどき4人をいつぺんに相手をするととなると、こちらも少しは覚悟をしなければならぬだろう。

「マジで…勘弁してくれ」

妹の力は強すぎる。その暴力から弱きを守る為と割り切り握った拳に力を込めた。

もう振るわないと決めたその力を。

しかし、

「ええい、いつまでこんな雑魚と戯れているつもりなんだ君は。踏ん切りがつかないのならば時間の無駄だ」  
「…は？」

いつの間に潜りこんでいたのか、金色の髪の毛が悠の真横を流れるように歩いて行った。綺麗な金髪を持った女の子だ。仄かに甘い香りが後を引く。

「お、おい！あんた何して、！」

平和ボケしたこの学園のお嬢様が何を思ったのか、怒り狂った野郎四人の前に堂々と歩いていく。

「馬鹿が！」

金髪少女を止めようと悠は手を伸ばすが、

「ふむ…だがやはり見定めるにしてもこんな雑魚では話にならないか…」

黒タイトスの美足はまるで散歩をする風にゆったりと移行する。そして少女はまず先行していた男の腕を掴み、少し手首を捻った。すると、どれだけの勢いが付いたのか男の身体は縦に一回転しながらコンクリートの床に叩き付けられた。

聞くだけで鳥肌が立つような石を叩く音の間に、亜紀にやられた者同様に二人目の男も動かなくなっていた。背中を強打して意識を失っているのが解る。

突然の乱入者、だがもう止まれない伊庭一派。

けれども勇んで暴力を振りかざす彼らは次々と金髪少女によって床へち叩きつけられ撃沈した。最後に伊庭だけが残った。

「ちょ！こ、この女！まさかげふう！」

頭であつた伊庭も、最後に楽々と床へ叩き付けられ、そして泡を吐きながら気絶してしまった。

まさに一瞬の出来事だった。

動かなくなつた四人の男達。そして、時が止まつたかのように静寂だけがホールに訪れる。

「ん、なんだ。もう終わりか？まつたく、これしきで昏倒するなどやはり見た目通り手答えの無い奴らだ」

静まつたホールの中、少女の勝利宣言により今まで静観していた野次馬達から『ウオオオオオ！』と言う歓声が巻き起こった。野次馬が金髪少女目掛けて殺到する。

それはもう軽くお祭り騒ぎだった。

「は？…なに、この黄色い歓声」

野次馬に囲まれている金髪の少女は、四方八方から浴びせられる称賛の声に戸惑っているようで、あたふたしている。華麗な技を見せつけられ興奮した生徒達の対応に困っているのだ。

「ああ…この人が乃瀬のせヒカリですか。なるほど、噂に違わぬ強さを

持っているみたいですね」

「って、なんかあつさりしすぎだなあお前は！」

伊庭達がやられて怒りの収まったのか、亜紀が人の波にのまれるこの状況でも悠の隣で冷静に腕を組みながら金髪少女を観察していた。

さっきの狂気はどこにいったのか、すっかり亜紀からは毒気が抜けている。

「これでも自制心は強いほうなんです。乃瀬先輩が私の代わりにやってくれたので、よしとします」

どの口が言うか、と突っ込みたかった悠だがなんだか楽しそうな笑みを浮かべる妹を見ていたらどうでもよくなってしまった。

「あいつ…乃瀬って言うのか。お前でも知ってるってことは、そんなに有名な新入生なのか？」

亜紀並にヤバそうな新入生がいるとは思いもしなかった悠は感嘆のため息を漏らす。今の身のこなしからして、亜紀以上かもしれない。

「何言ってるのよこの馬鹿ちゃん。乃瀬ヒカリさん、私達と同級生でしように。それはともかく、ちょっと二人ともこっちに来なさい」

悠の質問に答えたのは瑩だった。先に教室に行けという悠の言葉に反して事の顛末を見届けたいらしい。

人の波に流されるまま突っ立っていた悠と亜紀は、突然制服の襟首を掴まれ人が少ない階段傍まで引っ張りだされる。

すると、

ポコッ

二人の後頭部にゲンコツが落ちた。

「てっな、何しやがる！」

「まったく…悠も亜紀ちゃんも兄妹共々なにをやらかしたか、ちゃんと理解してる？あれほど過剰な暴力は控えるようになって言ったのに…」

力の無い瑩らしく、殴られてもまったく痛みなどない。しかし、亜紀は本気で怒っている瑩に少し驚いているようだった。

「亜紀ちゃん。あなたは女の子なんだから、なんでもすぐに暴力で解決しようとしちゃダメだって前からいつてるでしょ。詳しい事情を知らない私が言うのは目障りかもしれないけど、前に約束したことを忘れちゃった？」

亜紀にとってはやさしい姉のような存在だった瑩。そんな義理の姉のお説教に、亜紀は無意識に首を横に振っていた。見たこともない瑩の態度にそうとう驚いたようだ。

「…力をふるっていいのは兄さんを躰ける時と、空手の試合だけです」

「おい、いつのまにそんな約束事を…」

日ごろは冷静で滅多に感情を爆発させない瑩が、こうして感情を顕わにして叱りつけている。

それがそうとう亜紀には響いたらしい。

「そう。だから無闇な暴力は禁止よ、わかった？」



悠の訴えを華麗にスルーした瑩と亜紀は見詰めあった。  
少しの沈黙の後、亜紀は一度だけ深く頷くと、深くお辞儀をしてから残してきた親友の元へと去って行った。

「って、俺はなんで殴られた？今回俺はまったく手を出して無いぞ。むしろ説教すべきはあそこでチャホヤされてる金髪だろ！俺は話し合いによる解決を計ったところを褒められるべきだ」

「失敗して逆上させた癖によく言うわよ」

瑩は亜紀を見送ると、悠と向き合った。

その視線は亜紀に向けたのと同じような厳しいものではあるが、彼には少し違って見えてしまう。

「乃瀬さんは綺麗に事を片付けた。これが誰かさんだった場合、流血沙汰にならなかつたって言える？殴る気だったでしょ、さっき拳握ってるの見たもん」

戒めるようで、それでいて優しい表情。

たまらず悠は彼女から目を背けてしまった。

(っち…しっかりと見られてるし)

気がつくくと、ホールに溜まっていた野次馬もようやくやく退き始めていた。そこに瑩と二人でポツンと取り残されている。

「…ともかく、助かったよ。アイツには俺が厳しく言ったところで言う事を聞くような奴じゃないからな。これで少しは感情を抑制してくれるとありがたいんだけど」

「別に。私はあなた達兄妹の保護者だし、当然の事をしたまでよ」

「それにしても、いっちょまえに説教なんかして、似合わねえぞ」

「あ、あんたはいちいち煩いわねえ！私だって人間よ、あの三年生はあまり好きじゃないけど、どんな理由であつても…理由なき暴力はダメ。それに、悠は…ダメなんだから」

ちらりとみた瑩の顔は、少し悲しみに染まっているように見えた。あの時に見た顔と同じだった。

しばらくして、騒ぎを聞き付けた教師達が慌ててやってきた。

悠と瑩はまだ気絶したままの伊庭達を引き渡し、少し遅れて教室に向う。

一応の事情を生活指導担当の鏡に話したので、彼らの月村鏡特製説教部屋（存在は不確定）行きはまず確実だろう。

そうして、新学期早々起こった小さなイベントは突然の乱入者によって呆気なく沈静化したのである。

このマンモス学園ではこれくらいの事件たいして珍しいことではないので、悠達が三階に上がるころにはもう誰も廊下に出てはいなかった。その辺りは流石進学校なのか、分別を付けているらしい。皆大人しく自分の教室に入っているのだ。

そんな遅れた二人が自分達の教室に入ると、クラスメイトの視線を一齐にあびることになったのは言うまでもない。殆んど集まっているクラスメイトは、皆がそれぞれ思い思いの場所で友人と会話をしたり、自分の机で過ごしていたりしている。

最後に入つて来た二人へ、一瞬顔を向けたクラスメイト達は雑談を中断して固まっていた。

当然の反応。

ある程度の覚悟をしていた悠だったのなんでなことはない。向けられる視線は様々だが、軽蔑というよりは恐れに近い。新しいクラスメイトがこちらに意識を向けるも、誰一人視線を合わせようとはしなかった。

そんな中で一人がおしゃべりを再開すると、その輪はあつという間に広がって行く。朝のイベントで話題には事足らないだろう、だんだんと教室内は活気を取り戻していた。

もう誰も、こちらを見ているような者はいない。

「…ほら、いつまでそんな所で突っ立ってるのよ。子供じゃないんだからさっさと動いた動いた」

多くの視線を浴びせられていた悠の背中を押すように、瑩が彼の袖を引っ張った。幼馴染だからこそそのそんな些細な気づかいには毎回助けられてばかりである。

「…ん？」

自分の席を探そうと教室を見回しているとただ一人、目も合わせようとしなかったクラスメイト達とは違って身動きせずにこちらをじっと見つめてくる者がいるのに気が付いた。

もの凄く見覚えがあるので一度見たら忘れない姿だ。

「あいつ…」

「あ、乃瀬さんも同じクラスだったのね」

こちらとの視線が合うと、薄く笑いながら小さく手を振る眩しい金髪。

乃瀬ヒカリ。先ほどは見事な立ち振る舞いを披露した少女だ。てっきり新入生かと思ったが、どうやら瑩の言っていたことは本当だったらしい。

それよりも、こんな目立つ人物を知らなかった自分に悠は内心驚いていた。

教室の一番隅に座っている誰よりも目立つ容姿は異彩を放っていたが、誰も気に留めていない。いや、気にはしているが程度が低い感じた。床に着きそうなくらい長くて見惚れる程綺麗な金髪は、しっかりと網膜に焼きついている。

「ほら、お前ら迅速に自分の席へ戻れ」

そこに悠と瑩の後を追うようにして担任の月村鏡が入ってきた。

知らない者がいない名物教師だけに、クラスメイトの動きは機敏である。どこの軍隊の号令にも劣らない素早い動きで各々自分の席に戻って行った。

いつまでも立ったままじゃ蜂の巣にされそうなので、悠も空いていた席と黒板の出席番号を素早く照らし合わせて座る。

「それじゃ、一限のホームルームを始める。が、その前に織笠と乃瀬、お前らは放課後居残りだから。理由は言わなくても解るな？」

解りきっていた事だが、やはり朝の件絡みで呼び出しだろう。

「…あいよ」

「はい」

「よし。それじゃあHRを始めるか」

「なんだかスッキリしない変な気分です突入したホームルームとなりました。」

「まず最初に、どうでもいような諸連絡ばかりが数十分ほど続く。担任のくせに相変わらずやる気が無いのか、鏡は適当に内容を要約して適当を貫いていた。」

「と、そんな感じだ。さてと、じゃあ次は自己紹介でもするか」

「たいした連絡は無かったのか、早々に連絡事項を切り上げて去年もやった覚えのある自己紹介タイムが始まるらしい。」

「最初は担任の鏡の簡単な自己紹介から始まった。いまさら彼女の名前を知らない者など居ないので、名前のみの紹介で事足りる。彼女は簡潔に自己紹介を済ませると、名簿を開いて誰から指名するか」と名前と教室にある顔を見比べていた。

「目が合いそうになると、皆自然な動作で視線をそらしていく。」

「…面倒だ、今回は名前順で行くぞ。まずは逢武…おい逢武、いないのか？」

「何人かがクラスの中を見回し、視線はただひとつ空いている席に集中していった。どうやら新学期初日から欠席らしい。」

「…うち、出鼻を砕かれたか。それじゃあ次は乃瀬、お前からだ」

「名前順とはいったい何処に行ったのか。『あ行』から一気に『な行』の終わりへとジャンプした。だが、誰も突っ込まない。それが暗黙の掟。それなのに、」

「おい、私の苗字は乃瀬だから」の『だぞ。五十音順になっていないじゃないか」

皆が心に思っけていても口には出せない突っ込みを能天気な声で言い放つ乃瀬ヒカリ。

伊庭達にみせた気迫など微塵も感じられない。それくらいまったくとした声色に違和感を覚えた。

(あいつ馬鹿か？だが、あの鬼教師に口答えとはやるな…)

鏡に反発するそのあまりの余裕っぷりに、思わず称賛の言葉を贈りそうになった悠。

だがそこはグツとこらえた。こんなことで目をつけられたらたまったものじゃない。

「…いいんだよ、気分だ。速くしろ餓鬼」

乃瀬の態度が心の琴線に触れてしまったのか、もう地が出始めている鏡。

一日目から鏡の気まぐれが出てしまった。この人に口答えをしたら最後、晒し者の目にあわされるのはクラスメイト全員どころか学校の常識だ。

彼女はどこかの軍隊に所属していたらしいが、この学園はなんでこんな人を雇っているのか疑問で仕方が無い。

「…この女、本当に教師？実は裏工作でもして学園に潜入している嗜虐的サディストじゃないのか？」

それは口にしないのがお約束。

「んー？何か言ったかあ乃瀬。後三秒以内に回答を始める。これ以上お前に裂く時間は無いからな。さもなければ今日は家へ帰さないぞ」

金色に輝く、脹脛まで伸びた長い髪と整った西洋風の顔立ちをした乃瀬ヒカリは諦め顔まで様になる。一つ溜め息をつく、ゆつくりと席を立った。

全員に注目されている。悠も身体を傾けて丁度教室の反対側にいる彼女の方へと向いた。

良く見れば、瞳は鈍い灰色をしており、その風貌が示すようにどこか別の国の血が混じっているのだろう。

しかも、ネクタイ標準装備の中で彼女はネクタイなどしてない。だからだった。ネクタイの色が学年を表すので、彼女が二年であることに悠は気がつかなかったのだ。

ボタンの開いた開放的なワイシャツ、その布切れ一枚とその下に薄らと透けて見える下着の更の下にある豊満な胸の谷間。

妖艶で官能的。そんな言葉がどうもしっくりくる。瑩同様、年齢より大人びた雰囲気と相まって色気は一層強調されていた。もはやクラスの男子の視線を独占状態。

しかしクラスメイトの度肝を抜いたのは、なによりその度胸だろうか。

あの学園最大の抑止力である月村鏡を前に、目上の人間に対しての話し方も無ければさつき起こしたことに對する非礼を詫びるような態度も感じられない。恐いものなしな態度。

だが、これだけのインパクトを持つ同級生を悠は知らなかったのだ。

こんなにも特徴的な人柄なのに記憶にない。学校を留年ギリギリまでサボっていた彼だが、知らないなんて不思議だった。

(ま、これだけ在校生が多いとな。同級生だつて半分くらいは顔も知らないし。もしくは、俺がサボってる間に転校でもしてきたとか?)

考えても仕方のないことだが、悠が胸中でそんなことを考えているとヒカリが口を開いた。

「ああ名前は乃瀬ヒカリ。出身はドイツ連邦共和国。趣味は吸血鬼狩りと映画鑑賞。好きな物は…そうだな、今は炭酸飲料全般。尊敬している人物は母。以上」

………

……

…

教室の沈黙が、彼女に対する反応の全てを物語っていた。なぜかと言えば、一部プロフィールに変な単語が混じっていたからである。

誰も何も言えない状態が数秒続いた。どれだけ華やかなプロフィールが聞けるのかと期待していたらしいクラスメイトは皆啞然とした表情をしている。悠と同じ様に、何と反応したらいいか解らないといった顔だ。

担任の鏡でさえ教卓についていた肘が外れ、卑しい笑みが吹き飛んでいる。

「ん?どうした。私の顔をそんなにジロジロ見たりして。おい止めてくれ、素人でも一点に集中された眼力は時として強大な魔術効果を発揮するんだぞ?」



固まる教室。

「電波かよ！」

普通の女子高生が吸血鬼だの魔術だの言っている時点で悠は突っ込まずにはいられなかった。

その綺麗な容姿が霞んでしまっくらい、乃瀬ヒカリという少女は毒怪奇電波を受信していたのだ。It's a 中二病？

「…電波？ユウ、わざわざ言わなくても解ると思うが私の肉体はご覧の通り、タンパク質で出来ている真正銘本物だ。金属骨格を持つていたり外装を液体金属で被っているわけでもないぞ？触って確かめてみるか？」

豊かな胸の上あたり、鎖骨の少し横の綺麗なやわ肌をぶにぶにと押して証明してくるヒカリ。

「いや…あ…うん。まあそっいう意味で言ったんじゃないけどさ…えっと」

つい突っ込んでしまった拳句に素で返され、またも反応に困ってしまう。

これが素なのかどうかわからない。

「ま、まあ…性格など千差万別、様々だ。そう突っ込んでやるな織笠。乃瀬だってがんばってるんだぞ？」

鬼教師の予想さえも遙かに上回る自己紹介だったらしい。そもそも、あなたが調子に乗ってS気質を出さなければこんな微妙な空気にはならなかったのではなからうか。

悠が沈黙を破ったことで、クラスメイト達もようやく現実に戻ってきたらしい。

戸惑いながらも拍手を送る女子達。大多数の男子からは大きな拍手喝采が上がっていた。

近年まれに見る奇抜な自己紹介で、乃瀬ヒカリがどれだけ変わった子なのかが大いに窺いしれた。ヒカリは周りの反応に何か特別な感情を持ったような態度も見せず、ただ静かに着席していく。

興奮冷めやらぬ男子生徒の最後の一人が拍手を終えると、自己紹介が再開された。一人目からこの奇抜さでは、この後にくどんたに良い自己紹介も霞んでしまうだろう。

ヒカリの自己紹介を皮切りに、もちろん、次という生贄に指名されたのが悠であったのは、言うまでもない。

途中から悪乗りした鏡のせいで黒歴史暴露大会となった自己紹介と、軽いロングホームルームを終えてようやく放課後を迎える。

新学期初日から授業の無いゆとり世代の学生は、さっさと帰って自由な時間を存分に過ごすだけ。

ロングホームルームと言っても、一限丸々使った軽い話し合いの様なものだ。クラス委員を決め、一年間の大雑把なスケジュールの確認などであつという間に時間は過ぎていつてしまった。

二組のクラス委員は、去年も任されていた瑩が引き受けることになったので、その後の進行は迅速かつ濃厚だった。

担任の鏡だけだと内容なんて微塵も無かったことだろう。

「さて、とつとと帰るぞ瑩」

「えっと、悠…」

瑩が何を口籠っているのかはわかっている。わかっているからこそ悠は何も言わずに彼女を急かしているのだ。

「言つな。いくらお前が真面目ちゃんの優等生でも俺達長い付き合いだろ？ここは黙って見過ごすのが幼馴染ってもんだ。今度学食で好きなモン奢ってやるから。なっ！」

帰り支度を早急に終え、自分の席から飛びだす悠だったが…一足遅かった。

「おい織笠、何処に行く気だ？」

飛び出した瞬間に襟首を掴まれ、盛大に机をひっくり返しなが  
ら転倒。あちこち身体をぶつけて床に身体を打ちつけた。

「ゲホッ！な、何しやがる！」

締まった喉を押さえながら襟首を掴む相手を睨むが、そこにいた  
のは泣く子も更に泣きだす鬼教師である。

瑩の方は胸を手で押さえ、心配そうな表情で二人を交互に見やっ  
ていた。

「逃げようだなんて姑息だなおい。原園、これは私がしっかりと半  
日監禁する予定だからお前は先に帰れ」

「えあ、は、はい。えっと、この馬鹿をよろしくお願いします。あ、  
終わったらメールして」

瑩は鏡に一礼すると、まだ床に尻餅をついたままの悠に目で挨拶  
して教室を一人出て行った。

去り際の表情からは、

「死なないようにね」

「いや、…お前、この薄情者があ！」

無情にも、だれも悠を助けようなどと考える勇者はいない。

それもそのはずだ、こんな厄介事に関わり合いを持ちたくないク  
ラスメイト達とはつくにと教室から消えており、現在クラスに残っ  
ているのは悠と鏡の二人だけ。

「…キヨウ先生、俺も帰るぞ。今日は…そう、これから悪の秘密組  
織を壊滅しにいかないと行けないんツスヨ」

「ダメ、だ。お前がやらなくとも本物の正義の味方が代わりにやっ

てくれる。ほら、いい加減立て」

あっさりした態度であしらわれるのももう慣れたもの。鏡は尻を床に付けたままの悠を引つ張り立たせると、逃がすまいと腕を掴んできた。

「今回は乃瀬と共に放課後に残れと言ったはずだぞこのアホンダラ。あれほど校内での立ち回りを教えてやったというのに……いいか、ブチ殺したい奴がいたら大衆の目に付かないところでやらんか。後で学年主任に咎められる私の身にもなれ」

(この人、なんで教師になれたんだろう)

そのこの所が毎回疑問で仕方がない悠。こんな人格破綻者が進学校の教師をされていていいのかと、教育委員会に講義の文面を送るのを考えたこともあった。

(ま、乃瀬と一緒に呼び出しなら説教部屋行きは無いだろ。あの部屋に引つ張られるのは決まって一人ずつって噂だ……し……?)

……

「つて、キョウ先生。乃瀬のやつはどうした？」

「乃瀬？ヤツなら自分の席で大人しく座」

もう一度教室の中を二人で眺めてみる。

教室に残っていたのは腕を掴まれた悠と、それを掴む鏡だけ。

さっきまで座っていたような気がする窓辺のヒカリの席は、見事に蛻の殻だ。そして、教室の前の方の入口からそっと出て行く金色のナニかを悠は見た。直後に廊下をゆったりと走っていく靴音が聞

こえてくる。

「あの怪電波の糞餓鬼が…逃げたな！もういい織笠、お前なんかよ  
り今回は乃瀬の方が最優先だ！ただし、明日はお前から詳しく話を  
聞くからな、くれぐれも学校をサボるなよ！大怪我しても来い、  
腕の一本が使い物にならなくなったとしても来い！死んでも来い！  
！」

掴んでいた悠の腕を開放すると、鏡は正しく獲物を狩る肉食獣の  
如く廊下へ飛び出し、そのまま全速力で消えて行った。

「…いや、だからさ。あんた教育者たる」

あまりに突然のことではらく呆けてしまったが、取り敢えず今日  
日はこのまま帰れそうだ。鞆を持って廊下に出ると、もう誰も歩いて  
ない。

今日は部活動も基本的に無い筈だ。暇を持って余す暇人以外はさっ  
さと自分の家へ帰ったことだろう。

一瞬、瑩にメールをしようかと思いつて携帯を取り出したが、す  
ぐにポケットに戻した。

「これじゃあまるで、アイツと帰りたいみたいじゃんかよ」

一年の時から互いに用事が無い時は一緒に帰っていたが、それは  
それ。別に一緒に帰らないといけないわけではない。

「メールをしるとは言われたけど、何か用事でもあるのか？…ん、  
メールか？」

鞆を持ち直して廊下を歩きだすと、丁度ポケットに突っ込んでい

る携帯電話が震えた。

メールを開いてみると、亜紀からだった。

『無題：今日は友達を送っていくので少し帰るのが遅くなるかもしれません。すいませんが、昼食は何か適当に作るか買つかして済ませてください。あと、適当でいいので夕飯の買い出しも忘れずをお願いしますね。 亜紀』

年頃の娘にしてはやけに淡白な文章のメールだった。

人柄が全面に出ている文である。顔文字も絵文字も愛嬌の欠片もないメールは亜紀らしいと言えば亜紀らしい。

「あんなことがあった後だし、あの子と一緒に亜紀が家まで帰ったあげたほうがいいだろうな」

伊庭はまだ個室部屋に監禁されているだろうからそこを心配する必要はない。だが、万が一ってこともあるだろう。

「傷付いた時に一人にするのは、可哀想だろうしな」

去年の今頃、悠も瑩とそうして一緒に家へ帰った記憶がある。あの時の瑩は頼れる姉貴的存在などでは無く、ただただ弱々しい…

「って、何でイチイチ思い出す。止めだ止め！」

今日はやけに昔のことを思い出す。

嫌な思い出を取り払うかの様に、携帯を折りたたんで再びポケットに捻じ込んだ。

これで、悠は一人寂しく帰ることが決定したわけである。

別に誰かと帰りたいというわけではない。

この学園にきてから悠はずっと一人だった。だから、一度しかない高校生活が潰れてしまったのにも慣れてしまっただけである。

もちろん、瑩とは吹奏楽部が無い時は一緒に帰ったりしている。

それと、珍しく悠を慕ってくれている夏木達もそうだ。

だが、もちろん部活組はいつでも時間が空いているわけではない。部活はあるし、悠との付き合い以外にも交友の幅は広いのだ。

だからこうやって一人で、だれも居ない学校にいるとつい去年のことを思い出してしまう。

隠していた自分の力と初めて向き合った、あの事件を。



一年前

その日は奏風学園の入学式が執り行われていた。

当然、新一年生として入学することになっていた織笠悠と原園瑩もその会場にいた。苦勞して入ったからか、悠の表情も式を行っている巨大な多目的ホールに魅せられて輝いている。

大抵の行事はここで行われるほど大きなホールで、舞台はオーケストラやプロの劇団も使うほど広く、設備も整っている。客席も2000人近く入ってしまうほどで、二階と三階席まである本格的なものだ。

主な造りは現在入学式を行っている大ホール。そしてそれに伴う数々の施設が完備されており、この学園の目玉の一つである。

そこで行われている式は何事も無くスケジュール通り順調に進んでいき、あとは閉会式を残すのみとなった。

だが、その時事件が起こったのだ。

一発の乾いた音と短い悲鳴が静まりかえったホールに響き渡った。悠や瑩などの新入生や役員として出席している数名の upper 生達、そして我が子の晴れ姿を拝みにきていた父兄や教師達達関係者が音のしたほうへと一斉に向く。

すると、薄暗かった一階上段の入口の傍に、目だし帽にヨレヨレでバラバラな服を来た何十人も男が拳銃を持って立っていたのだ。誰もが一瞬、何かサプライズか、そう思った中で一人の男が天井に向かって引き金を引いた。

「動くな！全員一步もそこから動くなよ。もしも妙な真似でもして

みる、そのババアみたいに死んでもらう」

男の足元に、中年の女性が倒れていた。

暗くて分かりにくかったが、真つ赤な血溜まりを作っているのを見た新入生が悲鳴を上げた。その後は当然パニック状態。収集のつかなくなつて怯えだした者が次々に騒ぎ始めていく。

だが、逃げ場など無かった。唯一の入口である校舎へ続く大扉の前には覆面の男たち。さらに外へと直接繋がる非常口や裏手へ回る扉へはいつの間にかビジネススーツを来た男達が小銃を持って立ち塞がっていたのだった。

どうやら父兄に混ざっていたらしい。

奴らの目的は簡潔だった、身代金の要求だ。

ここ奏風学園は、この辺りでも有数の進学校として全国的に名前も知られ、いわゆるブルジョワな親の子供が多数通っている学校としても有名だった。今年は特にそういった子供が多かったらしい。

政界の大物大臣の孫や大企業の社長の御曹司、銀行の頭取の娘に有名医師の息子など数名が今年の入学を迎えたのだ。

奴らの狙いは、その子共を人質に、莫大な金を手に入れること。

それも、容易周到なことで人数も揃えてしっかりとした計画を立てている。

「いいか、騒いでもこの防音は完璧だ。外にいた警備の者は始末して仲間が入れ替わっているし、施設内の設備も完全に抑えた。そう簡単には外へと異常は漏れネエぞ」

そう、襲撃犯の言うとおりここは完全な防音で、どんなに盛り上がるイベントでも騒音にはならない構造をしている。この奏風で一番大きなホールなだけあり、特別な設備が多数あるので劇場内での携帯などの電波の送受信はほぼ不可能に近い。

銃を突き付けられて誰もが恐怖に震えていた。逆らえば倒れている女性のように撃たれてしまう。その恐怖が子供たちを沈めるのに効果抜群であった。

その数と銃という暴力に、抵抗など出来るはずがない。

悠達生徒や保護者達は一度、持っていた私物をすべて回収されてから隣接する小型のホールへと集められた。演者などが直前のリハーサルを行う場所だ。教師達と別にしたのは余計な手間を省くためだろうか。

全員の移動が終わった。すると男たちは、一人、また一人と生徒の名前を呼び始めた。

呼ばれるのはどれも名の知れた子供ばかり。親が式に出席していないのか、呼ばれた新入生達を連れて小ホールを出て行く犯人を引きとめようとする者はいない。連れて行かれるその背中も、どれもが不安で小さくなっていった。

最後に、地方銀行の筆頭である奏風銀行の頭取の娘、原園瑩の名前が呼ばれた。

「ゆ、ゆう…」

悠の隣にいた瑩が力いっぱい手を握ってくる。

感じたことの無い恐怖に、いつもは凜とした彼女の身体は震えていた。いつまで経っても名乗り出てこない瑩の名前を繰り返し呼ぶ男の声がしだいに乱暴になっていく。

「ッ…ゆう、怖い…怖いよ」

「…大丈夫だ、やつらの目的は金だ…大人しくしてれば危害は加えられない。一度落ち着け」

その手を強く握り返してやる。身体を小さくしている瑩だったが、男はそんな異常なまでに震えている彼女に気が付いてしまった。

「お前が原園瑩だな。来い！」

無理矢理に腕を引っ張られ、悠から引きはがされる瑩は必死に抵抗した。してしまった。

「おい！そんな乱暴にするな！」

「い、嫌ッ！離して！イヤ！」

悠と瑩の叫びに、誰もが目を背けていた。関わるな、自分には関係ない。生まれが悪かったんだ、と。ホールから連れて行かれる瑩を追うものは誰もいない。皆恐くて動けないのは当然だった。誰だって自分の命は惜しい。

「おっと、テメエは彼女と一緒にには行かせねえよ」

飛び出そうとした悠の頭に付きつけられる拳銃。背後に立つ男を睨むが、男は意に介さない。

悠は、大人しく座るしかなかった。

『このガキ…大人しくしねえと痛い目合わすぞ！』

怒鳴り声が部屋の外から聞こえてくる。

悠の周りにいた女子から悲鳴が零れた。みんな怯えている。

『イヤッアア！痛いから引っ張らないで！ゆう…ゆう！』

唯一信頼できる悠の名前を呼ぶ瑩の声が彼の頭の中で何度も反芻した。

何度も、何度も。

(…おれは、惨めに瑩を連れていかれて…なにやってんだ…?)

彼の名前を叫ぶ、幼馴染の恐怖に歪んだ顔が頭に思い浮かんでしまふ。

もう、こんな世界に関わることなんて無いと思っていた。あんな暴力の奔めき合っていた世界は懲り懲りだった。

けれど、オレなら

そう思った直後に悠は生と死の狭間に立つことを決めた。

憧れたあの背中。忘れていたそれを思い出したのだ。

黙って連れていかれる幼なじみを見捨てることなど、出来ない。

腰の抜けてしまった瑩に苛立ちを覚えた男は、ナイフを取り出すと瑩に向って刃先を突き付けていた。

「ツチ：五月蠅いガキだぜまったく…指の一つでも切り落とせば大人しくなるか？こつちは金さえ手に入ればお前らみたいな親の脛を齧った糞ガキが何人死のうが関係」

男が続きを口にするのは、無かった。今まで騒いでいた瑩も急に黙ってしまふ。

数秒の間硬直する男に、集められている新入生達を隔離した小部屋の前には仲間が不審に思っ近づいてくる。

「おーい、どうしたよ。死んでなければどうなっているでもいいんだから早く連れてこいっての。じゃねえとボスが戻ってきた時に俺らまで殺されちまうぞ？それと、ひん剥いてやるんなこんなところじゃなくてもっと落ち着けるところでやるうぜ。かなりの上玉だ、久しぶりに楽しめそうじゃねえか」

下品に笑う男が仲間に触れようと、手を伸ばす。  
だが、

「ああ、どうやらテメエはマジで死にたいらしいな。この下種野郎が」

近づいてきた男の身体が変な角度に曲がり、身体が宙を舞って真横の真つ白な通路の壁に突き刺さった。瓦礫を撒き散らし、血が辺り一面に飛び散っていく。

続いて瑩を引っ張っていた男も、白目をむきながら力無く倒れて行った。

「ゆ、…ゆづ?」

脚に力が入らず立えない瑩の前に立つのは、彼女の良く知っている背中。いつも一緒にいた幼なじみの背中はしかし、彼女の知る織笠悠では無かった。

彼女より背は高いけど普通の髪型に、普通の容姿。とくに着飾るようなことをしない普段は温厚な悠。

物心付くころから見てきたそんな男の子の背中に、瑩は息を呑んだ。

「…おい、瑩にナにしてんだ…お前ら…」

そこにいたのは、ふざけ合う時に見せる無邪気な笑顔でも、受験日前日に瑩に泣きついてきた情けない顔でも、中学時のテニスの試合で見せる真面目な顔でも無かった。

「こ、この小僧！一体何して…」

異常な物音に、隔離部屋に待機していた大柄の男が拳銃を抜いて向ってくる。

「ナにしてくれてんだっつってんだよ」

銃を構えたまま、棒立ちの悠を取り押さえようと慎重に近づいてくる大柄の男。ちらり、と壁にめり込んだ無残な仲間に一瞥を向けてから悠の方へ視線を戻した。

だが遅い。直後、男の眼前に迫った拳がその巨体をで殴り飛ばし、50メートルはある通路の端にあるダストボックスごと壁を貫いた。その拍子に作動した非常ベルが建物全体を揺らす。

耳を塞ぎたくなるような耳触りな音で残り全員が異常を感知したことだろう。

「うわ！な、なにがあった！」

地響きとベルを聞いて通路にやってきた数名の男達。その手にはサブマシンガンが握られている。

この状況ではどんな者でも悠が何かしたとしか思わないだろう。だから彼らも銃口を悠一人に向けた。

「…この…ゴ、ゴ…ゴミ…ドモガ」

数多の殺人の道具を向けられても、悠は瑩の前から一步も動かない。

「ゴ、この野郎がやったのか…？」

「んなわけあるか！たかが高一の餓鬼にこんな真似出来るわけねえだろ！」

「だけだよ、これはいつたい……」

男たちはこの状況にどう結論を付けたらいいのか迷っている。それもそうだろう。圧倒的な火力を持ち、この日の為に激しい訓練もしてきた彼ら。それをたった一人の、それも男子高校生に邪魔されるわけがない。

どんな冗談かと、迷っている男たちのことなどまるで眼中にないのか、悠は足もとで彼を見上げている瑩の腕を取った。

悠のそんな動きに、男たちは照準を構えなおす。

「フウ……アキラ、少し待ってテロ」

すると悠は男の埋まった壁とは反対の壁を左手で殴って吹き飛ばした。

まるで豆腐を削るかのように軽い一殴りでコンクリートの壁をいとも簡単に破壊した悠に、男たちは言葉を失った。

その空いた穴へと右手に持った瑩を放り投げ、悠は再び男たちの方へと向く。

「バ、バケモノが……」

男の一人が震える声でなんとか言葉を発する。他の者も悠に睨まれただけで竦みあがっていた。

そんな、大の大人が怯えるような悠の横顔を間近で見っていた瑩も、自然と恐怖の涙が頬を静かに伝っていく。

「……ゆ、う」

もう犯人達の理性も限界か、いままでその場を一步も動かなかつた悠の右足が前へ出た時に均斉は崩壊した。



トリガーに掛った全員の指が力強く引かれる。

「待て、撃つなあ！！！！」

そう叫んだのは、後からやってきたリーダーの男。だが男達は止まらなかった。

フルオートで何百発もの銃弾が悠へ向かって飛翔する。持っていた銃の引き金を引くことに躊躇った者などいない。

だが悠は無傷で通路を突き進んでくる。外れた…いや、外れたのではない。当たっている。けれどすべて銃弾がその両腕によって雨粒の如く薙ぎ払われていったのだ。

一瞬、時が止まったかのように誰も動かせないでいた。ゆっくりと面を上げる悠。

「コロ、ス！」

悪魔のような形相で、獣の様な彼の眼が犯人達を射抜いた。

「あ、あああ、あああああああああああああああああ！」

撃った男達は何を思ったのか、照準も関係無しに銃を乱射し始めた。なのに掠りもしない。悠の元へと辛うじて飛んでいく弾丸はやはりすべて叩き落とされていく。

男達との距離を銃弾の雨の中を詰めていく悠。彼の右手は手近にいた男の銃を弾くと、男の左腕を引いて引き寄せた。

男の蒼白な顔などしかったことか。悠の左腕が男の右肩を貫いた。バキバキ、という骨の碎ける嫌な音。その衝撃で吹きとんだ男は通路の床を血を蹴散らせながら転がっていった。

右肩に風穴を空けた男はピクリともしない。

この一撃で残りの者達の恐怖を煽るのには十分過ぎるくらいだっ

た。

「これで、三人」

そこからの立ち振る舞いを見たリーダーは言葉を失った。

先ほどの人質となった奏風の生徒達とは打って変わり、パニックに陥った仲間全員が悠に銃を向けている。

アサルトライフル、ショットガン、手榴弾。

恐らく、犯人達は悠に向かってすべての火力を集中させた。凡そ子供に向ける量の火力ではない。

最初は撃つことに唯一抵抗を見せていたリーダーの男も、返り血によって真っ赤になった悠の姿を見たとたんに自分を失った。

最後に残ったのは彼と真っ赤になった悠一人。残りは全員地に伏せている。

気がついたときには、手に持つ自動小銃を目の前の悪魔に向かって乱射していた。けれどその程度で悠を止められるはずがない。

それすらも強固な両腕で防ぐと、悠の右手がリーダーの顔を鷲掴みにした。

「ひ、ヒイツ！」

情けない悲鳴に貸す耳も、同情も無く、悠はリーダーの体を真っ赤に染まっただ床に叩きつけたのだった。

一方的な蹂躪から僅か一分。

その僅かな時間で、統率の失った男達は一人の高校生に叩きのめされて全滅した。元は真っ白だった通路はまるで最初からそうであったかのように赤く染まっている。

「……おい、死んだままでいれば見逃してやるぞ、それともあ

「んたも死にたいのか？」

ピタリと、破壊の中に佇む悠の背後の物陰で銃を持つ者がいた。最初に撃たれた女性だ、女性は悠に睨まれると、崩れるように失神してしまった。

せつかく取った人質を盾に取る暇も無いあつという間の出来事。あまりにも残虐な終幕だった。

見張りの居なくなった教員の隔離されていた部屋。校長や教員達が密かに抜け出して警察に通報し、救助が駆けつけた時には全てが終わった後だ。

その現場を見た者は誰もが顔を青ざめるような状態だった。しかしあれだけの惨状だったというのに、奇跡的に一人の死者も出なかつたらしい。だが緊急搬送が必要な重傷者ばかりで、辛うじて軽傷だった犯人達も最早廃人状態で拘束もされないまま警察に引き渡された。

「一体何があったのか。」

マスコミのカメラに向って何が合ったのかを話せる者はいない。直接悠の力を目の当たりにしたのは瑩だけ。その瑩も頑なに口を閉じたままだ。

そして教員や数名の生徒が見たのは血の海の中に倒れる悠だけ。もちろんそんな現場を直接見た者は誰も口を開かなかつた。言うわけがない。

後に、有名学園が身代金目的で襲撃された事件として一時巷を騒がせた。しかしその熱は数日で冷め、テレビや新聞からその話題は急速に消えてしまった。

誰もが目を疑うようなその事件の真実は硬く口止めされ、表に出ることは無かつたのだ。

悠の事情を深く知る瑩の父が裏でイロイロと根回しをしてくれたらしい。そう、悠は後で聞かされた。

警察の出した答えは、仲間内での対立による抗争、ということにケリがついた。当然ながら血の海のド真ん中にいた悠も事情聴取を受けたが、彼も被害者の一人ということで話が落ち着いた。

こんな事件の詳細を公にできない。詳しい事情を語ろうとはしない悠と瑩だったが、学園は悠を半年の停学処分としてすべてを終わらせることにしたのだ。

彼を罪に問わなかったのは、やはり瑩の父親の力が強かったのだらう。

事件が残していったのは、永久封鎖された多目的ホールと、学園で一人浮いてしまった返り血に染まったダークヒーローの噂だけ。

守ったのは後に殺される予定だった数人の人質の命と、一人の大切な人。

得たのは、彼に対する畏怖の念と少しの羨望の眼差し。

そして、今まで悠が見た中でも最も悲しそうな顔をして泣きじゃくる瑩の泣き顔だけだった。

悠は自分の両手を見下ろした。

まだ日も高い午前中の帰り道、朝も登った長いS字の坂を下っていく。

妹の亜紀の両足がとてつもない力を持っているように、悠の場合はこの両腕がとんでもない怪力が宿っているのだ。

いつからだったかは分からない。だが、気が付いたら両手で大型四輪車を持てるくらいにはなっていた。

あの日以来一度も力を使ったことはない。

単純に、恐いのだ。

変な噂をされようが、そんな些細なことをいちいち気にしているわけではない。

臃げな記憶の中で、血肉を裂く感触がまだ残っている。それを思い出すと、本気の力はどうしても出せなかった。

(つち…)

坂を下ってから朝も通った小道へと入った。

しかし、少し出遅れたのがいけなかった。生徒の下校とズラして始まる予定だったのか、下水管の取り替え工事と重なってしまったらしい。いつもの道は全面通行止めになってしまっていたのだ。

「仕方ないか、あの道は真昼間でも薄暗いから嫌いなんだけどな」

少し周り道をして別の小道から薄暗い路地裏へと入っていく悠。

ここを通れば家から学校への近道となるのだが、なにせ日中の間

でも殆んど日の光が入らずジメジメした陰険な場所なのだ。だから、近道と言えど人はあまり近づかない。

背の高い塀に囲まれた路地裏は異様な雰囲気を感じてた。何者も近づけさせない重圧がある。

一歩足を踏み入れるが、やはり薄暗い。まるで、別の世界にでも紛れこんでしまったかのようだ。

別にナニかあるわけでは無い、気分が優れないだけ。

速く抜けようと、小走りになった時だった。

頭の中で何かが壊れるような感覚、肌寒い中でさらに寒さへ拍車がかかった。研ぎ澄まされていく神経。誰かに見られているような不快感だ。それを肌でヒシヒシと感じる。

べつとりとした視線。

「おい、誰か、いるのか？」

『…対象、発見。照合…一致』

声がした。

闇の先を見渡すが人の姿は見えない。その変わり、気配だけが前方からやってくる。陽がまったく差し込まない闇の中から、次第に人の輪郭が薄らと浮かび上がってきた。

その影を捉えた時、悠の身体の奥底から一斉に汗が沸き出た。

「あ、瑩？」

影から徐々に輪郭が浮かび上がってくる、それは先に帰ったはずの瑩だった。瑩だと解った途端、いつの間にか肩に入っていた力が抜けていく。

しかし、完全には警戒を解けなでいた。

「ど、どうした。先に帰ったんじゃないのか？」

重たい足取りでのんびりとここまで歩いて来たからか、瑩と別れてからそれなりに時間は経っていた。しかし、何でこんな闇とは無縁な瑩がこんな辛気臭い場所にいるのかは見当もつかない。

「……」

悠の言葉に瑩からの返事は無く、彼女は顔を俯せたままゆっくりと一歩、また一歩と近づいてくる。

「瑩？」

そして、悠はあることに気が付いてしまった。

この路地裏、この先はしばらくの間一本道が続く。しかし、瑩の自宅があるのはさっきの工事現場を挟んだちょうど反対方向のはずだ。なぜ、わざわざこちら側から彼女がやってくるのか。

それだけなら違和感だけで済んだかもしれない。しかし、

「おい、それ…なんの冗談だ？」

戦慄を覚えた時には、悠の目がなにやら見覚えのある凄惨な黒を捕らえていた。消えていた夢幻の記憶が沸々と蘇っていく。

それは、今朝みた夢に出てきたモノに似ている。

記憶の山に棄てられていたはずのあの悪夢が地の底から這い上がって来るかのような。死の触感。胃液が逆流してきて気分が悪くなる。

薄闇の中でもしっかりと浮かぶそれは、漆黒。

感じた事の無い恐怖。いや、感じたことはある。あの夢の中でだ。悠の手は傷一つない左胸へと自然に向かっていた。夢の中で刺さ

れた心臓がチクリと痛む。

鬼教師の鉄拳制裁にも、亜紀の踵落としにも感じた事の無い異様な恐怖に、震えが身体を駆け巡っていく。

「抹殺」

影から出てきた瑩は最後に見た奏風学園の制服など着ていなかった。

その身に纏うは漆黒のスーツ。その黒が悪夢を呼び覚ます。スーツには様々な機器やオプションが付属されており、見た目からすれば近未来ロボットのパイロットスーツにも見えた。

瑩のキャラに似つかわしくないその異常な姿に、悠の警戒心はマックスに到達する。

「おい、なんだよ。お前、なんでそんな格好してる」

乾いた笑いが悠の口から漏れた。

一度に起こった不確定情報を処理しきれずに、キャパシティーを越えた脳が機能を制限したらしい。あまりにも突然の事で、身体は思う様に言う事を聞いてくれない。

「痛ッ…！」

すると、寝起きにもあった頭痛がまた催してきた。頭の中に響くノイズ音に、吐き気が一層酷くなる。

悠の異変に気がついたのか、僅かに俯いた格好の瑩がゆっくりと顔を上げた。

そこにあつたのはいつも見ている眼鏡の下にある鋭い目。しかし、眼鏡は無くしていつものキラキラした瞳では無い濁った瞳が二つあった。まるで生気を感じない。



二人の視線が合うと、瑩は頭から前のめりに倒れるよう身体を大きく傾け、そして境界線を踏み切った。

「なッ！」

並ではない足の速さに、離れていた10メートル以上の距離が一気に縮まった。

(あの運動音痴な瑩が、なんでこんなに速い！)

運動神経が抜群に悪い瑩、なのにこれはいくらなんでも速すぎる。反射的に逃げようとしている悠の身体は思考が追いつかないながらも動いて、後ずさっていく。

「…おい、これってまだあの夢の続きか何かなのか？」

無表情の瑩の手に、スーツの裾から取り出した銀色の光が瞬いた。鋭く尖ったナイフの刃先が右頬を掠る。

咄嗟に身体を左に動かしていなければ、顔の半分をこっさり持っていかれていたであろう。

どうして避けることが出来たのか、悠自身でも解らない。亜紀の突発的に出る足に慣れているからだろうか。

しかし、そんなことを考えている余裕なんてこれっぽっちもない。あの夢でみた少女よりは鈍くいだが、それでも常人を逸しているのは変わらない。

「や、止める瑩！そんな物騒な物は捨て、うお！お、俺が悪かった！メールするのが面倒だったわけじゃない！だからメールしなかったのは謝るか うッ！」

破裂しそうな心臓を落ち着かせる暇なんて無い。

ただ一つ言えるのは、瑩が間違はなく悠を殺そうとしていることだけ。何度かナイフを避けた折り、交差した瑩が素早く旋回してナイフを振りかぶってきた。

「瑩！」

幼なじみが自分を殺そうとしてくる圧力に加え、引っこり無しに襲う頭痛が追い撃ちをかけてくる。

そのせいで避けるタイミングを失った。だが振り下ろされた瑩の右手を、ギリギリの所で受け止められた。

彼女の細い腕から出ているとは思えない押し込む力に、悠は奥歯を噛んだ。

「ツク！本当に、どうしたんだよ！冗談じゃ済まなくなるぞ！」

受け止めてもなお、瑩は力の限り押し込んでこようとする。女の子の力とは思えない馬鹿力だ。瑩はナイフを握る腕にいつそう力を込め、そのまま刺し殺す気だ。

無表情な顔が悠の恐怖心を一層募らせ、そして、

「…抹殺、抹殺」

まるで呪いの言葉の様に、『抹殺』という言葉の小声で呟き続ける瑩が不気味だった。

無言の重圧を放っていた夢での少女も純粹に恐ろしかったが、一番親しいはずの人間である瑩が放つ狂気はそれ以上に悠の精神を削り取っていく。

「くっそ！聞いてんのかよ、お前は！」

腕力で負けるはずのない悠の腕がしだいに痺れてきた。つまりはそれだけ瑩の力が凄まじいということ。そんなことありえない。

（俺が、押し返せないって…どうなってる！）

気を抜けば一気に押し込まれる状況。少しでも気を抜けば死ぬ。生か死か。そんな緊張感しかない中で取っ組み合う二人のいる路地裏に、唐突に一つの足音が響いた。

「おお、夫婦喧嘩か？それにしては随分と過激ね」

そして場違いな声が路地へとやってきた。

背後からかけられた声に、内臓がひっくり返る思いで悠は振り返る。

「誰と誰が夫婦だこの！……ッて！の、乃瀬ヒカリ！なんでこんな所に！」

悠を囲に、さっさと逃げ出した居残り仲間がそこにはいた。右手に炭酸飲料のペットボトルを、左手に学生鞆を持ったヒカリ。相変わらずのゆったりとした足取りで二人に近づいてくる。

「いや、今はそんな事はどうでもいい！瑩を取り押さえるのに手を貸せ！」

なんでこの少女がここにいるのか、パニックになった悠の頭ではそんなことを考えても意味がない。

だが、ヒカリは悠のヘルプが聞こえないのか、持っていたペットボトルの残り八割ほどを一気に飲み干した。

「おいコラ！何こんな状況でコラなんて飲んでいられる！しかも一気に飲むから咳き込んで目元ウルウルじゃねえか！好物じゃなかったのか！炭酸がキツイなら飲むなよ！」

「ふう……ま、まったく失礼な男だな君は。それが人に物を頼む態度か？もつと誠意を見せないか誠意を」

暗い路地。ヒカリだけに悠にとっては希望の光だったのだがどうも彼女は協力的ではない。顔見知りの人間が殺されそうなこの状況、偶然出くわした一介の女子高生にしては落着き過ぎている。

幾ら変わり者で腕っ節が強い女の子だろうと、こんな非現実的な現場でパニックを起こさないわけがない。

それが逃げもせず、手を貸そうともしない。ただ余裕を持って、悠が殺されそうになるのを傍観している。

「…つく！わかった！手を、手を貸してください！」

「なんだ、やればそれなりに出来るじゃないか。いいか、これから  
は」

「いいから早くしろこの電波女！」

瑩の馬鹿力は衰えることを知らないのか。悠だけでは振りほどくどころかこうして踏ん張るのももうすぐ限界だった。

両腕の力を解放しなくとも、かなりの力は出せるのだがそれでも瑩とは互角かそれ以下。

「仕方がない、ここで君に死なれてはこちらとしても困るからな」

空のペットボトルとカバンを地面に置くと、ヒカリの雰囲気が変わった。

気のせいかとも思ったが、ヒカリの灰色の瞳が一瞬輝いたように見えたのだ。無風の中、金色の絹が扇の様に宙を踊る。

近づいてくるヒカリと取っ組みあう悠達まで残り10歩といったところか。この距離まで彼女が近づいてきて初めて、いままで悠だけを穴が開くほど凝視していた瑩の綺麗な顔が、まるで精巧な機械のごとくヒカリへ向いた。

『抹殺、最優先対象、発見、対象、変更。灰色の魔女』  
メフィスト

腕を捻って彼の手を振りほどくと、瑩はヒカリ目掛けて一直線に駆けだした。

一方のヒカリは薄く笑ったまま、向かってくる瑩に対して何かするそぶりも見せていない。

「おい乃瀬！」

避ける気が元から無いのか、ヒカリは瑩に合わせてもう一步力強く前に踏み出す。

その手元に、三日月型の死を浮かび上がらせながら。

「な、に？」

ヒカリがいつの間にか手にしていたのは大鎌。彼女の背丈より大きな柄に、大きく沿った刃。

それで瑩の持っていたナイフを受けたのだ。

「やはりコレも手遅れか…仕方が無い、これも私の務めだから相手くらいはしてやる」

乃瀬が右手に持つ大鎌を振るった。空気を切った風が、離れている悠の元まで飛んできた。

力強い振り抜きに、しかし瑩はしっかりと対応してみせる。横薙ぎの攻撃を、四肢を地面に付けて避けて見せたのだ。

されにヒカリはその勢いで振り上げた鎌を脳天めがけて振りおろす。けれどもこれも避けられてしまった。

「止める乃瀬！瑩を殺す気か！」

悠の声は彼女に届いていない。ヒカリの表情は嬉々として輝いている。まるで、この殺し合いを楽しんでいるかのようにも見えた。

「くそ！結局俺が行かないといけないのかよ！」

何が嬉しくて同級生同士で殺し合わないといけない。悠が二人の間に飛び込もうとした矢先、

「邪魔をするなよユウ！これは私が受けた闘いだ！止めたいのならば死ぬ覚悟で来い！」

一進一退、互いに攻めてを欠く二人の嵐のような斬撃の中に飛び込む一歩が踏み出せない。

いつのまにか、ヒカリの獲物が大鎌から槍に変わっていた。先端に反しの付いたえぐい武器の連撃、その突きを捌く瑩もまた凄かった。

「ふむ、追手としては十分だが…」

至近距離で持っていた槍を投擲したヒカリは、またどこからともなく大斧を抜いた。

「私を殺るには調整不足だったな」

「ッ…」

瑩から苦悶の声が短く漏れた。

そのまま彼女の身体は力を失い、地面に顔から崩れて行く。

「…瑩…おい、瑩。どうした！」

倒れてしまった瑩に近づくと、悠の靴がペンキの様な感触を踏みつけた。

ドロリとしたそれを、悠はよく知っている。ようやく理解が追いついた目が正体をしっかりと捕らえた。

ペンキは放射状に拡散し、壁や地面を別の色で染めていた。真っ赤な、真っ赤で黒っぽい、それは血。

「え？」

そんな血の海に転がる瑩。それが、かつて幼なじみであったモノだと認識した瞬間、彼の中で理性が崩壊した。

声にならない叫び、息だけが喉を抜けていく。焼けるように痛い頭と喉。瑩の側には、血に染まった大斧を持つクラスメイトが薄く頬笑みながら立っていた。

何故、わからない。

その綺麗な顔が悪たくみをする悪党のように見えて胸糞悪かった。

「お前エええええ！」

ヒカリに掴みかかると、抵抗されることもなく胸倉をつかんで地面に押し倒した。

「何をする。少し痛いじゃないか、強引な男は嫌われるぞ？」

ヒカリは詫びる様子も無く感情の籠っていない声でそう告げる。いつの間にか、右手に持っていた大斧が煙のように闇へと消えていたのに悠は気づいてすらいない。

彼女に戦闘の意志が無くとも、悠の怒りは収まらなかった。



「なんで瑩を殺した！殺す必要は無かったろうが！」

今すぐにコイツも同じ目に合わせてやりたい。けれど、思う様に身体は動いてくれない。

力を振るうことを本能が拒否しているのか、緊張と幼馴染の死で心と身体がバラバラになって上手く身体を動かせないのか。

どちらにしろ、頭痛も酷くなる一方でマウントポジションにいるのも苦痛だ。

そんな悠の怒りを前にしても、ヒカリは何食わぬ顔でいる。

「なんとか言ったらどうなんだ！」

「んーそうね」

彼女の変わらない呑気な態度に、血の海からヒカリの上体を引っ張り上げる悠。

そして、ヒカリは一度笑みを浮かべると、こう口走った。それは織笠悠の人生史上最大級規模の訳の解らないこと。

傍でうつ伏せに倒れる瑩を指差しながら、

「君は彼女の死を嘆いているようだが、それならば大丈夫だ。同じクラスの彼女ならばまだ生きているだろう」

沈黙が数秒ほど続き、その言葉の意味をようやく理解した悠の顔が疑問で歪む。

「まあ言ってしまうえば、コレは織笠悠の知っている原園瑩ではないというわけだ」



警報が鳴り続け、赤い回転灯が通路を赤く染める中を、一人の少女が走っていた。息は長時間の逃走で切れ切れた。

露出のされた腕、腰、脇、太腿、そして額を汗が伝う。

単純な疲労もあつたが、なによりも焦っていたのだ。邪魔な前髪を時折払いながら走り続ける。

常に気が張っているそんな中を、一人で走り始めてどれくらいたっただろうか。

後方20メートル、そこには金属と金属のぶつかり合う摩擦音を発しながらを執拗に後を追ってくる足音。

首を回して振り返る。とそこには不気味な一隊が先ほどと同じようにやはりいた。一糸乱れぬ隊形で、適度な間隔を保っている。

「はあ…はあ…やっぱり展開が早い」

追手はそれ程広くないこの通路を横一杯にまで広がり、津波のように迫ってくる。ちっぽけな少女を呑みこまんばかりのプレッシャーを放っていた。

キツチリ20メートル。その距離は数メートルも変わらない。

追手は全員が一樣に人間の倍近くはある。だが人でない、というわけではなかった。全身を覆う、黒くて大きな西洋風の甲冑を纏っている。少女の記憶が正しければ、あの鎧のサポートによって出せる最高速度は一般的な乗用車とさほど変わらなかったはずだ。

少女が駆ける現在の速度は大凡で時速40？ほどだろう。それを軽く三倍は上回る出力を持ったエンジンを積んでおきながら、それでいて仕留めにこない。

ましてや担いでいる大口径の銃口を下ろし、使うそぶりも見せて

いなかった。

嫌な予感がした。

そんな予感を今更感じたわけではない。この研究施設へと無理矢理にでも侵入した時からそんな気はしていた。

これだけの重装備者を相手にするプランではなかっただけに、少女は少し混乱していた。何かしらの対策をされるのは百も承知だったが、けれどさすがにこれは厳しい。

(ミスをしたのは私だけど…このまま逃げ回っていても振りきれない…それならいっそ)

彼女の決断は早かった。

こんなところで無駄に体力を消費するのは得策ではない。このまま逃げ続けていても状況は転向するわけではないのだ。いや、寧ろこのまま追いかけてこを続けていたらそれだけ敵に少女を処理する時間を与えてしまうだけだろう。

(もっと厄介な新手が来る前に、ここで潰すしかない)

少しの躊躇いは命取り。

最初から出し惜しみはなしだった。手を抜けるような相手でないことを、少女自身よく知っている。

「躊躇っちゃ、だめ！」

決心が揺らがない内に、実行を。

いつまでも無機質だった通路で少女は急停止する。

太ももに撒かれたホルスターから大振りのナイフを引き抜いた。

少女の突然の反転に、追手は一斉に引き金を絞っていく。

何十もの殺意が少女の小さな身体を襲った。

一瞬、挫けそうになるが、少女の決意は揺るがない。

もう、引き返せないのだ。

『はい』

「……」

『もしもし？あれ？悠、だよな？もう月村先生のお説教は終わったの？』

「…瑩か？お前、今どこにいる？」

『どこって…さっき家に付いて今は自分の部屋だけど？それがどうかした？』

「…今、何してる？」

『えっと、今から着替えようと思ってたところだけど…ってこの変態』

「瑩、お前、怪我とかしてないよな？斬ら いや、切り傷とかとにかくなんともないな？…いや、そもそもちゃんと生きてるか？」

『はあ？…悠、先生のキツイお説教で頭おかしくなっちゃった？生きてなかったらこうして電話なんか出来ないわよ。それともなに、今携帯に出てるのは幽霊だともいいたいの？』

電話の向こうからは、瑩の飼っているゴールデンリトリバーの甘えるような鳴き声が聞こえてくる。飼い主の帰宅にお喜びらしい。

たしかに、瑩は自分の家にいるみたいだ。

路地裏を抜けたところにある自動販売機の前、そこに悠は立っていた。120円を挿入したまま放置されている自販機は、「早くしろや」と訴えるかのように低く唸っている。

携帯の向こうにいる幼馴染の無事に、震える息が彼の口からこぼれた。

「そ、そうだな。いきなり電話して悪かったよ。もう…切るぞ。また、明日な」

耳から離れたスピーカーの先で瑩が何かを言っていたが、その返事を待たずに一方的に電話を電源ごと切る悠。

そのまま自販機に背中を預けると、力の抜けた身体は簡単に崩れてしまった。瑩の安否を確認できたことに安堵したのか、そのまま自販機を背にして腰を下ろす。

混乱と頭痛でどうにかなってしまいそうな頭を鎮めようと、何も考えずにじっとしていると、

「遅い。まったく、君はコーラ一つを買うのに一体いくら時間を掛ける気なんだ？」

爆発しそうな頭の中に、乃瀬ヒカリの声が割り込んできた。

悠が押さないままでいたボタンを勝手に押し、落ちてきた缶を取り出す。

「それでどうだった？原園瑩の身に何事もなかっただろ？」

「…ああ、お前の言う通り、いつも通りのアイツだったさ。ちゃんと生きてたよ」

俯いて痛む頭を抱えたまま無気力気味に悠は答える。

耳に残っている電話での声は、いつも聞く瑩のもので間違いない。数分前に聞いた物と同じだが、機械的ではなかった。

『私の言葉が信じられないのならば彼女に直接連絡でもして生死を確認すればいい。ついでに、今すぐコーラを買ってこい』

そう言われ、瑩の携帯に連絡をした悠だったが、一体、なにが起

こつたのかに対する答えは出てこない。

「……さつき襲ってきたのが瑩じゃないとするなら、いったいあれは誰なんだ？何で瑩と同じ顔をした子が俺を殺そうと」

顔を上げず、アルミ缶のプルトップを空けるヒカリに尋ねた。

「気にするな、とは言わないが、さっきのアレはもうこちらで回収済みだ。あの程度の損傷ならば、恐らくは今日中に目を覚ますだろう」

ヒカリに切り裂かれて血塗れになった瑩…と瓜二つの少女の姿が今も閉じた目蓋の裏に焼きついている。

言われるがまま、血の海に倒れる少女の生死を確認した悠。すると、微弱ながらも頼り無い呼吸をしているのがわかった。

左肩から右の腰にかけての容赦ない裂傷。見るからに致命的な傷痕だったのにも関わらず、傷の深さのわりには出血が少なかった印象だ。

自分を落ち着かせようと深呼吸。

意を決して顔を上げた悠がヒカリを盗み見ると、押し倒した時に制服へと付着したであろう少女の血が消えていた。もう新しい制服に着替えたのだろうか。

今はコーラを、ゴキユゴキユと喉を鳴らしながら一缶一気に飲み干している。

朝の不良達を軽くあしらったことといい、今の殺し合いといい、本性がまるで掴めない。魅惑的な少女だった。

「の、喉がああ！喉があ焼けるううううう！」

「…さつきも思ったから言わせてもらっけどさ、なんでそこまで涙目になりながら炭酸を飲んでんだよ。自己紹介で好物だって言っ



なかったか」

魅惑的…というよりやはり変わり者だろうか。

「けほ…う、五月蠅い。好きだからこうして飲んでいるんだろうが。ガキには解るまい、この焼け溶ける様なゾクゾクした感覚…病みつきになるじゃないか」

「お前、なんかサドっぽい雰囲気醸し出してるくせして実はマゾなのか？」

炭酸で泣きそうになっているヒカリは、大型の武器を振りまわしていた時とはまるで別人に見える。金髪に灰色がかった瞳の少女は涙を拭うと、悠を見下ろしてきた。空になった缶をゴミ箱に放り捨てると、向かい合うようにして立つ。

威圧感が思っていたよりも凄まじい。

「さてと、その納得いっていない顔だな。まだ言いたいことがあるのか？」

「ああ、山ほどあるな。今さっきその路地裏で一体何が起こったのか、とかな…」

さらりと回避された先ほどの質問を悠は繰り返す。

今一番の疑問だった、何かを知っている風に振る舞う彼女に再度問い詰めた。

「そうだな…こちらの予定とはずれてしまっが、仕方が無い」

ヒカリは腕を組むと、悠を放置して一人で考えに耽り始めた。悠の方はと言えば、明確な回答が貰えずに理解の追いつかないまま取り残されている。

突然現れ、悠を殺そうとした瑩にそっくりな少女。  
雰囲気は違ったものの、体格、少し内側に巻いている癖毛の髪型、  
声質。全てが瑩と一致した。

「とりあえず、さっきの子が瑩じゃないってのは信じてやる…だが  
な、お前が斬ったあの子は一体何処の誰で、なんで俺を殺そうとし  
た。理由は？お前はそれを知ってるんだろ？」

あのタイミングで彼女が路地裏に現れたのは決して偶然なんかじ  
やない。

ヒカリは路地裏でも見せたあの薄ら笑みを再び浮かべると、ゆっ  
くりと組んでいた腕を解いていく。灰色の瞳と目が合った。

話す決心がついたのか、閉じていた口をゆっくりと開いた。

「アレは世界に終焉を齎す者だ。崩壊、壊滅され尽くされた魂魄を  
宿すだけの使い勝手の良い道具。滅びを迎えた魂を内包する哀れな  
傀儡」

「…？」

独り言のようにヒカリ呟くと、軽やかにステップを踏みながら悠  
に背中を向け、そのまま跳ねるようにして歩きだしてしまった。

「お、おい！何処行く気だ！わけがわからないっての！」

まだ震えている足で後を追おうとした悠だが、思う様に身体が動  
いてくれない。緊張状態から解放されたというのに、イカレてしま  
った足では歩くこともままならなかった。ぎこちなく動く脚は絡ま  
り、盛大に地面にこけてしまう。その際にヒカリのスカートの中に  
黒い何かを見た気がしたが、敢えて考えない様に努める。

「…少々蛇足な話だが…君が知らなくても良いものだ。それほど気にする必要もないだろうから忘れてくれても構わない。君が今の人生、生活に満足しているのならば聞かなかったことにした方が自身の為にはなるぞ」

「んなこと言われてもな、こっちは意味がわかんねえんだから気にするなつてのは到底無理な話だぞ。それと、少しはまともに会話を成立させるようにしろ！」

どうも悠とヒカリの会話は噛み合っていない。悠の問いをはぐらかされているようだった。

「なに、私はいつだって真剣でいることを信条にしているんだ。君だって少しでも長く自分の人生を過ごしたいだろ？だから今は余生を楽しめ、と言ったままでだよ」

「楽しめだって？何言ってるんだ、殺されそうになった揚句に人が目の前で斬られたんだぞ！しかもやったのは同級生だ。呑気にいつも通りの生活が送れるかよ！」

「それならまた後で会おうじゃないか。その時にでも、さわり程度ならば話してやろう。ここじゃ誰が聞き耳を立てているかわからないからな、じゃあな」

それはまるで、友人と別れるような軽々しさだった。また明日も会おう、だなんて続けて言ったところで違和感が無い。

ヒカリは地面に倒れたままの悠を放置し、立ち止まること無く民家の角を曲がって行ってしまった。

「ッ！だから、お前の言ってることは意味不明なんだつての！…っくソ！」

やけくそ気味に立ち上がると、ヒカリを追って歩き始めた。一步踏みしめるごとに頭へと痛みが響く。それを我慢し、ヒカリの消えて行った後を追った。

だが、民家の角を曲がった所で彼女の姿は消えていた。

「…なんなんだよ、あの女…」

路地裏に置いてきたままの鞆を取りに、もう一度あの薄暗い別世界に戻って行かなくてはならないのは億劫だったが、捨てて行くわけはいかない。鞆は、あの少女に襲われた場所の近くに放り投げたままの状態で転がっていた。

その傍にあつたはずの血の海と切り裂かれた少女の肉体は、

「綺麗さっぱり…か。いったいどうなってるんだよ」

目の前に広がるは、いつものように小汚くてジメジメした路地裏。血痕などそこに残っておらず、いつも通り不気味なだけ路地裏でしかなかった。

あれが白昼夢でなければ、綺麗に片付けをされているということになる。

「…アイツ。なにが、知らなくても良い、だ。殺されそうになるわ、意味解らん中二病の女に助けられるは…もう俺は十分な被害者だろ。それに…それに……」

止まない頭痛。

襲われたに時ほどの痛みではないが、鈍い痛みがまだ続いている。重たく、気だるい体。棒のような足を引きずるようにして、悠は路地裏を出ていった。



どうにも家へ真っ直ぐ帰る気にはななれなかった。

行く当てなどないが、一人でじつと家に居たくはない気分。

一人であれこれと考えるくなかったのかもしれない。足は勝手に人通りの多い駅前方面へと向って動いていた。自分の周りで一体何が起こったのか、何故殺されそうになったのか。考えても考えてもやはり答えは見つからない。

たった数10分足らずでこれだけ密度の濃いイベントが起こったのだ。だから頭痛もこんなに酷くなるのか。

これ以上脳に負担をかけ続けたら、破裂するんじゃないかと思っ  
てしまうほどだった。

ふと気が付くと、もう一時間近くも放浪者の様に当ても無く彷徨  
っていた。結果、永遠と見つからない答えを探してループしていた  
だけで、頭はパンク寸前。無駄な時間を過ごしたただけだ。

体力も知らず知らずの内に消費している。

「…く、頭が」

駅前へ出てぶらぶらと時間を潰してからようやく自分の家まで帰  
ってきたのは、それから更に一時間後だった。

玄関を開けると同時に鼻をさす香ばしい匂い。

「…あ、やばい。亜紀に頼まれてた夕飯の買い物…」

食欲をそそる匂いに、亜紀から着たメールを思い出す。買い出し  
のことなどすっかり頭から消し飛んでいた。

「マズイな…今日の亜紀じゃ、きつとどんあ些細な事でも殺人キックをお見舞いしてくるに決まってる。それどころか、頼まれたメールへ返信すらせずにガン無視したとなると…」

悪寒に身体が震えた。まさか、一日でこつ何回も死を覚悟する羽目になるとは思いもなかった。

どうしようかと考えても仕方が無い。覚悟を決めて靴を脱ごうとしたが、足が震えてしまつて上手くいかない。

「お、落ち付け…なんで震える。たしか、今朝冷蔵庫を見た時に中は殆んど無かつたはずだ。この匂いから察するに…今夜のレシピは中華系で間違いない。冷凍食品大嫌いな亜紀がそんな非常食を解凍するわけがないから、買い物には行つてくれているはずだ」

なるべく刺激しないよう穏便に、何か対策を立てなければならぬ。どうやってご機嫌を取ろうか、と思考を巡らせながら足音立ずに廊下へ上がる。

リビングに近づくにつれ、油を盛大に使つて何かを炒める音が聞こえてきた。

「さっきのファンタジーより幾倍もマシだろ。そう、たかが馬鹿力だ、何度も躲してきた。大丈夫」

「そんなに死にたいのですたら、今すぐに死ねますが？」

「…え？」

階段の傍を通り過ぎようとした矢先、頭上から感情の抑揚が無い声が聞こえた。

それにつられて顔を上げると、二階に続く階段の踊り場から飛び降りてきたらしい亜紀の踵が目に入った。

「ちよ！」

取り柄でもある回避能力フルに使い、悠はフローリングの上で痛む頭もなんのその、飛び込み前転をしながら床を砕く踵落としを見事避けてみせた。

その勢い余って何度も転がりながら壁にブチ当たり、彼の身体はようやく制止する。

しかし、ここからが生死の境目。選択肢のミスは許されない。

「つち、はずしましたか」

「はずしましたよ！避けなかったら死んでるからな！この怪力馬鹿が！一日にそうなんでも殺されそうになるかよ！」

だが悠は冷静に妹を取り扱うことなど出来なかった。右足を床に埋めたまま、亜紀が学校で見せたマジキレに近い顔で兄貴を見てくる。

（ホントに恐いんですけど。伊庭先輩はよくこんなのと真正面からやりあおうと思ったよ）

尚も冷たい視線は向けられる。

「兄さん。夕飯の買い物は、その日の当番じゃ無い方が責任をもつて行く。兄さんが作ったルールです、忘れたとは言わせませんよ？私のコツコツ溜めた預金を削れて、そんなに愉快痛快ですか？」

「それはホントに悪かったと思ってる…。イロイロとやんごとなき事情があつてだな…」

詳しく言えない。だが嘘は言っていない。あまりにも沢山のことを同時に起こりすぎて、細かく話しても信じて貰えないだろう。



「…はあー、別にいいですけどね。後で夕飯の買い物代を請求するだけです」

ちやつかりしている亜紀はそれ以上に悠を責めることしなかった。右足を床から引っこ抜くと、倒れたままにいる悠へと手まで指し伸ばしてくれる。

「ど、どうしてんだ。やけに機嫌いいじゃないか。いつもなら容赦ない追い打ちが飛んでくるはずだろ？」

「…お望みならやってあげますが、いまは兄さん如きに時間を裂くのが勿体無いです。今日は姉さんが久しぶりに腕を振るってくれているので、これ以上血の制裁を続行するよりは早くお手伝いに入りたいんですよ。ですから、今回だけは大目にみてあげてくれます」

一瞬で悠の呼吸が止まった。

「…は？姉さん？」

妹が何を言っているのか、思考が停止しかけた。

そして今更ではあるが悠は気が付いた。

悠に手を差し伸べる亜紀がここに居るのなら、いったい誰が台所で調理しているのか。包丁がまな板を叩く音は、誰かがその行為をしていないければ発せられない。

母親はまだ帰国していない。父親はもういない。時々夕飯を食べにくる瑩だが、彼女は料理はからっきしダメだ。

なら、いったい誰が？

そして、まるでタイムングを見計らったかのようにリビングのドアが開け放たれた。

「あ、やっと帰ってきた。こんな時間までどこをフラフラしてたんだ？」

リビングから入る夕日に輝く、金色のサラサラした長い髪。奏風高校の制服の上にエプロンを着た少女があまりにも自然な態度で立っている。

彼女、乃瀬ヒカリがそこにいた。

何食わぬ顔でいるヒカリに、人違いだろうかと一瞬疑う悠だったが、どうみても放課後の路地裏で凶器を振り回していたあの電波女で間違いない。

「すみませんでした姉さん。今すぐお手伝いしますから」

そして、亜紀はまたヒカリのことをはっきりと姉さんと呼んだ。開いた口が塞がらないとは、まさに今の悠のことを言うだろう。餌を欲する鯉のように口はパクパクと動くが、声が出ない。言いたい事は山ほどあるはずなのに、取り敢えずこれだけは叫んでおかなければならなかった。

「なんで、お前がウチにいる。乃瀬ヒカリ！」

悠はキッチンに戻ろうとしているヒカリを指差しながら叫んでいた。

人を躊躇わずに切りつける毒電波中二病女、乃瀬ヒカリは悠の当然の反応に小さく笑ってみせた。間違いない、あのヒカリだ。

穴が開くほどヒカリを睨んでいると、

「兄さん…姉さんに向ってそんな口の利き方が許されるとお考えですか？もう二、三回ほど上下関係というものをお教えするために昇天させますよ？」

右足を床上げる亜紀。

理解不能。

リアルで幼なじみの顔をした子に殺されそうになるという貴重な体験をしたばかりの悠だが、これまた非現実な出来事にフリーズにかけてしまう。

「あ、亜紀。お前、そいつとはいっつ知り合った」

「はい？私達の従姉じゃないですか…いったい何言ってる…ま、まさか兄さん、とうとうボケてる」

本気が冗談か、悠のことを心配してくる亜紀を今は全力でスルー。

悠の中では、冗談ではない何か崩れ去っていく音がした。

一見すると賑やかな食卓。テーブル一面に並べられた料理を、悠は一人静かに口に運んでいた。

和気藹々と会話する二人を見ながら、黙々と食事を続ける。

なんとも落着かない。向かいの席には亜紀。その隣には未だに制服のまま腰掛ける悠のクラスメイト、乃瀬ヒカリ。

今朝まで存在すら知らなかったはずのクラスメイトが、悠達兄妹の従姉としてやってきていた。それも、本当に長い付き合いであるかのように織笠家に自然と馴染んでいる。

だが放課後のトンデモない出来事を考えると、今の悠は最初のように取り乱してはいない。どこか他人事のように今あるこの家庭をみていられた。

「あの、兄さん。お口に合いませんでしたか？」

そんな悠の無表情に気が付いたのだろう。亜紀が悠の箸が伸びる料理とこっちの顔を交互に見てくる。それは確か亜紀が作っていた物だ。

「ん？… ああ、美味しいぞ。このスペアリブか？黒酢漬けとかは俺の作るエセ中華の何倍も良い出来だ」

本音だった。どれも絶品でどこの高級店の味にも劣らない。改めて妹の技量に、驚かされていた。そして何より、乃瀬の料理が見た目の洋風に反して中華も作っていたりして少し驚いていたりする。

そんな中、悠だけが蚊帳の外だった。いつの間にか夕飯は終わり、一服のお茶も素早く済ませてリビングから出ようとした。

「ユウ。後で話しがあるから君は部屋に居てくれないか？」

従姉になりきっているヒカリは笑顔でそう言ってきた。その裏に潜ませたモノは何処か緊張感を含んでいるようにも見える。

「…はいよ。ご馳走さん」

リビングから出るころには、二人は未だに尽きない話の夕ネを盛り会話を再開していた。

「もう俺は、驚かないからな。天変地異でも起こらない限り取り乱してたまるか」

階段を登りながら声にだして誓う。

瑩そつくりな少女に殺されかけたり、手品師ばりの謎の異国の少女が存在しない従姉になっていた。振り返ってみると散々な一日だった。

部屋に入って、壊れたままのベッドに背中を預ける。やはり相当疲れていたのか、食後の休息もほどほどに、ウトウトとし始める悠。

「ユウ。入るぞ」

どれくらい経ったか、扉をノックする音に目が覚めた。薄い板の向こうから夕飯の時とは若干声色が違うヒカリの声が聞こえる。

「ああ、入れよ」

入ってきたヒカリはやはり制服だが、さっきまで付けていたエプロンは外している。表情には、亜紀と接していた時のような優しさ

はない。

「何にも無い部屋だな」

「まあね。生憎と無趣味なんで」

V字のベッドを背に預けたまま、ヒカリの方を見ずに答える。

「今時の若者が悲しい青春を謳歌してるじゃないか」

「喧しいわ、どんな生き方だって俺の勝手だろ。それでも今の生活、  
と言つか生き方にはそれなりに満足してるんでね」

「…君はいつもそんなベッドで寝ているのか？寝辛そうだな」

「んなわけあるか」

顔を起すと、ヒカリがすぐ目の前で悠を見下ろしていた。

高圧的な態度は変わらない。ヒカリが自分から悠に声をかけてきたということは、昼間の別れ際に言っていた通り全てを話すつもりなのだろうか。

「また後でつてこつという事かよ。それで乃瀬、お前には聞きたい事が山ほどあるんだが、お前もその為にウチに来たんだろ」

ヒカリは何の遠慮も無く、回転椅子を引っ張ってきてとそこに足を組んで腰かけた。

「そうだな。色々と話すべきことはあるんだが」

金髪を靡かせながら堂々とした態度で踏ん返り返っている。

「まず第一に、私にはこの地に住む宿がない。これが一番重要だ」

「今までどうしてたんだよ」

「知人の家に居たが、あいつはウザイだったので出家した」

「…ホテルとか行けばいいだろ」

「生憎と、金なんてものはない」

ヒカリは豊満な胸を張って堂々と宣言した。

「だからって人の家の夕飯に集るなよ。ウチは裕福でもないんだ。まさか、タダ飯食らいの為だけとか言わないよな」

もちろんだ、とヒカリは続きを口にする。

「第二に、生憎と私は君を監視する義務がある。面倒だから常に近くにいる方が何かと都合がいいだろ？」

「監視？何の為に。昼間の件と関係あるのか？それとも…」

右手の握った拳にはいつの間にか力が入っていた。

ヒカリが椅子の背もたれに体重を乗せると、椅子が軋んだ音を上げる。核心を突く疑問だった。

「あの襲撃も無関係ではないな。君が特別だから、だと言っておくか」

どこか戯けている雰囲気から一転、真剣な眼差しを向けるヒカリ。

「特別？」

お互いに黙ったまま、壁掛け時計の秒針だけが規則正しいリズムを刻んでいく。悠を見つめる灰色の瞳は、路地裏で見せた危険な雰囲気とも、織笠家にどういうわけか溶け込んでいた姐御肌的な雰囲気とも違う。

その目は「これ以上を聞きたいか？」と言っている。軽い警告にも見えた。

「…それじゃあ今朝まで接点の無かったお前が、なんでウチの親戚ってことになってる。亜紀はあの通り生真面目な奴だからこの手の冗談には乗らない。こればかりは…あんな手品じゃどうしようもない」

何も無いところから大きな鎌や槍や斧を取り出してみせる芸当など、いまの状況に比べればじつに些細な問題だ。

ヒカリは、あーそれ、と軽い反応ですますと、

「私がこの地にいる間の境界を歪ませただけだ。今この時間、この世界、この世全ての人間は私が織笠家の親戚にあたる乃瀬家の長女であることに何の疑問も疑いも持つことは無い。もちろんそんな家は存在しないがな」

すらすらと、何の迷いも無い回答を返した。言っていることは意味不明で理解できないのだが、彼女が言うつとさも常識のよう聞こえるほど雄弁だった。

「悪いが、何を言ってるかわっぱり解らん。ほんと、お前は何者だよ」

結局はそこに辿り着く。

学校で始めて会った時から少なからず思っていたこと、それは路地裏の件で余計に気になってしかたが無いレベルに達した。

首筋がチリチリする感じ、謎だけが悠の頭の中ををグルグルと回っている。

ヒカリは一瞬だけ笑みを浮かべると、口を三日月型にしてゆっくり



りと答えた。

「私はな、君達が俗に言うマホウツカイという奴だ」

「魔法、使い？」

悠の頭の中で思い描いた漢字が、ヒカリの言う名称と一致しているのならば、その存在はおとぎ話や物語の中だけに登場してくる架空の存在。マホウツカイと言われればそれしか思い当たらない。

存在するかどうかも知らないそれが自分だと、ヒカリは言っているのだった。

「は、はは。魔法使い、か」

普通ならば、ただ毒電波を受信している危ない奴としてこの話をこれで片付けたかもしれない。

だが、全否定が出来ない悠がいた。

男四人をいとも簡単に撃沈してみせ、何も無いところから手品のように発光する鎌を取り出し、躊躇いも無く女の子を斬り捨てる。さらには中二病を拗らせたような内容の言動と発言、決め手はこうして悠の親戚としてここに居る。

常識外れの事をやってのけた経歴がヒカリにはあるのだ。

だが、それら疑念がなくとも悠はヒカリの言葉を疑わなかっただろつ。

「む、随分と拍子抜けな反応だな。今となっては魔法使いなど、レツドリストに載っているスペインオオヤマネコ並に数が少ないんだぞ」

「今更お前が魔法使いだと言われてもな、これまでのお前を見てたらなんだか納得しちまった」

ヒカリは絶滅危惧種の野生動物を引き合いにさすが、一般人にしてみれば魔法使いなどそれ以上に出会うことが出来ない存在だろう。それでも悠が別段驚いた風に見えなかったのは、心のどこかでそんなファンタジー的な展開を予測していたからだだった。

「…まあいい。取り敢えず、君はこちらのたまかな事情さえわかっ  
ていてくれれば今はそれで十分だ。そのうち、順を追って詳しく話  
すことになる」

一方的に話しを終えたヒカリは、悠が口を挟む暇も与えずに椅子  
から立つと床に付いていた髪を右手で？いた。

悠の反応を確認しに来ただけなのか、クスクスと笑いながらヒカ  
リは黙って部屋を出て行った。

しばらく、悠は放心していた。気が付いたら時計の長針が一周し  
かかっている。

「はは、納得か。わけわからんってのに何言ってるんだか」

まだ風呂に入っていないことを思い出し、汗を流しに一階に下り  
た。

上がると、すぐに亜紀に壊されたままのベッドの横に布団を敷い  
て寝転がる。

「魔法使い か。まるで現実味が無い話ではあるが…」

平穏を装っていた日常は、あっさりと壊された。

悠をなぜ監視するのか、なぜ襲われたのか、それをヒカリは語ら  
なかった。

自分が魔法使いであると告白しておいて悠の知りたいことを言わ

ないのには理由があるのだろうか。

「だー！これ以上頭を使うとまた頭痛が再発する！」

今日一日、不定期にやってくる頭痛は落着いていた。

自分の置かれていた状況を悟りはじめているのかもしれない。自分でも自分という存在が疑問で仕方が無かった。

「実は寝て目が覚めたら夢でした、ってオチを期待するか…」

眠って、少しでも現実から目を背けるのも手である。

ようやく疲れた体を休められると思うと、あっという間に眠気がやってきた。目を閉じる。静かで、何も無い平和な夜だ。

今夜は、外出を避けよう。今朝あんな夢を見たばかりだ、朝までぐっすり眠ろう。そう決める。だが、

「起きろ！」

ドゴンツ！という爆音に悠は叩き起こされた。いきなり部屋の窓が粉々に砕け散ったのだ。窓ガラスをを破った音なのに、まるで爆弾が爆発したかのような、脳を揺さぶる音だった。

「ツな、なんだ！襲撃か！」

昼間の様にまた襲われたのかと思い、ガラスの雨を浴びながら反射的に飛び起きた。

取り敢えず近くに落ちてきた手の平サイズのガラス片を手に取り、体勢を整える。

「おい。何してくれてんだ。乃瀬」

ようやく状況を理解した悠がガラスの破片を放り捨てる。

「やあ、起きたか。お姉様のご帰宅だぞ」

一度、目の前の現実から目を背けて時刻を確認。

深夜一時。

町が寝静まりかえるいい時間だ。

それなのに、未だに制服を着たままの金髪灰眼の大馬鹿が窓際に両足を掛け、中腰の姿勢で立っていた。近所迷惑もお構い無しの突入である。

「ご帰宅、じゃねえよ！どうしてくれんだこれ、誰が掃除すると思ってる！あまた亜紀に殺され……って……あら？」

あまりの騒音に、てっきり亜紀が自室からすっ飛んでくるかと思いきや、いつまで経ってもやって来やしない。

「それなら心配するな。今は時間が無くてな、蹴破る前に少しココの空間へ手を加えておいた。面倒事だけは避けたかったからな」  
「事を面倒にしたいくないって言うなら、玄関から入ってこい。もっとも一般的で常識的な方法をなんで実行しないんだ……」

時間が無い、という理由だけで窓を蹴破られる悠の部屋はたまったものじゃ無い。

「……はあ、とにかくもういい。お前に常識というものを求めるだけ無駄だっていうのはよく解かった。それで？なんだよ。何をそんなに急いでんだ？」

押し入れから塵取りと箒を取り出しながら欠伸をこぼす悠。一人でガラスの掃除を始めた。

「おっと、そうだな、緊急事態だった。予定を大幅に変更する必要があつてな、今すぐ私と来い。拒否は出来ないからそのつもりで」

乃瀬はそのまま詳しい説明も無しに悠の箒も持つ手を掴むと、そのまま窓から夜空へと向つて飛び出した。

「ちょ！っおおおおおっ おおい！」

箒と塵取りを放りだし、悠の身体は窓から外へ。眠りに就いた町で太い悲鳴がこだました。

「… 応答、願います」

紅蓮の炎が燦る。

小型のインカムに手を当て、少女は澄み切った声そう呟いた。未だに銃撃戦時の耳鳴りが止まない中、通話が繋がったらしい耳触りな音が入ってくる。

炎の中で倒れている全員の生存を確認していると、向こうと繋がった。

『お、ようやく連絡してきたか。そっちはどうなってんだ』

耳元の通信機を通し、若干ノイズ混じりの声が耳に届く。自分の通信が無事に届いたこと確認すると、改めて周囲を見回した。炎による爆破によって誘爆が連鎖的に起こり、消火機能が追い付いていない。

少し派手に立ち回り過ぎてしまったようだ。

「無傷とは、言い難いです。少し厄介なことになっていました…」

『ああ、こちらでもある程度は把握しているつもりだ。お前の寄こした例の荷物の件、それは帰ってきてからあの馬鹿と一緒にじっくりと聞かせてもらうからな、覚悟しとけ』

少女は短く息を吸い込むと、震える唇でマイクの向こうに尋ねた。

「それで…そちらは」

『大丈夫だ。今はあいつが監視に付いている。一度終焉を齎す者に

ラグナロク

襲撃されたようだが、アイツが付いてればそれも心配ないだろう』

少女は、その言葉に通路の床で足を崩してしまった。安堵から緊張の糸が切れてしまったのだろう。そのままじっと、体の小さな震えが消えるのを待ってから再度通話を再開する。

「ご迷惑をおかけしてすいませんでした。恐らくこれで、通信は最後になります。これより深部は通信の圏外ですし、いつ通信を傍受されてそちらを危険にさらすかもわかりませんから」

『おお、わかった。だが現状の説明はしていけ。でなければこちらもプランが立てられない』

少女は口籠った。通信機の向こう側にいる相手が何を言いたいのかわかったからだ。

「応援は必要、ありません。救助も無用です。どうかこのまま私は切り捨ててください」

迷わずそう答えていた。すると、スピーカーの向こうで何かが割れる音がして耳を劈く声が飛んでくる。

『おいふざけるなよ。独断で行動した拳句にボンミスしたから見捨てるだ？んなこと俺が許すとも思ってるのか。家族の誰一人、そんな犠牲は望んじやいない！』

少女は堪らずインカムを耳から遠ざけた。余りの怒号に鼓膜が破れかと思った。

「…それでも、私のミスです。自分で招いた不始末は…自分で片付けます。安心してください、本来の務めは果たしますから」

何やら焦った風な声が聞こえたが、それを聞き遂げずに少女は一方的に通信を切った。

その時と同じくして、ようやくスプリンクラー起動して消火が始まる。

「ッう…こんな苦しみは私一人で十分だから…」

少女は自分の震える体を両手で抱きかかえた。前髪の下に隠れた顔は蒼白で、苦痛に歪んでいる。

気を失って倒れている鎧達はピクリとも動かない。ここには少女の身を案じてくれる者などいない。

今の戦闘によって破損してしまった腰に装着した機器に、そつと手を当てる。彼女の命を繋ぎとめる機械が亡くなった不安が少女の心を押し潰そうとする。

それ以上に、自分の未熟さを悔いた。

傷ついたのは心だけではない、少女は擦り傷だらけだ。銃弾の雨の中で負った傷も消火用の水に沁みて散々な有様。

かなり無茶をしたのが容易に窺いしれる。

しばらく回り続けていたスプリンクラーを浴び続け、動悸が落ち着くまで座り込んでいた。あらかた周囲の消火が終わり、放水の勢いが弱まってから大きく息を吸う。

「ありがとう。落ち着いた…よ」

消火が済んでも尚暴れるスプリンクラーに感謝の言葉を残し、少女は顔を隠していた長い前髪を一度掻きあげる。

今までの間、ずっと隠れていた整った素顔が現れた。

濡れた漆黒の長い黒髪の下にある蒼い瞳、光る瞳は少しずつ輝きを取り戻して行く。



「行かないと…」ここで逃げ出したら私のしたことが無駄になっちゃ  
う」

顔色は依然悪く、息も必要以上に乱れている。しかし、無理をし  
てまで作った時間を無駄にしない為に少女は立ちあがった。

時間は、刻一刻と少女の命を蝕んでいく。

着いたぞ、とヒカリはある建物の前に飛び降りた。

その向いにある高層マンションの屋上（12階）からのダイブだった。

「げごはッ！…お、お前も俺を殺す気か！」

ヒカリに放り出されて地面に転がりながら叫ぶ悠。

家の窓を飛び出してから10分、ヒカリは住宅街の屋根を走り続けた。その間、彼の身体は宙をあつちにプラプラこつちにぶらぶら。何度も電線や電柱に殺されそうになりながらの移動だった。

死にかけた身体を起こすと、目の前にあつたのは小さな喫茶店。少し草臥れた作りで年季の入った三階建ての物件だ。一階にあるのは個人経営のお店で、こんな時間だというのに店を開けている。もちろん中にお客の姿は見えない。

「なんだ、ここ。ただの喫茶店じゃないか。まさかお茶する為だけにわざわざ連れだしたのか？言つとくが、お前が無理矢理連れだしたお陰で金は無いからな」

「阿呆、緊急事態だと言った。誰が君みたいな男と茶を楽しむか。こちらの予定が繰り上がったから連れてきたまでだ」

ヒカリは迷いも無く喫茶店の戸を豪快に開け放った。戸に着いたベルが来客の存在を知らせる。

ガラガラの店内に、一人でカウンターに座りながらハードカバーの本を読んでいる人物がいた。何やらウェイターの様な格好をしているので、この店の従業員だろうか。

「連れてきたぞ」

30代後半だろうか。無精髭で堅はいいが、纏っている雰囲気は穏やか。虫一匹殺さないような穏やかな顔を本から上げると、入ってきた悠とヒカリへ目を向けた。

「着たか。へえ…お前が…。おっと、俺はこの喫茶店「鳥兜」とりかぶとのマスターで今野聖士こんのきよしつてもんだ。よろしくな」

「あ、どうも…織笠悠です」

握手を求めてきた今野聖士という名のマスターと握手を交わし終えると、彼はまた同じ体勢で本を読み始めてしまった。

「…で、なにが急用なのか未だに解らないままなんだが？」

「説明は後だ…おい聖士、準備は出来ているな？」

悠の言葉を掻き消すように、ヒカリは聖士に確認を取る。

「ああ、下準備なら出来てる。俺達がしてやれるのはここまでだからさっさと行け」

文字を追う目を止めずに、聖士は店内の奥を指差した。

ヒカリはまた悠の腕を引くと、彼の示した店の奥へと歩きだしてそのまま従業員用の通路へと入っていった。

「なあ、さっきの無精髭のマスター。お前の知り合いだったりするのか？顔見知りみたいだけど」

店の裏側にしては随分と入り組んだ通路を歩き続けながら、悠を

導くヒカリの足取りに迷いは見えない。

枝分かれした道をどんと奥へ。

「ああ。暑っ苦しい上に五月蠅い男だが、私が君の家へ押し掛ける前に世話になってた奴だ」

「暑苦しい？ 優しそうな雰囲気の人に見えたけどな」

どこまで続くのか定かではない長い通路は、結構進んだにも関わらず終わりが見えない。

さつき見た建物の外見以上の広さを突き進んでいるのは明らかだ。一度も登ったり降りたりをしていないことを考えると、どうもおかしい。

「何だか嫌な予感がしてきたから…帰っていいか？ そうそう、明日は朝練があるんだ。早めに寝ないと俺は低血圧でね、朝起きるのが辛いんだよ。てことで悪い、俺帰るわ」

掴まれていた手を、それとなく振りほどこうとした。が、それ以上の力で手首を締め付けられた。

「君は帰宅部だろう。だがどうしても帰ると言うのなら、ここを知られた以上は全ての記憶がぶっ飛ぶくらい盛大に脳髄ぶちまけるが、構わないか？」

空いた方の手にはいつの間に取り出したのか、発光するネイルハンマーが握られている。

どうやら本気らしい。ここで逆らうことだけは出来そうもなかった。

「記憶どころか死ぬだろ…そんな脅しされたらもう逃げる気すら失

せるわ。それで？　いったい俺はどこまで連れて行かれるんだ？」

言った直後、どうやら終着点についたらしい。

悠達が着いた場所は、掃除用具入れのロッカーだけが置いてある薄暗い通路の終わりだった。周りには扉の一つもない。だが、

ガンツ！ガンガンツ！

ヒカリがロッカーの側面を何度も叩き始めた。薄暗い中、あまりの大きな音に不安に駆られる。

数回程で叩き終わると、彼女は用具入れの戸を開けた。

そこにあっただのは

「…おいおい。またか？」

辛うじて足元が見える程暗かった通路が蛍光灯の光に照らされる。掃除用具入れの中にあっただのは、箒やモップ、バケツなどの道具では無かった。内装は真っ白で三畳程はある異質な空間だけがそこに存在している。

そのロッカーに近づいて中を見た。

「エレベーター？」

内装の雰囲気はどこにでもあるようなエレベーターに似ている。しかし、明らかに構造がおかしい。ロッカーが壁に張り付いているとは言え、ケーブルやローラーなどがあるようには見えない。なにより、エレベーターの体積はロッカーの見た目以上に奥行きと横幅が広がった。背伸びをしてロッカーの上を除いてみるが、何も無い。あるのは積もった埃くらいだ。

「どっとなってんだ…」

「ほら行くぞ。さっさと入って閉める」

エレベーター（？）に押し込まれる。悠はヒカリに言われた通り内側から戸を閉めた。

「これ、手動で閉めるのな」

戸惑う小言も言い終わらない内に、箱へと振動が加わった。

体感からどうやら降下しているらしい。それもかなりの高速だ。耳の詰まるような感覚がある。エレベーターの中を見回しても階を示す様な表示も、行き先を決定するボタンも見当たらない。

今どれだけ潜っているのか、どこまで潜るのかさえ不明だ。

「さて、これで君はもう帰ることが出来なくなったわけだ。では君を連れてきた理由を話すとするか？」

ヒカリが悠へと向き直る。そうしてようやく掴んでいた腕を開放してくれた。

「連れてきた理由を最初に言ってもらいたかったんだけどな…もしかしてあれか？どこぞの秘密結社みたく、俺を改造手術でもして暗殺者に仕立て上げようとか？」

「…君は阿呆か？映画の見過ぎだぞ」

狭い個室で逃げ場の無い悠は、ヒカリの些細な表情の変化に気が付いた。眉を寄せ、哀れみの目で見ている。

お前には言われたくないわ、と言う言葉を飲み込む。余計な口をはさむだけ無駄だ。

「…はいはい、適当な事言っつてすいませんね」

いったい何事を言われるのかと、ヒカリが口を開くのを待つ悠。ヒカリは一度息を吸うと流れるように話はじめた。

「少々私達は面倒事に直面しててな、君にはそれを解決してもらいたい」

その時、エレベーターが大きく揺れて、止まった。

どうやら目的の階層に着いたらしい。ゆつくりと戸が開いて行く。エレベーターの外に続くのは喫茶店の通路のように薄暗い廊下。

だがその規模がおかしい。

二人も並んで歩けないような先ほどの汚い通路とは違った。通路の横幅は大人が五人並んでもまだ余裕があり、天井までは床から何十メートルもあった。

巨大な空間に悠が目を奪われていると、

「本当は時間を掛けて馴らしていかなければならない事なんだがな、事は急を要するから正式な手順は省かせてもらう」

「手順って、俺に何をさせる気だ？」

通路の先に行くヒカリが立ち止まる。

「ところで、君の実戦経験はどのくらいだ？」

何気ない態を装いながらの質問だが、その内容は普通じゃない。

直後にヒカリの手元が一瞬輝くと、その綺麗な手にはあの大鎌が握られていた。

「そんなもん出して一体なに　うを！」

目の前をヒカリの大鎌が風を切って過ぎて行った。  
少しでも顔が前に出ていれば縦に真つ二つだ。

しかし、ヒカリはわざと外したのだ。見えない軌道にバランスを崩し、尻から後に倒れてしまう。

「さあ、殺し合いましょうか」

悠には息つく間も無かった。

ヒカリの踏み出した一步の重みに通路が震えた。彼女の突進に合わせて条件反射で飛び起きると、半歩遅れて下がる。

悠は彼女との間に十分な距離を取るが、

(それほど速いわけでもないのに…なんだ、この重圧)

一歩一歩を踏みしめながら歩むヒカリは、手の中で大鎌を弄びながら向かってくる。

「次は当てるから」

「ッ！」

まだ十分な距離があったはずだ、しかし気がつくと腹の傍を刃が掠めていった。

大振りだった初撃とは打って変わり、鎌を短く持ち直して小回りを利かせているのだ。バトンを操るように鎌が回る。



空気を裂くそれを、悠は逃げながら避けた。彼女の言つとおり、当てる気の満々の軌道だ。

(しっ　死ぬ！)

声を出す暇さえ無い。

無様に転げる悠だが、ヒカリは目を丸くしていた。

「やはり見込んでいた程度の性能か。亜紀との兄妹喧嘩で鍛えられていたとはいえ、もう少し踏ん張らないと死ぬぞ？」

今までで一番えげつない柄の先端のフェイント攻撃からの横払い。悠の見えている世界の限界速度で繰り出される連撃にもなんとか回避した。

しかし、それで終わりではない。扱い慣れた手つきで鎌を遊び、連撃は止まらない。

「うわ、ッ　あぶッ！だ、だから、てっ！一体なんなんだよ！」

ストレスな斬撃を何回も避けてみせる。避けてばかりいる悠の悲痛の叫びは、鎌が風を切る音に掻き消されていく。

「どうした、反撃しないのか？君の力を見せてみると言ったじゃないか」

「この、大概にしるよ…少しは人の話を聞け！」

悠は逃げることに必死だった足を止めた。

「…なんだ？」

不自然に止まった悠に、ヒカリが問う。

「……止めだ。お前の享樂に付き合う気なんて毛頭なし、俺はもうこの馬鹿げた力を使わないって…決めたんだよ」

鎌を構えたまま停止したヒカリに背中を向け、来た道を戻って行く悠。

その背中に痛い言葉が突き刺さった。

「使わない？君はそうして逃げ続けてるだけじゃないのか？嫌なことから目を背け、言い訳をして逃げる。その繰り返しだ」

挑発を無視して悠はエレベーターの前まで戻ってきた。

「口では使わないと言っても、今朝はどうだった。私があそこで入らなかったら君はその腕を使わなかったと断言できるのか？」

あくまでも無視を決め込む悠だが、その脚は止まったままだ。

「少しは出来る奴だと思ってたが、とんだ腰ぬけだったみたいだな。口だけの、現実逃避をしているただの餓鬼だ。こんな奴に微小ながらも期待した私が恥ずかしい」

「…勝手なこと言いやがって」

「自分を見る。本当のことを言われて怒ってるんじゃないのか？自分でもそれが解っているからこそ他人に指摘されて頭にくるだろ？違うか？」

ヒカリが持った鎌を肩に担ぎ直してからも辛辣な言葉は止まらない。彼女の言葉に、悠は振り返った。

「散々言ってくれやがって…そつちがこんな胡散臭いところまで無理矢理に連れてきたんだろ！それなのにいきなり鎌を向けられて、勝手に期待して、勝手に落胆して。俺の何を知ってる、どう生きようと俺の勝手だろうが！」

怒号は天井高い通路に反響した。  
それでも、ヒカリの表情に変化は無い。まるで悠の訴えに感じるものなど無いかのように無表情だ。

「ああ、君のこれまでの人生など大して興味などない。だが私から言わせてもらえば、今朝の学園で何故それだけのものを持ちながらも使おうとしないのかが疑問だがな」  
「お前、言ってることが無茶苦茶だぞ…」

睨みあう二人の間に張りつめていた緊張の糸をヒカリの方から緩めた。つられて悠も肩から力を抜いてしまう。

目の前の同級生は、悠から目をそらさずに真摯に見つめていた。その灰色の目には、恐れも軽蔑も見えない。

「君の持っている驚異的な力、それを何故制御しようとしなない」

再び問われる。

心の奥底に直接語りかけられているような感覚。

「…使えるか。あんな悪夢はもう御免だね」

「あれしきの戯れを悪夢だと？とことんお気楽な奴だったらしいな君は」

彼女の目に吸い込まれそうになりながら、過去の忌々しい記憶が再び蘇ってくる。

思い返すだけで呼吸は荒くなり、薄らと額に汗を滲ませていた。軽い頭痛がまた蒸し返してきた。

「…知ってんなら解るだろ。こんな化物みたいな怪力、齎すのは破壊と恐怖だけだ。俺はそれまで人にこの力を振りかざしたこともなかったんだぞ…それがどうだ、一線を越えたらこの腕だけじゃなく俺という存在そのものが化物だ。普通じゃないから隠してきた、けれど誰かの為と使ってもこの通り除け者さ。普通の生活が出来ないこの力に振りまわされる人生はもうまっぴらなんだよ！もう、力は振るわないって決めたんだ。もう、誰かの…傷付いた顔は二度と見たくないんだよ」

ヒカリは、悠が女々しく泣きごとを言っている間にも一言さえ口を挟まなかった。今も微動だにせず悠を真っ直ぐ見ている。

すると、大きな溜め息を一つついた。

「はあ…とんだチキンだったのだな君は。嫌われるのが恐いから過ぎた力を使わない？今更綺麗事を言ったところで学園の奴らが君を見る目が変わるのか？心の壁を作って接触を避けるその行為は一層君を追い込むだけだと解らないわけではなからう？」

ヒカリの言葉には同情など一切ふくまれていない。真実を、悠が目を反らして来たことを的確に突いてくる。

「君のその強い力が原園瑩の命を救ったのは紛れもない事実。化物と罵られるその力が無ければ彼女は死んでいたかもしれない。だったら何を迷う必要がある」

「…何が、言いたいんだよ」

「正しく力を制御して、正しき行いの為に使えばいいだけじゃないのか？君の妹はどうだ、あの脚は君の腕力と同等のものを持ちながらも怒りに任せて三年の腹に風穴を開けたか？少々やり過ぎた感はあるが、一線は越えて無いぞ。きちんと自分と向き合っているんじゃないのか？」

悠が腕力に壮大な力を持つように、亜紀もその力を脚に持っている。

いつから持っていたのか解らないこれらの忌むべき力を、二人だけの秘密にして決して他人には話さなかった。

当時、小学生低学年の亜紀が悠とケンカして放課後の教室で教卓を蹴り飛ばし、壁を壊して教室二つを繋げたことがあった。

放課後だったから誰の目にもとまらなかったが、その頃からだろうか二人は自分の力の強大さに気が付いていたのだ。

「あいつは、あんな思いをしてない。亜紀は亜紀だ」

ヒカリが言っていることは、永遠と亜紀からも言われ続けたことだった。

自分から逃げている、と。

「君はその力から目を背け、亜紀はその全てを受け入れた。この違い、解らないわけではなからう」

亜紀はその脚の力を生かし、中学生のころに空手部の大会で全国制覇を成し遂げている。飽く迄、強力な脚を常軌を逸し無い程度に加減し、普通の女の子としてだ。

だが悠はどうだ。

力を恐れて向き合おうとはせず、感情で振るった力で、仮に犯罪者でも人の命を奪っていてもおかしくない過ちを犯した。

「原園瑩、彼女は君に優しすぎる。それは同情やただの御節介ではない。彼女が君の鬼のような姿を見て悲しんだのは、力に支配された君自信であつて、君の力そのものではないだろ。正しい使い方をすれば、人間には過ぎた力も器に見合つた力に変わる。受け入れる織笠悠。そして、その力を正しき行いに使え」

それがどれほど難しいことか、悠は身を持って体験していた。だから、頷けない。

「んなこと今更出来るか！化物化物呼ばれ続けるこの腕が、どれほど俺の人生を困ら狂わせてきたと思つてる。何度も力をセーブしようとしたさ、けれどこの世界で生きて行くにはどうあつても強すぎるんだ、少しでも火が灯れば押さえが効かない暴走した力なんだよ、こんなんで、アイツみたいに誰かを護れるかよ！」

退かない悠に、ヒカリは鎌の先端を突き付ける。

「ならば簡単だ。化物になつてしまえばいい。君に見合つた世界に落ちてみるのも一興だぞ。善意と悪意は表裏一体、受け止めてみせろ。私ならばその導き手になつてやることは出来るぞ」

「は、簡単に言つてくれるなおい。それが出来たら苦勞はしないんだつて。亜紀のように容量良くできてないんだよ」

彼女の誘いにどうあつても乗らない悠。ヒカリの話に耳を傾ける気は毛頭無いようだ。

「強情な男だな…ならこれでどうだ。君が私と死合つてくれた折りには、君のその力がなんであるか教えてやるぞ？」

毅然としたヒカリの発言に、俯き欠けていた悠の顔が上がった。暗い表情から一変して顔に光が射す。

「俺のこの力、何か知ってるのか？」

「ああ、知っていなければここまで口出し出来るか。言っただろ？ 私は魔法使いだ。君達人間とは出来が違う。甘く見ないでもらいたいな」

昔から悩まされてきたこの力。ただ馬鹿みたいな力だけが出る腕。その秘密をヒカリは知っていると云う。ただ一回、一回だけ力を使えば憎い腕の秘密が知れる。

(でも、それは瑩との約束を破ることになる)

悠は迷っていた。

ここで力を使えばもう引き返せないかもしれない。また、あの時の様に力に魅入られてしまうかもしれない。

だが、力を制御出来れば？この一回で悠を苦しめる全ての原因が解れば、もう悩むこともないかもしれない。

目の前に突き出された悪魔の誘惑に、彼は負けてしまった。

「わかった、やってやる。やってやるよ。けどな、きっと手加減なんて出来ない。それは覚悟してるんだろ」

力を使うと決めると、急に身体が震えてきた。恐怖か、それとも武者震いか、それとも。

悠の警告に、清々しいまでの笑みを浮かべたヒカリは大きく頷いた。

「君如きでは、私に勝てないから安心してくれ」





それを合図に、悠は見た目からして物騒な大鎌に自ら突っ込んでいった。正気の沙汰ではなかったかもしれない。しかし、身体が動く。気持ちいが、軽い。

ヒカリは悠に向って鋭い二連撃を放つが、それを亜紀との喧嘩で培った回避力で躲していく。

指先から手首を経て、肩までの骨が軋んだ。握った悠の拳はただの右ストレート、それが空気を爆ぜ散らせている。

一方、ヒカリの持つ大鎌も空気を裂いて迎え撃つ。

二つは、あるうことか正面から衝突した。悠は生身、それを刃物で容赦無く斬り付けたのだ。力と力がぶつかり合う音は、通路を揺らすほどの衝撃となる。

だが、

「素晴らしいなあ、その腕。私の武具で斬れなかったものは久しぶりだ」

彼の拳は鎌の刃で受け止められていた。

骨ごと断つヒカリの鎌でも皮膚の薄皮一枚切れていない。まるで拳の前に見えない壁でもあるようだ。

悠の腕は銃弾をも弾く。刃物であろうと斬られることはなかったけれども、大鎌を破壊する気で強打したというのに、右手に貫くような痛みが走るだけで刃はヒビ一つ見受けられない。

（な、なんで碎けなかった！）

悠の拳は幾多もの鉛玉を弾き、鋼の塊をも軽く貫くことが出来た。

しかし、たかが数センチの厚さしか持たない鎌を何故か破壊できなかった。

久しぶりに腕を振るったからか、上手く力が入っていないのかと思っただが問題は無さそうだ。

「けれど、初手からこんなにも可憐な女子へ向ける拳にしては手加減がないんじゃないか？」

「…どの口が言いやがる。突拍子も無く斬りかかって来るような危ない奴を可憐とは言わねえ。それに、もう後戻りは出来ないんだ。容赦なんてこれっぽっちも必要ない」

「言ってくれるじゃないか。ならば、少し速度を上げてやろう」

透き通るような微光を放つ赤銅の鎌の表面が、僅かに発光しはじめている。その光は刃の部分から発生し、鎌全体を包みこんでいく。

(なんの光だ?)

発光が全体に行き届くと、ヒカリは鎌を払ってお互いの距離を離して自分から距離を取った。

すると、鎌を腰に構えた。その姿はまるで居合でもする武者のように見える。

「なんだ、この嫌な感じ」

刃の届く距離に自分が入っているかどうかという境目にいて危機感はあるのに、動けない。生存本能はこれ以上の深入りは危険だと訴えていた。構えを崩さないヒカリが不気味に笑う。

「軽率な判断は自らの身を滅ぼすが、その点は心得ているようだ。その間隔を素人が持つには相当修羅場を潜る必要があるが、勘も申

し分ない。だが、殺し合いには直感に反した行動も時として必要になるぞ」

ヒカリが鎌を振り抜いた。

その刃の軌道は、悠の目には一瞬しか映らなかった。それほど速度で振られた鎌から斬撃が放たれたのだ。鎌の起こした空気の刃が、足元から悠の身体を縦に真つ二つにしようと迫ってくる。

(後退して いや、間に合わない！)

避けられそうにないその一撃に対して、悠は真つ直ぐにヒカリの懐へと潜り込んだ。直感で自分から飛んでくる刃に向っていったのだ。

それが功を奏し、思っていたよりも簡単に刃を右腕で撃ち反らすことが出来た。そのままの勢いでヒカリに向って突っ込む。

右手は、先ほどと今の衝撃で思う様に力が入らなかった。初めて覚える右腕の違和感に、咄嗟に握り変えた左拳をヒカリの胴体へと叩き込んだ。

タイミングは完璧だった。しかし腹部を殴り抜いた感触は、当然のように無い。

「思っていたより状況判断能力もあるな。驚いたぞ」

「…伊達に毎日の様に殺人キックを浴びてないんでね。逃げる事に關しては、こつちより自信がある」

空いた右手を振って見せる。

悠の左手は、何処からか取り出したもう一本の鎌の腹で受け止められていた。ヒカリの表情にはまだまだ余裕が見える。完全に遊ばれているらしい。

「なら、次はどうだ。死なないように生き延びてみせてくれよ。そして、存分に見せてくれ。君の力とやらをッ！」

左手を、刃を傾けて受け流される。

流れるような動作で、ヒカリが逆手に持ち直した右の鎌が左半身側から、左手の鎌が右半身側から迫ってきた。その刃は元の大きさの二倍程に大きく、まるで巨大なハサミだ。

二つの刃が悠に来る。

逃げ道は、無い。

いや、抜け道はあった。危険だが、一本だけ。

逃げることに向きかかっていた意識を必死に繋ぎ留め、もう一度前に踏み込む。逃げの姿勢では無く、攻めの姿勢へ。

直線的な斬撃とは違い280度を囲まれている。だが、さっきも出来た。

「切られる、前にッ！」

姿勢を低くし、力が戻ってきた右肘で右側面から迫る鎌を叩き落とし、扱い慣れていない左手にもう一度力を込める。

軋んで悲鳴を上げる全身の神経。

「やる！」

懐に飛び込む、これしか活路は無かった。

逃げてはこの肥大した刃に吸い込まれる。両腕だけで防ぎきれるとも限らない。ここ一番の大振りをかましたヒカリへ、一撃をお見舞いするには絶好のチャンスだ。

悠の左拳は、まるで吸い込まれるようにして乃瀬の顔面に入

「あぶないあぶない…私に茨の外套を抜かせるなんて、少し君を過

小評価し過ぎていたらしい」

らなかった。

「なん、だこれ」

悠が殴ったのは、針の山。いや、刃物の山だった。刃物の山がまるでマントの様にヒカリを覆っているのだ。彼女の背中にはまるでハリネズミのよう。ウエディングドレスの裾のように長く床に垂れた外套の先の先まで刃物が付いていた。

マントには隙間の無いように大小形状様々な武器が付いている。良く見れば、悠の拳の埋まった傍に昼間みたあの大斧が有った。

ヒカリが顔を守った個所は、悠の踏み込みの一撃による直撃を受けて数本の剣が砕けていたが、その刃物の下では無傷なヒカリが笑っている。

「私が直接魔力を注いでいないとはいえ、一級品の神具を破壊されたか。楽しくなってきたな」

ヒカリが悠の攻撃を防いだのは、その一部に過ぎない。なにせ、武器を纏ったマントは彼女の身体の三倍はあろう。

受け止めた悠の拳とマントを一緒に払うヒカリ。  
たまらず、悠の方から彼女と距離を離していた。

「お前、そんなもんいつも纏ってやがったのか？」

「もちろんだ。備えあれば憂いなしというのだから？装着者である私に全武具の重量がかかる以外、具現化しない限りは普通の人間には見えも触れもしないがな」

巨大なマントを引き摺りながら、後退し続ける悠をヒカリはのっ

そりと追う。

何度が彼女の動きを見て、毎回動きがゆったりとしていた原因がこれでわかった。これだけの装備を常時持ち歩いていたのだ、動きが鈍くなっても仕方あるまい。

「時間も無いことだし、次が最期としよう。死にたくなければ攻撃しようだなんて考えないほうがいいぞ」

刃と刃が激しくぶつかり合う。今まで見えも聞こえもしなかったそれらの凶器の重みに寒気がした。不協和音は何かの音楽を奏でているかのようで、悠に恐れを抱かせる。

少しずつ自分の死が近づいてくる恐怖に、両腕の力も忘れてしまったのか悠はすっかり逃げ腰になってしまった。

(こんどこそ本当に死ぬ )

そして轟音。

気持ちで弱い部分を見せた悠の隙を付くように、ヒカリが動いた。マントを羽の様に大きく広げた彼女は、床を今までとは打って変わって滑らかに滑走して悠の目の前に何百もの切っ先を突き付けたのだ。

一瞬の出来事だった。腕で防御するという動作すら出来なかった。

「と、まあ本当に殺すわけにはいかないからな。これが本物の殺し合いなら君は死んでいたが、一応の素人としては及第点と言った所か」

悠は殺されなかった。

初めて感じた“死”という概念に、身じろぎ一つ出来ないままだ。殺気。昼間も瑩そっくりな少女に向けられたドス黒い感情に、体

の芯から言い得ぬ感情が湧きおこっている。

(まったく、反応できなかった…)

どちらが先に叩きこむか、それで勝負は決していたはずだ。だがヒカリの言う通り、本気でヒカリが悠を殺す気だったら彼女は殴られるのを覚悟で迷わずその針山で突っ込んで来ただろう。

その結果は言うまでも無い。

すっかり気圧されてしまった悠は、そもそも反撃するということすら忘れてしまっていた。

全身を覆った外套を、武器のように煙へと消したヒカリは何事もなかったかのように歩き始める。

「あ、おい！これで本当に俺の力の秘密を話してくれるんだよな」

「ああ、だが私の話を聞いた後にしてもらおうか。君にはやってもらうことがあると言っただろ？」

格違いのものを目の当たりにし、もうヒカリに反抗するようなことはできなくなっていた悠は、彼女に戦闘の意志が無いとわかっても臨戦態勢が解けなかった。どこかで、まだ身構えていなければならぬ気がしたのだ。

「ああ…それが。さっき言った『解決して貰いたいこと』ってやつか？」

ヒカリは振り返らずに告げる。

「そう、君には君のその力に見合った死地（せじ）に行ってもらわなければならない」

「死地？」

薄暗い通路を奥へさっさと歩き始めてしまったヒカリを追いかける悠。その背にすぐ追いつくと、ヒカリは歩いたまま首を捻って彼の方を向いた。

「ああ、本物の殺し合いだ」



## 2 - 8 (後書き)

これから、少し更新スピードが落ちます。

彼女には、いまある世界だけが自分の知る全てだった。

明日には消えるかも知れない隣人や仲間、そして友と呼べるか解らない近しい存在。

彼女は『死』と言う言葉をまだきちんと理解しきれていない年頃だ。突然居なくなる者をいちいち気を止めるようなことはしなかった。

時には自分がその手にかけてた者もいた。そうしなければならなかった、だから刃物を振るった。

それが、ここで生きていくということだったから。

確かな事は、中等部に進学した最初の日。彼女の人生はこの日を境に大きく変わってしまったということ。

入学式を終え、少女達新入生は体育館に集められた。これからあるテストが行われるらしい。

事前に告知されていたテスト内容。それは新入生達にとっては至極簡単なものだった。

ツーマンセルでのやり慣れた課題。これまでに何度も授業で経験してきた。

その頃と比べれば危険度も高めなものになっているらしいが、しかし勝手は解っている。だからだろう、誰もが軽い気持ちでそのテストに臨んでいた。

恐らく、学園側は新入生の実力を自分の目で図りたいのだろう。この方式ならば多くの能力測定が出来る。

なんせ、本気での殺し合いなのだから。

だが、小等部卒業時のテストで合格ラインギリギリだった彼女にとっては大問題だった。自分の実力が数週間前と大差無いことくらいわかつている。

そして、少女は目を覚ました。

気が付けば、放りこまれていたのは小等部のころにも何度も使ったことのある施設の天井。窓も家具も何も無い古びた一室で目覚めると、しばらく天井だけを眺めて心を落ちつける。

「よお、起きたか？」

刷り込まれた自衛本能が、声のする方へと警戒を強めた。そちらへと飛び起きざまに視線を送ると、隣のベッドの上で拳銃を組み立てる男子生徒がいた。

身なりは少女と同じ学園の制服。まだ真新しさが際立つ。

当然、彼も新入生なので少女と歳は変わらないだろう。しかし、歳のわりには感じる雰囲気は熟練者の出立ちに見える不思議な少年だった。

少年の胡坐を組んだ足の傍にはマガジンが無造作に置かれており、その傍には抜いた弾丸も転がっている。

ぼけーっと少女は少年の手の動きを見ていた。もうすぐ組み立て終わるのか、作業に集中していて、最初の一声以来少女の方へは一度も視線を向けはしない。

不用心にも少女をまったく警戒などしていなかった。

「よし、終わりっつと」

少年は慣れた手つきで小銃を組み終えると、手の中で弄び始めた。子供の手には少し大きい銃を眺めると、ようやく少年が少女の方へ顔を向けた。

「さて、随分とお寝坊なお姫様だな。もうすぐ試験が始まるぜ」

体内時計の感覚では、彼の言う通り試験開始の時刻だった。

「そっぴや、お前が俺のパートナーでいいんだな？」

鋭い目に見詰められ、少女は危うく目を反らしそうになる。

だが事前に試験管達から聞かされていたツーマンセルという内容を思えば、彼が少女のパートナーであろう。

しかし、

「…でもよ、同室の者が協力者だとは言われて無いよな。お前が新入生だという証拠もないことだし、もしかしたらこの段階で早くも厳選する気かもしれないぜ？」

咄嗟に、少女の目と手はベッド横の台座にあったナイフへ向いていた。手を伸ばせば十分届く距離。しかし、彼女の眉間に銃口が押しつけられた。

少年に銃を突き付けられ、ナイフへ伸ばそうとしていた少女の手は止まらざるを得ない。

「おっと、そのまま手を引っ込めないなら敵とみなして撃ちまうぞ？」

冷たくて冷酷な殺気だった。たかが十代前半の子供がだせるような殺気ではない。少年の指が引き金にかかっていく。

「…」

「なーんてな。お前の顔には見覚えあるよ。6年の時、お前二組だったろ？俺は3組だったんだ」

向けていた銃口を降ろす少年。ニコニコと気さくに話しかけてくる。

どうにかして反撃の隙を窺っていた少女は、少年の豹変ぶりに肩すかしを食らった。先ほどまでとは打って変わり、無邪気な笑みだ。銃を手の中で反回転させると、グリップの方を彼女に向ける。

「ほらよ、これはお前のだ。一応バラして点検はしといてやったから直ぐ使えるぞ。信用ならないようなら自分でもう一度見てくれ」

少女はその細い指で恐る恐る銃を受け取った。少年から目を離して枕元を見ると、ナイフの他にもご丁寧に簡単な装備一式が置かれていた。

一番目につくのは少女が好んで使う大型のサバイバルナイフだ。他にも銃やナイフを収める為のホルスターにその他備品が置いてある。

「おっし！さっさとこんな退屈で面倒なだけのテストなんか終わらせよう。俺はさっさと帰って遊びたいんだ」

少年は自分の分の装備を手際よく準備し始めた。

少女も彼に習って頼り無い手つきで装備をしていく。銃をホルスターに戻し、元あった場所に置いてから支度に取り掛かる。

スカートをたくし上げ、ナイフが収まったバンドを太ももに巻いていく少女を見ていた少年の手が止まっていた。

「お前、銃は使わないの？」

少女がこくん、と頷くと少年は少女を穴が空くほど見つめてきた。

「長い黒髪に無口、そしてナイフ…もしかして、お前が噂の？」

少女の支度が終わると、少年が瞳を輝かせながら少女へと迫っていく。年相応のあどけなさが残る顔に、少女は体を僅かに反らして距離をとった。

どんな噂が流れているかは少女も知っていた。物珍しそうに見られるのはなにもこれが初めての経験ではないのだ。慣れていたから特に感情的に反応することもない。

が、どうも少女を見ている少年の目は、今まで彼女に向けられてきた視線とは違った。少女を戒めるような否定的な色は窺えない。

「あ、悪い。別に人様のスタイルに文句を言おうってわけじゃないんだ。ただ疑問なだけでさ、俺の知り合いにも近接戦を主体にしてる少し頭の弱い奴がいるんだよ。けれどそいつだって銃は使っし、ナイフ一本で敵に突っ込もうだなんては思ってないからさ。でも、お前はなんで銃使わないんだ？使えるだろ？」

少年はナイフと銃の両方を手にしていた。そうやって戦えと叩きこまれてきたからだ。少女も知識として知ってはいる。なにやら興奮気味な少年に圧倒されて何も言えない少女。ただ小さく肯定の意味で首を縦に振ることしか出来なかった。

少女は喋りたくないのだと判断したのか、それ以上彼は深追いするような事をしない。

準備が終わると、唯一あるドアのロックが外れる音がした。試験のスタートである。

いよいよ部屋を出るのだ。少女がドアノブに手を置いた。自主的に前衛を務めるつもりなのだろう、少年は彼女のサポートに回る為に直ぐ後に着く。

この部屋を一步でも出た先がどうなっているか、この無機質な扉

を開けてみなければ全く解からない。

「ま、訓練だし死なない程度の軽い気持ちで行こう。っと、そういえばお前の名前聞いてなかったな」

ドアノブに手を掛けていた少女はあまりの緊張感の無さに、つい少年の顔を凝視してしまった。

「……ヤヤ」

一瞬躊躇しながらも、少年に自分の名を明かす。

ここで初めて言葉を発したヤヤの声は、耳を敬てないと聞こえないほど小さなものだった。聞こえないように言っただけだが、自分より大きな手が一方的に少女の小さな手を力強く握り返してきた。

「ヤヤか、よろしく！」

なるべく人の印象に残りたくなかった、だからどんな人とも距離を取ってきた。孤独を望んでいた少女に、この少年は深く入りこんで来る。

彼女の小さな手に返って来る力は感じた事のない温かさを纏っていた。不思議と、不安でいっぱいだった心が落ち着いていく。

少年はしっかりと少女の名前を聞き届けていたのだ。聞き洩らしてなどいなかった。

生涯の、パートナーの名前を。

「よし、それじゃさっさと終わらせようぜ！そつだ、俺は

！

少女、ヤヤは体の痙攣で目を覚ました。

部屋の隅で小さくなって蹲っていたのだが、どうやら眠ってしまったらしい。

筋肉の痙攣だった。緊張と疲労が限界にきていたのだろう。足を抱えてうずくまる手は自然と太もものナイフへ伸びていた。

大きく息を吐く。背中と額に汗が浮かんでいた。体が活動を再び始めたらしい。

息を整え、状況確認へ移る。

「えっと、ここは…」

ヤヤがいるのは、休憩がてら立ち寄った第三障壁と壁に彫られている通路を更に深く進んだ所。第二障壁と第三障壁の間にある数多の倉庫の一つだった。

先の激しい一戦で発令した避難勧告やら火災警報やらの防衛システムのおかげで、目的地まで思う様に行けずに無駄な時間だけがかかっている状態だったはず。

ここの施設内に居たはずの人間と一回もすれ違わないところをみると、職員達の避難は完了した後なのだろう。

顔を上げて安全を今一度確認。

広すぎて自分がどこにいいのかを正確に把握できていないが、しかし今の彼女にはそんなことどうでもよかった。

「戦闘は…出来て後一回か、二回かな。なんとも心もとないなあ」

大きな溜め息の後、太ももの鞘から大振りのナイフを取り出した。鏡の様に透き通る刃に映る自分の姿は、疲れ切った顔をして今にも泣きだしそうだ。たまらず酷い顔の頭だった弱い自分を追いつく。



「ダメダメ！ネガティブになるな私。恐くない。恐くない。もう、一人じゃないんだから早くやることやらないと」

そう自分に言い聞かせ、萎んだ心を振るい立たせる。目を閉じて深呼吸を一つ。それだけでヤヤを呑み込もうとした不安は幾分か落ち着いた。

ナイフを元の鞘に戻すと、目的のものを探し出す為にフラフラの足を引き摺りながら歩み出す。

「もう長くは、保ちそうにないしね…」

彼女は今の自身の体調の異変から、自分の余命にそう判断を下していた。これ以上の連続戦闘は命にかかわるかもしれない。

現在、彼女がいるのは奏風町の地下に展開している施設の深部だ。なんとかして施設の奥へ潜りこむ事が出来たが、本番は寧ろここからだ。しかし、

「…はあ…ハア…おかしい」

警備が甘すぎる。この先は事前の情報が殆んど無い未知の領域にも関わらず、誰ともすれ違わない。予感があった。しかし、気付かないうちに現実から目を反らしていたのかもしれない。

それでも成さなければならぬ使命感だけが彼女を支える。それと同時に蝕んでもいた。いかなる状況でも、ヤヤは諦めようとしないうららう。

足は決して止めない。彼女に託された責務、これだけはなんとかでも全うしなくてはならないからだ。

たとえ、命と差し支えても。そう思っていた。

だが足は体調不良とは別に震え、暗くて怪しい雰囲気飲まれていく。

「…嘘つきだなあ、私」

強い意志で来た筈だった。

けれど彼女の心は揺らいでいた。このまま奥へと潜れば自分はどうんな形であれ死ぬのは目に見えている。

それを覚悟して来たはずだ。だけど今のヤヤの心は揺れていた。任務を達成できたとしても、彼女が生きて帰れる手段は無いに等しい。ここまでの騒ぎになってしまっただけは、当初の計画通り隠密で遂行することは不可能。

気が緩んでいた自分がいけなかったのだ。問題を処理しきれなかった自分の未熟さだけが彼女を更に苦しめる。

「…なんで、いまさらこんなにも生に縋りたくなってるんだろ」

誰に語るでもなくそう呟く。

第三障壁から通ってきた連絡通路をようやく抜けると、とうとう第二障壁まで辿り着いた。どうやら電源が落ちているのか、僅かな非常灯の明かりしかない。

目的の最深部まで、ボロボロになった体でも歩けないほどの距離ではないはずだ。しかし、今までと違いここは最重要施設が山のように或ると聞いている。それ故に、ヤヤに降りかかる危険も大きくなるのは明白だ。

手負いの彼女では、目的の場所に辿りつけるかも定かではない。

「これ以上…下手に戦闘するのは避けないと」

一瞬。もう投げ出してしまうのか、という弱気な心と、責務を果たさねばならない使命感とがぶつかった。そこに、生きて帰りたいという彼女の本心が混ざり合っただけで頭の中はぐちゃぐちゃだ。

死と隣り合わせの状況で、緩んでいた頬をきつく結び直してから現実へ目を戻す。

「せめて、笑われないように、恥ずかしくない働きをしないとダメ」

声に出し続けて自分に強く言い聞かせる。

そうしてヤヤが一步を踏み出した時だった。通路の先から響く足音。

「あ、キヨウちゃん。ホントに来たわよ」

「ツチ、だから言ったろうが。侵入者がここへ来る目的なんてのはな、深部にある例の物くらいだ。にしてもダラダラと待ち伏せしてて正解だな。あと、キヨウちゃん言うんじゃないねえ」

ヤヤは全身の毛が逆立つのを感じた。

ここに来てから何度か戦闘をこなしたが、これほどのプレッシャーを感じたことは無かった。そして、直感で悟る。目の前の闇の中に居る者達は、自分と住む世界がまるで違う生き物であると。

「…ディパーチャ発現者…ッ！」

声が震えていた。

一步一步と近づいてくる悪魔達の足音に、今すぐ逃げ出したい衝動に駆られる。

「お…俺達が解るってことは…やっぱりか。ふん、どおりで守備隊の連中じゃ相手にならないはずだぜオイ」

だが、ヤヤはその場に必死で踏みとどまった。その闇の先に唯一光があるのだ、僅かでも残っている可能性があるのならばもがき続

けるしかない。

しかし、突然現れた闇そのものに光が吞まれてしまうほどに絶望の壁は絶壁となって立ち塞がっている。

「うわあ、この子すつごく可愛い。ここで散らすには流石に勿体無  
いかな…ってあら？この子、確か上層のリストにいた反逆者の子じ  
や…確か、ヤヤ、だったかしら？」

ようやく全容が見えてきた二人組。

ヤヤを目視するや否や、赤いワンピースに黒いロングブーツ、肘  
まである長手袋をした女性が小走りに姿を現した。真っ赤な服以上  
に真っ赤で乱暴に切り揃えた髪も印象的で、見えて目が痛い。ま  
るで、身構えるヤヤを品定めでもするかのように上から下へとねっ  
とりとした視線を這わしていく。

「ふん、なら丁度いい。裏切り者の始末と侵入者の始末がいつぺん  
に出来るわけか」

その女性の横に、ここに来るまでに何度か見てきた兵士の標準装  
備に身を固めた男が進み出る。一見すると普通なのだが、唯一異質  
なのは顔に巻いたターバンの様な黒い布。顔全体を布で覆い、素顔  
を窺うことはできない。

ヤヤの前に現れた二人の見た目は少し特殊だが、ひしひしと感じ  
る危機感が尋常じゃなかった。

「なんて暗くて、悲しい…」

ヤヤは両者の奥底に潜むドス黒い闇をしつかりと感じ取っていた。  
自分の生きる道を闇の世界一つに絞ってた者が纏う独特な気配。  
血の世界で生きる者だけが持つ気配がそこにはあった。

「レンカ、こいつは俺がやるぜ」  
「えー私も美少女と戯りたいのに」

レンカと呼ばれた女性が頬を膨らませて不貞腐れている。キョウちゃんと呼ばれていた男が一步進み出た。

「…そう簡単に、やられるとお思いですか？キョウちゃんさん」

男に対し、ヤヤは太もものホルスターから扱い慣れた大振りのナイフを取り出した。弱った身体で、ナイフを取り落とさないように力を込めて握る。

今の自分では彼らの相手にならないことくらい重々承知していた。それでも、目の前の敵に弱みを見せるわけにはいかない。

「誰がキョウちゃんさんだコラア。俺にはキョウヘイって名があんだよ！」

それは失礼しましたと、ヤヤは律儀にも頭を下げる。

「ム力つく奴だ…時にテメエ、随分と体調が悪そうだな。そんな瀕死の状態で俺と殺し合う度胸は認めてやるが、俺はそこいらの雑魚とは訳が違うぞ？」

あっさり体調が悪いのを見破られたが、表情にだけは出さまいと奥歯を噛む。

「お気づかいなく。生憎とこの状況…どちらにしろ死ぬ気で前進するしかないんです。どうせ死ぬ運命なら、そこに至るまでの手段は選びません。生きて務めを全うするだけです」

ここで奇跡が起きてこの絶壁を乗り越えたとしても、次の瞬間を迎えることは出来ないかもしれない。

自分以上の力量を持つであろう二人に、無傷で勝てるなどはなから思っていなかった。

殺り合う気満々のキヨウヘイとヤヤを見て、レンカはつまらなそうに壁を背に静観体勢に入った。

それを横目で確認すると、最初にヤヤが動いた。迎え撃つキヨウヘイは武器らしい物を構えない。それどころか微動だにしていない。

「発現者が相手なら出し惜しみをしている余裕はない…ない！」

こみ上げてくる吐き気と体を襲う激痛に耐えながら、スイッチを入れた。彼女の顔を隠していた前髪を一気に掻き上げる。

開ける視界。そして、キヨウヘイをその目で捉えた。

「…ん？」

キヨウヘイがソレを感じた時には、数十メートル先にいたはずのヤヤが自分の懐に潜りこんでいた。胸元を見ると、大型のナイフが深々と急所を突いている。

「つぐうつ…、残り、一人イイイイ！」

悲痛の声を漏らしたのはヤヤの方だ。

キヨウヘイに何かされたわけではない。頭痛と身体の痛みが気が狂いそうになる呑みこんだ。高揚した身体に残る肉の感触をさつさと頭から追い出し、未だ余裕の表情でいるレンカの方へ標的を変える。

しかし、

「へえ、種は解らねえが中々珍しい力を持つてるみたいじゃねえか」  
頭上から聞こえる曇った声に、ついそちらを向いてしまった。

「え」

はつきりした声が降り注いでくる。何故、とヤヤが意識を戻そうとしたが遅かった。

溝に突き刺さる重たい衝撃。自分の目線が長身なキヨウエイのものと同じ高さにあると思つた時には景色は回転し、ヤヤの細い体は来た道を何メートルも吹き飛ばされていた。

殴られたと認識してから体の力が抜けていく。霞む視界。視線の先にいるキヨウエイの左胸には確かに深い傷がある、なのに何事も無かつたかのように動いていた。

肉を裂く感触が、手の中にあるナイフへ確かにあつたはずだ。

だがキヨウエイは悠前と立っている。

「へえ…キヨウエイちゃんの鉄拳を食らってもバラバラにならない子がいるなんて、益々勿体無いわね」

今まで黙って事の成り行きを見守っていたレンカが、まだ息のあるヤヤに感嘆の声を漏らしていた。

(…油断、した)

意識が飛びそうな程の衝撃に加えて、全身を激痛が襲った。あまりの痛みに、泣き叫びそうになるのを呑みこむ。

「いいや、直撃はしてねえな。テメエ、殴られる直前にも何かしたな？」

「…げほ…さ…さあ…なんの…こ、とですか？」

キョウヘイは感覚的に彼女が何かしたのに気が付いていた。

絶望がさらに上乘せされ、壊れかかった少女の華奢な体を潰しにかかる。

「全貌はまだ見えねえし面白そうな力ではあるが…まだまだ荒削りだな。もう少し鍛えていれば楽しい殺し合いが出来たろうによ」

一度拳を収めたキョウヘイだが、手首を数回捻ってからヤヤを見下ろす位置までやって来た。

(つく、やつぱり…ダメ…だった。場数が違いすぎる！)

痛みを呑みこむのに必死の中、自分へと悪態つく。意識が切れそうになるのを必死で繋ぎとめるが、もうこの状況では二人を相手にすることなど不可能だ。

「残念だけど…ゴメンね」

倒れる彼女の頭の先まで来たレンカが耳元で囁いた。彼女は本気で残念そうな顔をして、切れ長の目を少し垂らしている。

「俺達を裏切らずにそのまま訓練していけば良い財産になっただろうが、これも仕事だ。後輩の誼としてこの一撃で楽にしてやるよ。ネタとしては中々に面白いものを見させてもらったしな」

ヤヤの頭を踏みつぶそうと、キョウヘイはその大きな足を持ち上



げた。そんなハンマーのような足で潰されれば、頭の原形すら残らないだろう。一巻の終わりだ。

だが、こんな状況でもヤヤは薄らと笑っていた。

「はは…昔の私なら…ここで…諦めてたかもしれない…でも、まだ死ぬには早、いのよ！」

昔とは違うんだ。

投げ出すのは簡単だが、ヤヤは生へ必死に食らいつくことを選択した。キョウヘイのその太い足がヤヤの体を貫く刹那、ヤヤの姿が消えた。

そのまま、床だけを足が豪快に踏み抜く。

「あーあ…逃げられちゃったわね」

「つち、面倒な小娘が。そこまでして苦しみながら死にてえのかよ…行くぞ、レンカ」

キョウヘイは鉄の床から足を引き抜くと、レンカを連れ たつて来た道を歩きだした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2724x/>

---

シュミレーション・リンク

2011年10月28日18時10分発行